阪大NOW

地域に生き世界に伸びる

No.110
2009
4月号

トピックス

卒業式・大学院学位記授与式挙行
入学式挙行

クローズアップ

ナノサイエンス総合デザイン力の育成をめざして
ーナノサイエンスデザイン教育研究センターー

大阪大学広報誌

2009 4月号
No. 110

目　次

トピックス …… 2
クローズアップ …… 4
役員室だより …… 8
ナウスペシャル ……24
キャンパスニュース ……26
記念講義 ……48
表 彰 等 ……53
人　　事 ……56
訃　　報 ……73
インフォメーション ……75
海外拠点だより ……80
海外レポート ……82
交流協定大学 ……86
クラブ＆サークル ……87
トピックス ……88

表紙写真：緒方洪庵先生像

適塾隣の公園に建つ、適塾を開いた緒方洪庵の座像（大阪北浜船場ライオンズクラブ寄贈）。制作は、大阪大学卒業式で成績優秀者に贈られる楠本賞メダルの作製も手がけられた彫刻家の川合敏久氏で、台座の題字は、緒方洪庵の直系の子孫である緒方惟之氏。

表紙デザイン：株式会社ココティエ

平成２０年度卒業式・

平成２１年度入学式挙行

大学院学位記授与式挙行

平成20年度卒業式・大学院学位記授与式が、総勢6,424名の卒業生・修了者を迎え、3月24日(火)に大阪市中央体育館で挙行され、3,577名に学士の学位、2,131名に修士の学位、119名に法務博士（専門職）の学位、597名に博士の学位が授与されました。

式は、受領代表者への学士学位記授与に始まり、次に、楠本長三郎第2代総長の退官を記念して創立された楠本奨学会から各学部・学科の優秀な卒業生に贈られる「楠本賞」が22名に授与され、引き続き、修士、法務博士（専門職）及び博士の学位記が受領代表者に授与されました。

また、大阪大学OBによる「記念講話」として、今年度は、樋口泰行さん（マイクロソフト株式会社代表執行役社長・昭和55年工学部卒業）にご講話いただきました。

昨年度の卒業式については午前と午後との2部制で大学院学位記授与式は卒業式の翌日に行っておりましたが、今年度から同時に挙行されることになりました。

総長式辞　42～44ページに掲載。

（総務部総務課）

樋口氏の記念講話

平成21年度入学式（学部、大学院）が4月1日(水)、午後1時30分から大阪市中央体育館で挙行されました。昨年度までは学部の入学式のみ行ってきましたが、今年度からは大学院の入学式も同時に行うこととなりました。

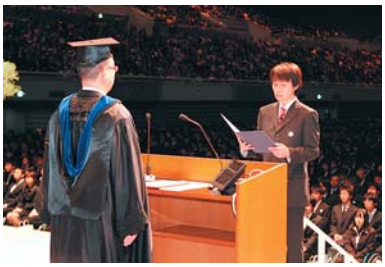
式では、学部入学生3,427名を代表して、理学部の日比野晃裕さんが、大学院入学生2,931名を代表して、大学院歯学研究科の中村祐己さんがそれぞれ宣誓を行いました。

続いて、鷲田清一総長の告辞及び部局長等の紹介の後、入学を祝し本学混声合唱団が「大阪大学学生歌」を、男声合唱団がシュトゥンツ作曲「フライエ・クンスト」をそれぞれ合唱し、また本学交響楽団がエルガー作曲「威風堂々」を演奏し、閉式となりました。

引き続いて、学部入学生を対象にオリエンテーションが行われ、学生生活全般についての説明の後、本学応援団による新入生歓迎エールがあり、日程を終了しました。

総長告辞　45～47ページに掲載

（総務部総務課）



ナノサイエンス総合デザイン力の育成をめざして

ナノサイエンスデザイン教育研究センターの発足

ナノサイエンスデザイン教育研究センター長　伊　藤　　正

■ ナノ理工学の特徴とその人材育成

ナノサイエンス・ナノテクノロジーは、10億分の1メートルを単位とする微小世界（原子数にして数十個から数万個の集まり）で実現する新奇な科学現象の発見・理解とそれらを活用したナノスケール新機能・新材料の発見・創製、そのための超微細加工技術、超精密測定といった最先端科学技術の総称であり、今日の自然科学技術の根幹をなす要素科学技術として学際融合的に発展し続けています。その特徴は分野の枠を超える開放系であり、今日の萌芽研究が明日の未来科学技術のキーテクノロジーに育ちうるので、複合学際的な進化への迅速な対応が求められます。このような特異な性格を持った科学技術の人材育成のために大学院レベルで必要な要素として、各人の専門性の保持とナノ基本技術のマスター、専門外への関心と理解、他領域への応用能力、新しい学問領域の創出能力などが挙げられます。すなわち、応用力、学際力、構想力と、これらを統合した総合デザイン力の育成が求められます。

2002年に設立されたナノサイエンス・ナノテクノロジー研究推進機構は、このような学際性の極めて強い先端分野に関する研究推進、国際・産学連携、人材育成、広報活動を、部局を横断して組織的かつ戦略的に統括し、全学的な教育研究の推進を図ってきました。この中の人材育成活動として多くの実績を上げてきたナノ理工学の部局横断教育「ナノ高度学際教育研究訓練プログラム」を基に、計算機材料デザイン（CMD: Computational Materials Design）チュートリアル活動を加えて、昨年12月1日に大阪大学ナノサイエンスデザイン教育研究センター（Institute for NanoScience Design）が発足しました。ここでは、これまでの人材育成活動の実績と今後の狙いを含めて新センターの活動についてご紹介します。

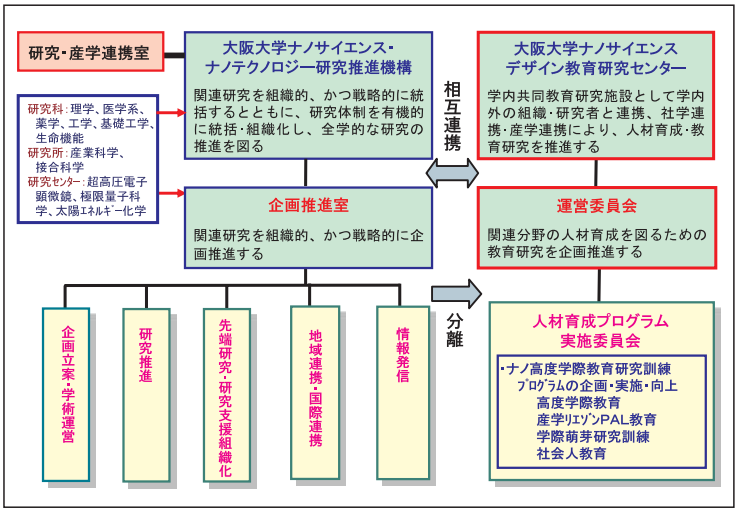


図1：大阪大学におけるナノ理工学研究教育の統括的実施組織

■ これまでのナノ理工学人材育成の実績

2004年度に発足した「ナノ高度学際教育訓練プログラム」は科学技術振興調整費新興分野人材養成プログラムの支援を得て、いち早く応用力、学際力、構想力を伸ばす以下のプログラムを実施してきました。その特徴は、現在既に利用されている応用技術の各論の知識習得よりは、将来に役立つ基礎科学技術に対する深い洞察力の育成に重点をおき、さらに創造力を伸ばす先端機器を用いた実践実習を重視しています。なお、詳細については、阪大NOW2006年2月号のクローズアップもご覧下さい。

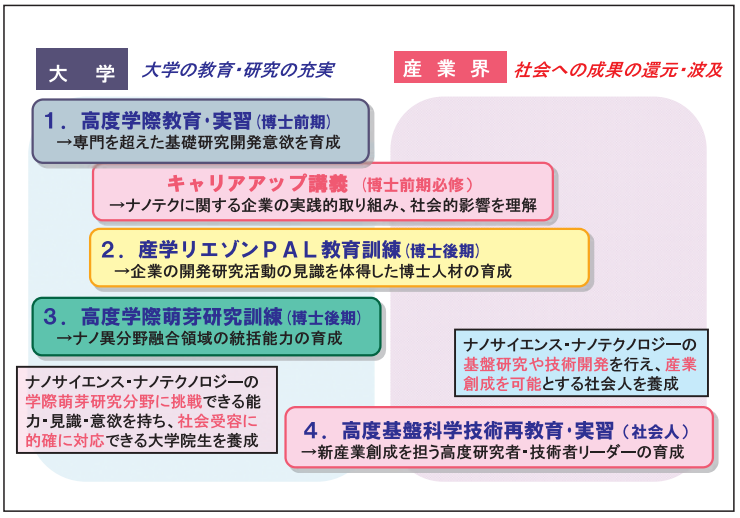


図2：ナノ高度学際教育研究訓練プログラムの概要

(1) 大学院博士前期課程：理、医、薬、工、基礎工、生命機能の各研究科に跨る開講科目約100科目を5つのコースに再編統合し、計算機科学、エレクトロニクス・材料、超分子・バイオ、構造・機能解析、ナノ光学に分類した知識を習得させると共に、夏季集中実習と企業におけるナノテク活用事例を紹介するナノテクキャリアアップ特論（必修）を加えた1年間のプログラム（9ないし10単位）で、この5年間に5研究科266名が修了しました。大学院高度副プログラムに指定されています。

(2) 大学院博士後期課程：学内から提案された学際萌芽的な課題と企業から提案される比較的応用に近い課題に対して異分野から大学院生を募り、企画討論、自主研究、報告活動を実施させてナノ領域の学際研究の企画・実施能力を育成するプログラムで、前者は「高度学際萌芽研究訓練」、後者は「産学リエゾンPAL教育訓練」と呼ばれる博士後期課程学生のキャリアアップを狙いとする1年間の副専攻型プログラムです。プロジェクトリーダーになれる素養を持った博士人材の育成や、産学が連携して企業研究開発活動の見識を持った博士人材の育成を図るものです。この4年間で44名が修了しています。

(3) 社会人教育：前期課程と同じ5コースについて、各コース毎週1回3時間、年間30回の夜間講義（遠隔配信）と集中実習（スクーリング）からなる1年間の大学院高度科学技術再教育プログラム（9ないし10単位）です。企業のプロジェクトリーダーとして新産業を担える高度研究者・技術者の育成をめざすもので、中之島センターをキー教室に、最大10カ所のサテライト教室を結んだ遠隔講義の双方向通信システムにより、インタラクティブに講義・質問が行えるようになっています。修了時には科目等履修生高度プログラム履修修了認定証が総長名とセンター長の連名で交付されます。この5年間で388名が修了しています。

以上3つのプログラムでは、履修者総計は1100名を超え、修了者も698名に達しています。特に、これらプログラムの大きな特徴は設計、加工、計測、機能に跨る大学院レベルの実習・演習科目の付加にあり、大学院生・社会人を合わせて830名余りの受講生が修了しています。主に大学院生向けには学内の多数の協力教員の支援の下に各研究室機材を用いた集中実習を夏休みに実施しています。一方、ナノプログラム独自の実習用機材をナノサイエンスデザインラボラトリー（通称：ナノラボ）に整備し、社会人教育を含めて随時実習を実施しています。

(4) 計算機材料デザインチュートリアル：6年間に亘り実施されている計算機マテリアルデザインをテーマとした実習プログラムで、大学院生・社会人を対象として、主に3月、9月に5日間実施されます。ナノプログラム（1），（3）の第1コース実習と同時開催され、ナノプログラム受講生以外に約400名を養成しています。海外実習ではインドネシア、フィリピンなどでの開催実績があります。

■ プログラムの評価と今後の方向性

大学院博士前期課程必修の「ナノテクキャリアアップ特論」は、吹田・豊中間の双方向遠隔中継の実施により、毎年100名以上の学生が単位を取得していますし、夏期集中実習は自分の専門外の実践手法を異分野学生とともに学べ、この5年間で修了者は400名を超えています。また、研究科・専攻の枠を超えて学際的に講義を履修しようとの動きは確実に増えています。後期課程プログラムは本来の研究活動時間の一部を割いて行うことから、学生の高いモティベーションや指導教員の理解が不可欠ですが、異分野の経験や企業における研究開発の一端を自ら体験し、本来の研究にも役立つ結果を得た学生も少なくなく、就職状況から見て、確実なキャリアアップに繋がったと思われます。一方、社会人教育は、基礎から応用までが一貫して聞ける、インタラクティブに納得できる質問ができる、新しく大学や講師の先生との繋がりができる、他社からの同級生と親しくなれる（企業間ネットワークの形成）等の受講生からの評価とともに、受講生を送り出した企業からは、ナノ科学技術分野の全体を鳥瞰できる、若手～中堅の視野拡大と向学心向上に有効、新規分野開拓能力の獲得に役立つなどの評価を得ています。

一方、外部有識者の評価では、長期的展望に立つ高度人材育成の価値あるプログラムとして認められるとともに、今後は副専攻としての定着と資格化が期待され、専門機関との連携でロードマップの活用による要素科学技術の位置づけや社会受容・倫理面教育の強化、産学間・大学間連携、国際連携を通じて、日本のナノ理工学分野の人材育成教育システムへの発展を求められています。同時に、国に対しても有用な活動に対する継続的な支援が期待されています。

そこで、これまでのプログラムではどちらかといえば個別に伸ばしてきた応用力、学際力、構想力を、今後はより統合的に捉える総合デザイン力の育成に力を注ぎます。デザイン力は「異なる考え・手法・分野を組み合わせて新しいナノ理工学分野を生み出す智恵」になります。それを通じて、複眼的見方、社会適応性、国際感覚を持つ博士レベルの人材の育成とともに、分野横断的にものづくり新産業の創成を担える社会人若手の養成を目標とします。

■ センター組織の概要と支援組織の整備

ナノプログラムを継承し、その継続的発展を図るための学内部局として、昨年12月1日にナノサイエンスデザイン教育研究センターが創設されました。このセンターは理学、医学系、薬学、工学、基礎工学、生命機能の各研究科、産研、接合研、超高圧電顕・極限量子科学、太陽エネルギー化学の各センターなどのナノ関連部局の協力を得て組織されており、従来のナノサイエンス・ナノテクノロジー研究推進機構とリンクした形のセンター運営委員会の下に6つの部門が設置されています。従来の大学院・前期課程プログラムを実施すると共に、プログラム全体のコーディネートを担当する**学際教育デザインコーディネーション部門**、総合デザイン力実践実習を担う**学際融合リサーチトレーニングデザイン部門**、大学間・国際連携を担う**グローバルネットワークデザイン部門**、産学連携相互人材育成を担う**社会連携デザイン部門**の以上4つの人材育成企画・実施部門と、講義、実習活動でこれらを支え、かつ新たな博士後期課程プログラムのテーマを提供する**物質・分析・機能デザインコアー部門**、**計算機マテリアルデザインコアー部門**の2部門を加えた6部門からなります。専任教員は従来の7名から後に述べる特別教育研究経費による5名（教授、准教授、講師各1名、助教2名）に縮小されますので、兼任教員の活動がより一層重要となります。現在の兼任教員数は発足時の24名ですが、今後規模の拡大を目指します。センターのナノプログラム事務局、豊中サテライト教室、ナノサイエンスデザインラボラトリーは豊中地区基礎工G棟の全学向けオープンラボに、吹田サテライト教室は吹田地区産研第1研究棟オープンラボに設置されています。

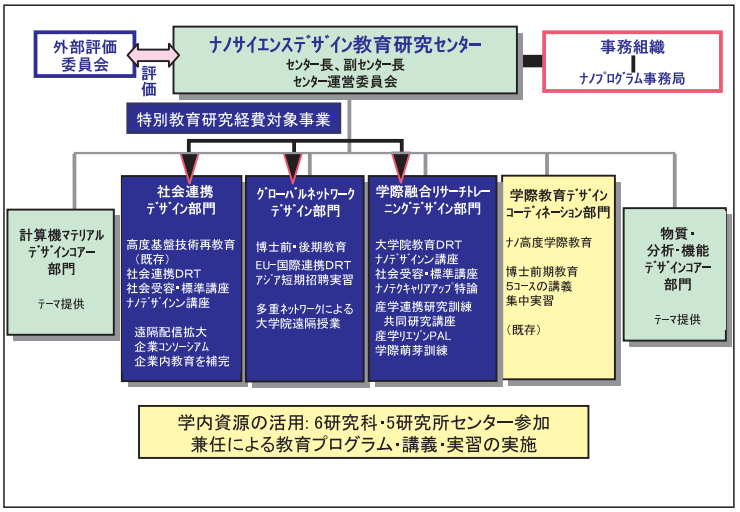


図3：センター組織と部門別の役割

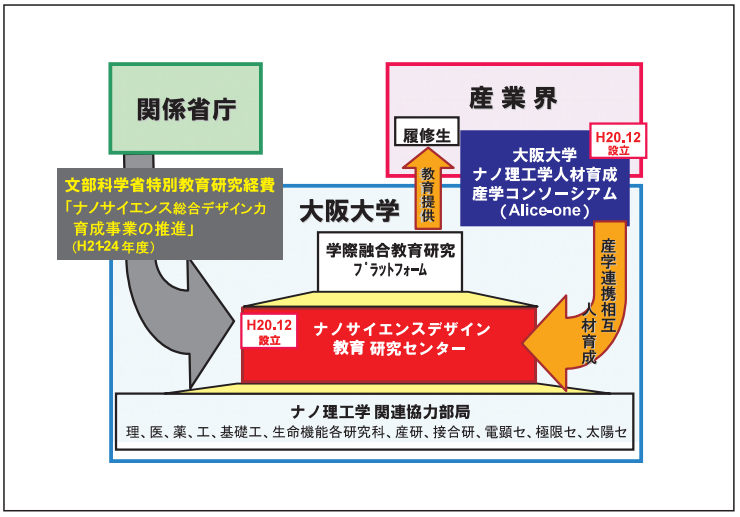


図4：国、企業、大学が一体となったナノ理工学人材育成

社会人教育に関しては、これまでの科学技術振興調整費の支援が終了したことから、今年度より有料化が実施されました。これに伴い、人材育成プログラムに対する企業側の一層の理解と支援、企業側からの助言、提言等を頂戴するために、一般社団法人大阪大学ナノ理工学人材育成産学コンソーシアム（略称ALICE-ONE）が昨年末に結成されました。未曾有の不況下での立ち上げとなりましたが、これまでに19社の参加を得て、産学連携相互人材育成として社会人教育の新年度入学者50名を強力にバックアップします。

■ ナノサイエンス総合デザイン力の育成

このセンターは、大学院レベルのナノサイエンス総合デザイン力を育成する実習重視型の学際副専攻の創設をめざしており、大学院生・社会人を対象に、部局間連携はもとより、産学連携、国内外の大学間連携により、日本のものづくり高度人材育成を先導することを目的としています。幸い、2009年度より4年間の予定で、特別教育研究経費－教育改

革―「ナノサイエンス総合デザイン力育成事業の推進」が採択され、センターが実施するナノ高度学際教育研究訓練プログラムの教育・事業内容の拡大発展が図れることとなりました。

博士レベル人材が持つべき総合デザイン力（応用力、学際力、構想力）育成とともに産学連携相互人材育成の考えを取り入れ、「社会受容、産業応用」を視野に入れた「総合デザイン力育成研究訓練（デザインリサーチトレーニング：DRT）」を企画・実施し、広範な領域をカバーする「複眼的ものの見方と社会適応性の高い博士人材の育成」と「ものづくり新産業創生を担う社会人若手の教育」の実現をめざします。「大学院副専攻を形成」し、併せて「社会人教育を国内で共有」することにより、「日本の科学技術を担うものづくり産業の将来」に向けての博士レベルの教育改革を先導します。

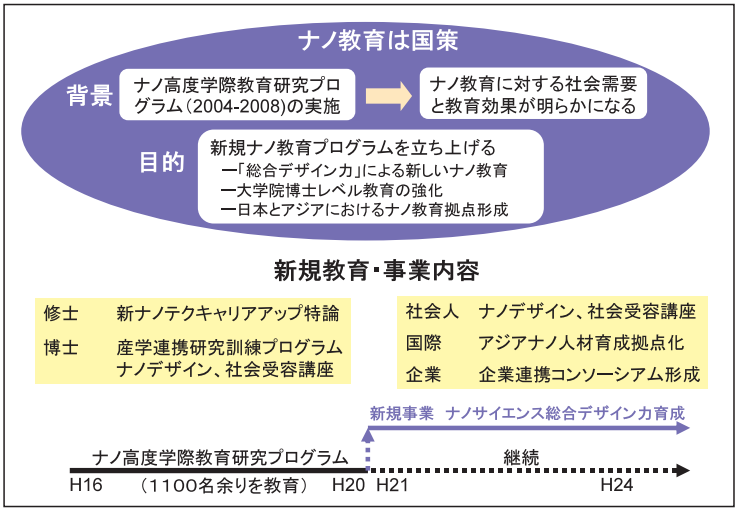


図5：ナノサイエンス総合デザイン力育成事業の推進

具体的には、大学院ナノプログラムの副専攻化、ナノテクキャリアアップ特論の充実、他大学への配信実現を担う大学院教育 DRT（博士前期課程院生対象）、ロードマップ提示とその中で自己の研究の位置づけを訓練するナノデザイン講座開設、学生に加えて企業若手も共同参加できる産学連携研究訓練の新設を実施する学際融合 DRT（博士後期課程院生対象）、産学相互連携による社会受容、産業応用を視野に入れた社会受容・標準化講座の開設、コンソーシアムの協力によって企業内教育ともリンクできる社会人教育を実現する社会連携 DRT（社会人対象）などの総合デザイン力を育成し、既存のナノプログラムとのシナジー効果を利用します。その中で、社会受容・ナノリスクに関する共同研究への発展をめざします。国際・大学間 DRT では、社会人教育の全国ネットを活用した大学院・社会人教育の国内他大学との連携推進、ヨーロッパのナノネットワークを通じた共同プログラム開発、アジア地域との共同大学院や現地チュートリアル、大学院生・若手研究者の招聘実習等によるアジア人材育成拠点形成をめざします。一方、整備された実習機器については、本学のナノ理工学分野の教職員、大学院生、社会人受講生がこれら機器を利用して実践実習を推進すると共に、本分野の人材育成に資する教育研究活動への有効利用を図ります。

プログラムの実施とセンターの創設・運営に際しては、学内外の多数の方々の支援、助言を頂いています。これらの方々の理解と貢献の上に学際横断人材育成活動が成り立っていることに感謝し、今後の一層の協力をお願いいたします。

大阪大学のナノ理工学分野では、産業科学研究所附属産業科学ナノテクノロジーセンターなど、主に研究面での先端技術開発と産学連携を担う組織があります。人材育成、萌芽研究、社会受容などを謳うナノサイエンスデザイン教育研究センターはこれらと相補的な役割を果たします。大学院部局横断型学際教育と基礎理工学に根ざした大学院レベル社会人教育は、大阪大学のユニークな大学院教育改革と新しい産学連携の枠組みを誘起するものです。このような人材育成活動は一朝一夕にしてなるものではなく、多くの方々の努力と思い入れの結晶を今後どのように生かすか、人材育成を最大の使命とする大学全体の大きな課題と言えます。

ナノプログラム　http://www.sigma.es.osaka-u.ac.jp/pub/nano
センター　http://www.insd.osaka-u.ac.jp （整備中）

いとう・ただし　プロフィール

専門：物性物理・基礎、半導体ナノ構造の光物性実験、レーザー分光。東北大学理学部助手、助教授、同工学部教授を経て、1998 年より大阪大学大学院基礎工学研究科教授。2004 年よりナノサイエンス・ナノテクノロジー研究推進機構企画推進室長。2008 年よりナノサイエンスデザイン教育研究センター長。

役員室だより

2009.4　Vol.29

大学の動き

事務局の組織改編

法人化前の体制を引き継いだ現行の事務体制を見直し、法人化にふさわしい事務体制とするため、平成21年度より事務局長制を廃止し、理事全員が事務職員と協働し、大学運営にあたる体制を取ることとしました。具体的には、①総長が理事のうちから指名する事務担当理事を置くこと、②事務局を本部事務機構に改編すること、③事務担当理事は本部事務機構及び部局の事務部等の総括及び調整を行うこと、④各部長は総長及び担当理事の命を受け、部の事務を処理することとしたものです。

事務改革の取組み状況

事務改革については、事務改革策定ワーキングを昨年の9月に立ち上げ、事務改革に熱意を持ったワーキングメンバー56名により、事務処理業務の効率化を目指した具体的方策（業務の標準化・一元化、IT化による事務改革等）を検討してきました。

4月1日からは、大学が実現すべき事務改革の企画立案を行うセクションであるPMO（Project Management Office）準備室を立ち上げ、6名の専任職員（ワーキングメンバーから4名、情報推進部から2名）が中心となって、本格的に事務改革を推進していくこととしました。

第4回経営協議会を開催

平成20年度第4回経営協議会を3月26日(木)に、中之島センターで開催しました。学外委員8名、学内委員13名が出席し、2時間にわたり審議、意見交換が行われました。特に教員の定年延長、平成21年度の各室の主要取組事項（9～11ページ）については、多くの委員から意見、要望が出されました。また、経営協議会はこれまで中之島センターでの開催だけでしたが、学外委員に各キャンパスのことを知っていただくために、平成21年度は学内キャンパスで開催することも予定しています。開催日程は下記のとおりです。

第1回　平成21年6月16日(火)
第2回　〃　9月15日(火)
第3回　〃　11月30日(月)
第4回　平成22年3月26日(金)

平成２１年度　年度計画主要事項

平成21年度 年度計画主要事項 ： 大阪大学

1. 業務運営
2. 財務
3. 人事労務
4. 評価
5. 広報･社学連携
6. 教育･情報
7. 研究･産学連携
8. 国際交流
9. 附属病院

地域に生き世界に伸びる

OSAKA UNIVERSITY 1

1

【1. 業務運営】

(1) 戦略性と迅速な意思決定に基づいた大学運営
- 大阪大学グラウンドプラン・大阪大学活動方針をベースに、第二期中期目標・中期計画を視野に入れた大学運営
- ８室、３整備本部、４推進本部に基づいた迅速な意思決定体制の構築

(2) 第二期中期目標・中期計画の策定
- 第一期の達成状況、評価等の検証を踏まえた第二期中期目標・中期計画の策定

(3) 教育研究組織の整備と定員配置
- 社会のニーズに対応した教育研究組織の設置
- 共同利用・共同研究拠点の設置を目指した附置研究所等の組織の整備
- 円滑な教育研究等を支援するための留保ポストの重点的な配分

OSAKA UNIVERSITY 2

2

【1. 業務運営】

(4) キャンパス整備・施設マネジメントの一層の推進
- 老朽建物の改修、目的積立金による外国人研究者宿泊施設・研究棟・動物実験棟の整備
- リーディングプロジェクトの推進、施設の維持管理の強化、バリアフリー化の推進
- 「キャンパスマスタープラン」に基づいたキャンパス環境の整備、箕面地区キャンパスマスタープランの策定
- エコキャンパスの実現のための省エネ対策の推進

(5) 安全衛生管理体制、安全衛生教育の充実
- 安全衛生管理部と関連４センターとの連携強化による安全衛生管理体制と教育体制の充実
- 化学物質・高圧ガス・核燃料物質・病原性微生物の管理強化、ホルムアルデヒド対策の早急な実施

(6) 事務改革の推進
- 制度改革や標準化・ＩＴ化・一元化による業務の効率化施策の策定、実施

OSAKA UNIVERSITY 3

3

【2. 財務】

(1) 長期的な財政計画の策定と財務基盤の整備に向けた検討
- 中長期予算の財務構想に基づく予算配分の見直しに向けた具体案の策定
- 合同基金検討ＷＧ基本方針に沿った基金室の設置

(2) 総長の指導性の強化のため、総合的・戦略的な資源配分体制の充実
- 大学基盤推進経費の財源確保

(3) 学内資金貸付制度による目的積立金の有効活用

(4) 余裕資金を活用し、国債等による長期・短期運用の効果的な組み合わせによる資金運用

OSAKA UNIVERSITY 4

4

【3. 人事労務】

(1) 教員の高年齢者雇用への対応

教員の高年齢者雇用について、平成23年4月からの実施に向けて、具体的な検討を進める。

(2) 職員の資質能力の向上

職員の資質能力の向上及び専門性向上を図るため、職員研修の改善充実、人材登用制度の改善等に努める。

OSAKA UNIVERSITY 5

5

【4. 評価】

(1) 機関別認証評価への対応

平成２１年度に受審する機関別認証評価に関し、評価室が中心となり、各室、部局の協力を得ながら自己評価書を作成し、また、訪問調査等に対応する。

(2) 教員評価

平成２０年度に各部局が独自に策定した教員評価基準に沿って、教員評価を実施するよう促し、平成２１年度末までに全部局での教員評価の実施を目指す。

(3) 中期計画の完全達成に向けての活動

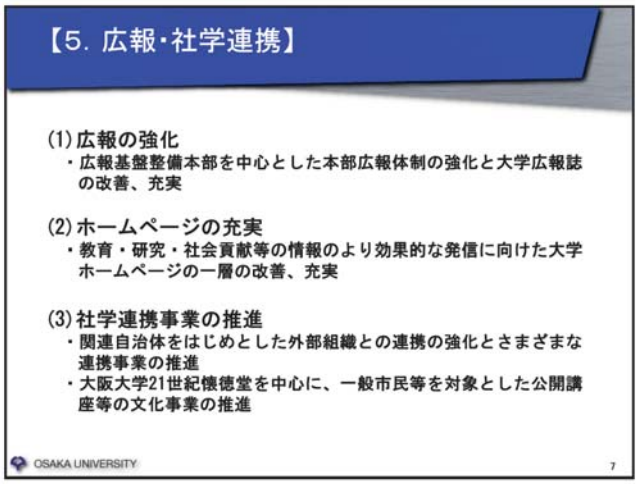
平成２１年度で第一期中期計画期間が終了するため、完全達成できるよう、計画ごとの進捗状況の検証を継続する。

(4) 達成状況評価

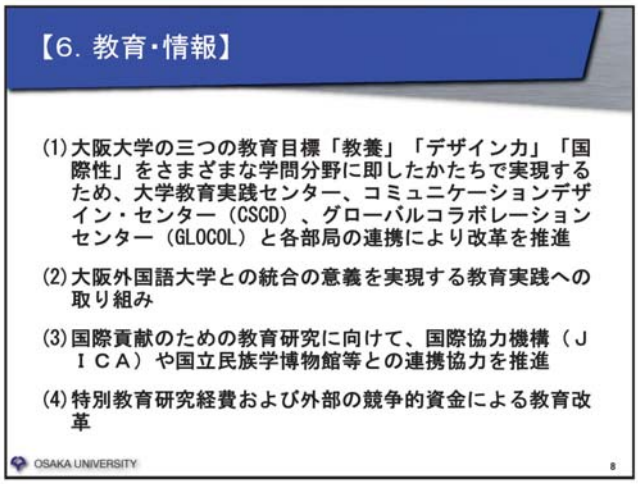
平成２０年度計画の達成状況とともに、中期計画が達成できるかどうかの観点をより重視して評価する。

OSAKA UNIVERSITY 6

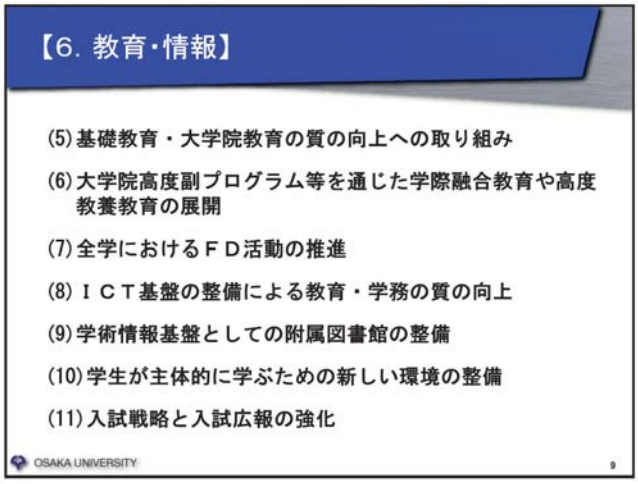
6


【5. 広報・社学連携】
(1) 広報の強化
・広報基盤整備本部を中心とした本部広報体制の強化と大学広報誌の改善、充実
(2) ホームページの充実
・教育・研究・社会貢献等の情報のより効果的な発信に向けた大学ホームページの一層の改善、充実
(3) 社学連携事業の推進
・関連自治体をはじめとした外部組織との連携の強化とさまざまな連携事業の推進
・大阪大学21世紀懐徳堂を中心に、一般市民等を対象とした公開講座等の文化事業の推進
OSAKA UNIVERSITY
7

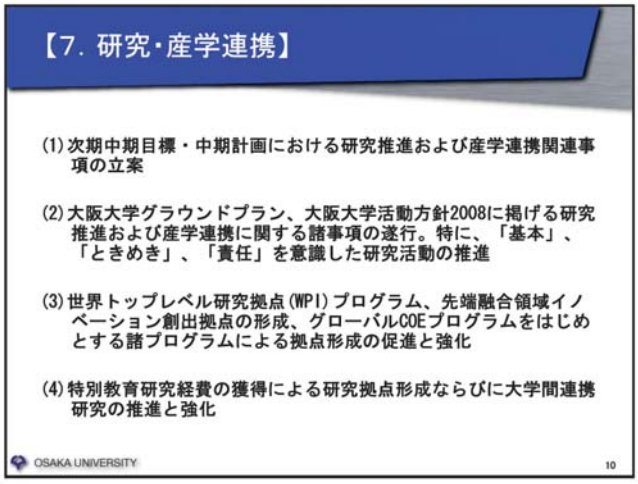
7


【6. 教育・情報】
(1) 大阪大学の三つの教育目標「教養」「デザイン力」「国際性」をさまざまな学問分野に即したかたちで実現するため、大学教育実践センター、コミュニケーションデザイン・センター（CSCD）、グローバルコラボレーションセンター（GLOCOL）と各部局の連携により改革を推進
(2) 大阪外国語大学との統合の意義を実現する教育実践への取り組み
(3) 国際貢献のための教育研究に向けて、国際協力機構（ＪＩＣＡ）や国立民族学博物館等との連携協力を推進
(4) 特別教育研究経費および外部の競争的資金による教育改革
OSAKA UNIVERSITY
8

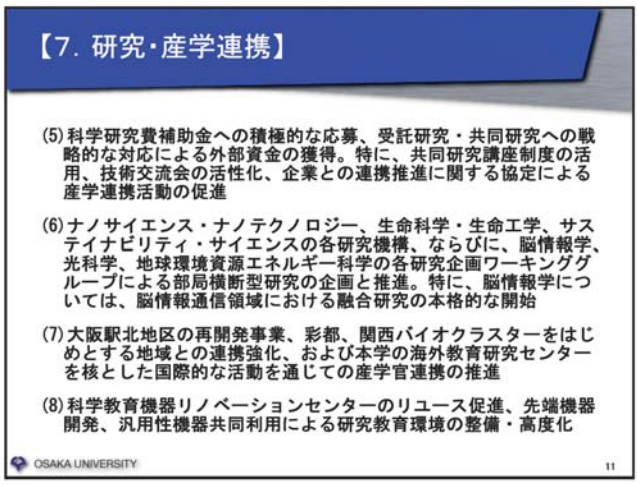
8


【6. 教育・情報】
(5) 基礎教育・大学院教育の質の向上への取り組み
(6) 大学院高度副プログラム等を通じた学際融合教育や高度教養教育の展開
(7) 全学におけるＦＤ活動の推進
(8) ＩＣＴ基盤の整備による教育・学務の質の向上
(9) 学術情報基盤としての附属図書館の整備
(10) 学生が主体的に学ぶための新しい環境の整備
(11) 入試戦略と入試広報の強化
OSAKA UNIVERSITY
9

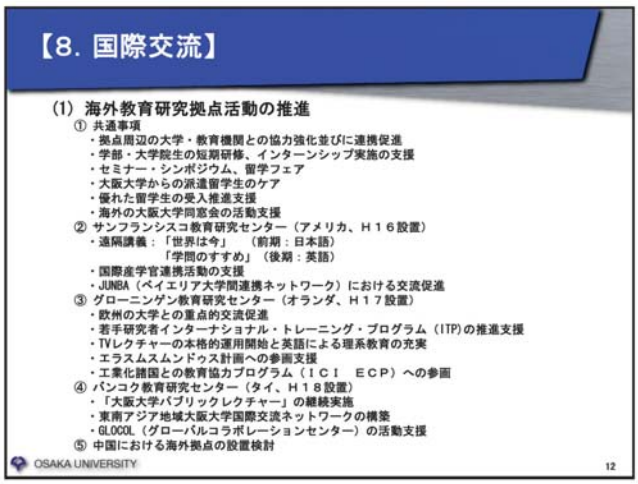
9


【7. 研究・産学連携】
(1) 次期中期目標・中期計画における研究推進および産学連携関連事項の立案
(2) 大阪大学グラウンドプラン、大阪大学活動方針2008に掲げる研究推進および産学連携に関する諸事項の遂行。特に、「基本」、「ときめき」、「責任」を意識した研究活動の推進
(3) 世界トップレベル研究拠点(WPI)プログラム、先端融合領域イノベーション創出拠点の形成、グローバルCOEプログラムをはじめとする諸プログラムによる拠点形成の促進と強化
(4) 特別教育研究経費の獲得による研究拠点形成ならびに大学間連携研究の推進と強化
OSAKA UNIVERSITY
10

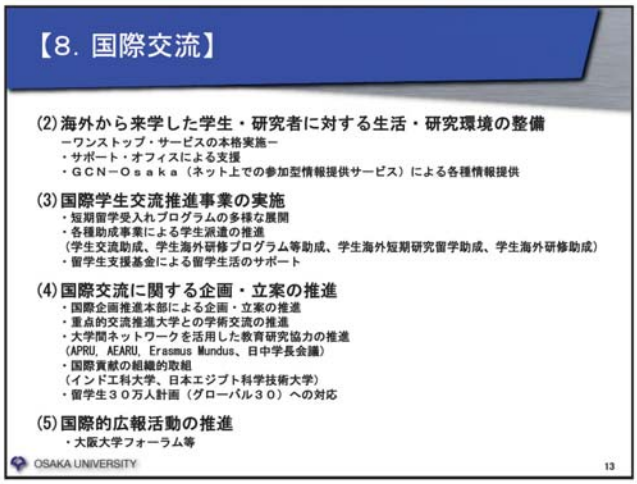
10


【7. 研究・産学連携】
(5) 科学研究費補助金への積極的な応募、受託研究・共同研究への戦略的な対応による外部資金の獲得。特に、共同研究講座制度の活用、技術交流会の活性化、企業との連携推進に関する協定による産学連携活動の促進
(6) ナノサイエンス・ナノテクノロジー、生命科学・生命工学、サステイナビリティ・サイエンスの各研究機構、ならびに、脳情報学、光科学、地球環境資源エネルギー科学の各研究企画ワーキンググループによる部局横断型研究の企画と推進。特に、脳情報学については、脳情報通信領域における融合研究の本格的な開始
(7) 大阪駅北地区の再開発事業、彩都、関西バイオクラスターをはじめとする地域との連携強化、および本学の海外教育研究センターを核とした国際的な活動を通じての産学官連携の推進
(8) 科学教育機器リノベーションセンターのリユース促進、先端機器開発、汎用性機器共同利用による研究教育環境の整備・高度化
OSAKA UNIVERSITY
11

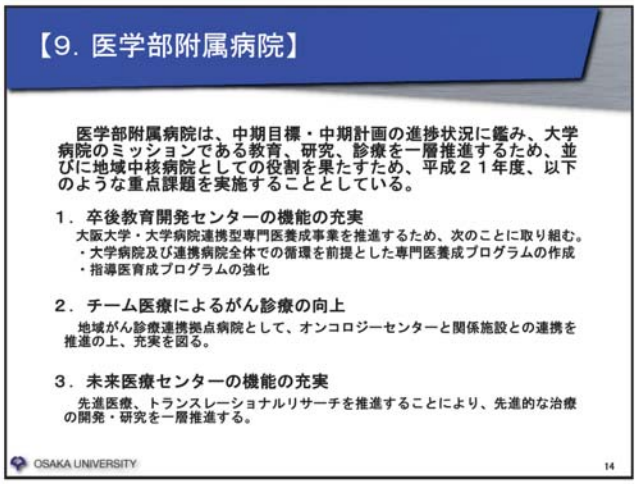
11


【8. 国際交流】
(1) 海外教育研究拠点活動の推進
① 共通事項
・拠点周辺の大学・教育機関との協力強化並びに連携促進
・学部・大学院生の短期研修、インターンシップ実施の支援
・セミナー・シンポジウム、留学フェア
・大阪大学からの派遣留学生のケア
・優れた留学生の受入推進支援
・海外の大阪大学同窓会の活動支援
② サンフランシスコ教育研究センター（アメリカ、Ｈ１６設置）
・遠隔講義：「世界は今」　（前期：日本語）
「学問のすすめ」（後期：英語）
・国際産学官連携活動の支援
・JUNBA（ベイエリア大学間連携ネットワーク）における交流促進
③ グローニンゲン教育研究センター（オランダ、Ｈ１７設置）
・欧州の大学との重点的交流促進
・若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム（ITP)の推進支援
・TVレクチャーの本格的運用開始と英語による理系教育の充実
・エラスムスムンドゥス計画への参画支援
・工業化諸国との教育協力プログラム（ＩＣＩ　ＥＣＰ）への参画
④ バンコク教育研究センター（タイ、Ｈ１８設置）
・「大阪大学パブリックレクチャー」の継続実施
・東南アジア地域大阪大学国際交流ネットワークの構築
・GLOCOL（グローバルコラボレーションセンター）の活動支援
⑤ 中国における海外拠点の設置検討
OSAKA UNIVERSITY
12

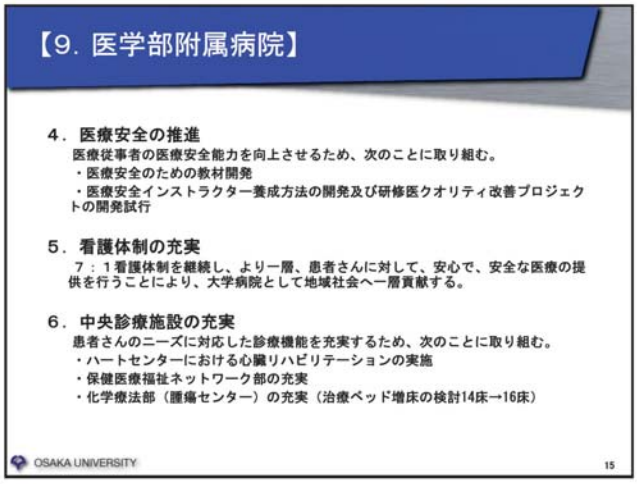
12


【8. 国際交流】
(2)海外から来学した学生・研究者に対する生活・研究環境の整備
ーワンストップ・サービスの本格実施ー
・サポート・オフィスによる支援
・GCN−Osaka（ネット上での参加型情報提供サービス）による各種情報提供
(3)国際学生交流推進事業の実施
・短期留学受入れプログラムの多様な展開
・各種助成事業による学生派遣の推進
（学生交流助成、学生海外研修プログラム等助成、学生海外短期研究留学助成、学生海外研修助成）
・留学生支援基金による留学生活のサポート
(4)国際交流に関する企画・立案の推進
・国際企画推進本部による企画・立案の推進
・重点的交流推進大学との学術交流の推進
・大学間ネットワークを活用した教育研究協力の推進
（APRU、AEARU、Erasmus Mundus、日中学長会議）
・国際貢献の組織的取組
（インド工科大学、日本エジプト科学技術大学）
・留学生３０万人計画（グローバル３０）への対応
(5)国際的広報活動の推進
・大阪大学フォーラム等
OSAKA UNIVERSITY
13

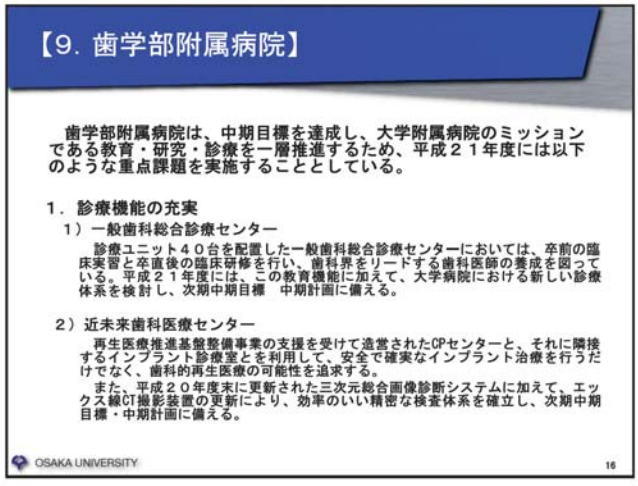
13


【9. 医学部附属病院】
医学部附属病院は、中期目標・中期計画の進捗状況に鑑み、大学病院のミッションである教育、研究、診療を一層推進するため、並びに地域中核病院としての役割を果たすため、平成２１年度、以下のような重点課題を実施することとしている。
１．卒後教育開発センターの機能の充実
大阪大学・大学病院連携型専門医養成事業を推進するため、次のことに取り組む。
・大学病院及び連携病院全体での循環を前提とした専門医養成プログラムの作成
・指導医育成プログラムの強化
２．チーム医療によるがん診療の向上
地域がん診療連携拠点病院として、オンコロジーセンターと関係施設との連携を推進の上、充実を図る。
３．未来医療センターの機能の充実
先進医療、トランスレーショナルリサーチを推進することにより、先進的な治療の開発・研究を一層推進する。
OSAKA UNIVERSITY
14

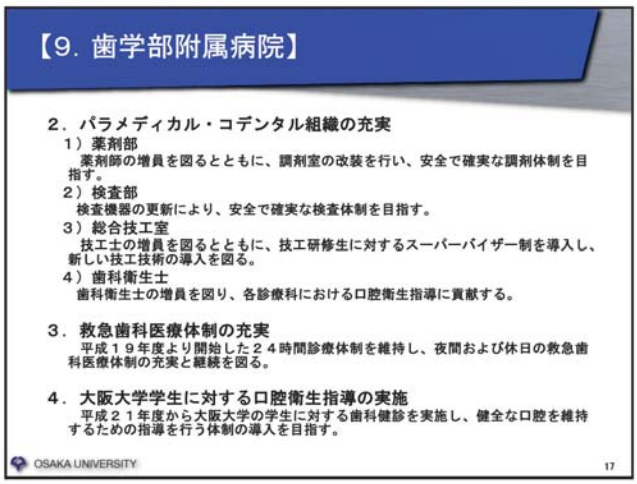
14


【9. 医学部附属病院】
４．医療安全の推進
医療従事者の医療安全能力を向上させるため、次のことに取り組む。
・医療安全のための教材開発
・医療安全インストラクター養成方法の開発及び研修医クオリティ改善プロジェクトの開発試行
５．看護体制の充実
７：１看護体制を継続し、より一層、患者さんに対して、安心で、安全な医療の提供を行うことにより、大学病院として地域社会へ一層貢献する。
６．中央診療施設の充実
患者さんのニーズに対応した診療機能を充実するため、次のことに取り組む。
・ハートセンターにおける心臓リハビリテーションの実施
・保健医療福祉ネットワーク部の充実
・化学療法部（腫瘍センター）の充実（治療ベッド増床の検討14床→16床）
OSAKA UNIVERSITY
15

15


【9. 歯学部附属病院】
歯学部附属病院は、中期目標を達成し、大学附属病院のミッションである教育・研究・診療を一層推進するため、平成２１年度には以下のような重点課題を実施することとしている。
１．診療機能の充実
１）一般歯科総合診療センター
診療ユニット４０台を配置した一般歯科総合診療センターにおいては、卒前の臨床実習と卒直後の臨床研修を行い、歯科界をリードする歯科医師の養成を図っている。平成２１年度には、この教育機能に加えて、大学病院における新しい診療体系を検討し、次期中期目標　中期計画に備える。
２）近未来歯科医療センター
再生医療推進基盤整備事業の支援を受けて造営されたCPセンターと、それに隣接するインプラント診療室とを利用して、安全で確実なインプラント治療を行うだけでなく、歯科的再生医療の可能性を追求する。
また、平成２０年度末に更新された三次元総合画像診断システムに加えて、エックス線CT撮影装置の更新により、効率のいい精密な検査体系を確立し、次期中期目標・中期計画に備える。
OSAKA UNIVERSITY
16

16


【9. 歯学部附属病院】
２．パラメディカル・コデンタル組織の充実
１）薬剤部
薬剤師の増員を図るとともに、調剤室の改装を行い、安全で確実な調剤体制を目指す。
２）検査部
検査機器の更新により、安全で確実な検査体制を目指す。
３）総合技工室
技工士の増員を図るとともに、技工研修生に対するスーパーバイザー制を導入し、新しい技工技術の導入を図る。
４）歯科衛生士
歯科衛生士の増員を図り、各診療科における口腔衛生指導に貢献する。
３．救急歯科医療体制の充実
平成１９年度より開始した２４時間診療体制を維持し、夜間および休日の救急歯科医療体制の充実と継続を図る。
４．大阪大学学生に対する口腔衛生指導の実施
平成２１年度から大阪大学の学生に対する歯科健診を実施し、健全な口腔を維持するための指導を行う体制の導入を目指す。
OSAKA UNIVERSITY
17

17

4月からの新体制

総長補佐 7名

木下タロウ（免・教授）　山口明人（産・教授）　東島清（理・教授）　山元弘（薬・教授）
馬場章夫（工・教授）　林紀夫（医・教授）　三成賢次（法・教授）

総合計画室 10名

○西田正吾（理事・副学長）　三成賢次（法・教授）
青江秀史（司法・教授）　猿渡勝次（企画部長）
滝澤温彦（理・教授）　猿渡政範（財務部長）
井上克郎（情・教授）　西川和慶（施設部長）
佐古田三郎（医・教授）
堀井俊宏（微・教授）

教育・情報室 11名

○小泉潤二（理事・副学長）　竹村治雄（サ・教授）
三原健一（言・教授）　平沢安政（人・教授）
藤田喜久雄（工・教授）　藤井勝博（情報推進部長）
宮崎純一（医・教授）　関昭裕（学生部長）
小林傳司（CSCD・教授）　細戸康治（図・事務部長）
工藤眞由美（文・教授）

研究・産学連携室 10名

○西尾章治郎（理事・副学長）　木村健治（言・教授）
大坊郁夫（人・教授）　正城敏博（先・教授）
原島俊（工・教授）　鈴木達也（研究推進部長）
米田悦啓（生・教授）　小林行雄（不正使用防止計画推進室長）
土井健史（薬・教授）
萩行正憲（レ・教授）

評価室 11名

○高杉英一（理事・副学長）　東野暉夫（情・教授）
川端亮（人・教授）　水谷規男（司法・教授）
金澤浩（理・教授）　村上伸也（歯・教授）
山中伸介（工・教授）　猿渡勝次（企画部長）
吉峰俊樹（医・教授）　高田則明（評価課長）
谷澤克行（産・教授）

財務室 9名

○門田守人（理事・副学長）　吉川秀樹（医・教授）
阿部顕三（経・教授）　狩野裕（基・教授）
片岡勲（工・教授）　高木信二（経・教授）
中谷和彦（産・教授）　猿渡政範（財務部長）
長谷俊治（蛋・教授）

人事労務室 10名

○月岡英人（理事・副学長）　小川一夫（社・教授）
小嶌典明（司法・教授）　森崎市治郎（歯病・教授）
松繁寿和（国・教授）　南埜宜俊（工・教授）
岡村康行（基・教授）　後藤宏平（総務部長）
野口眞三郎（医・教授）　三浦新（人事課長）

広報・社学連携室 10名

○武田佐知子（理事・副学長）　金水敏（文・教授）
永田靖（文・教授）　野村美明（国・教授）
森勇介（工・教授）　猿渡勝次（企画部長）
宇野公之（薬・教授）　関昭裕（学生部長）
安蘇芳雄（産・教授）　喜田一也（広報・社学連携事務室長）

国際交流室 8名

○辻毅一郎（理事・副学長）　鈴木睦（言・教授）
山内直人（国・教授）　菊野亨（情・教授）
真島和志（基・教授）　亀岡雄（国際部長）
高田健治（歯・教授）
土岐博（核・教授）

○印は室長

各室の検討状況

総合計画室

第二期中期目標・中期計画の策定

第二期中期目標・中期計画については、第一次案に対する各部局等からの意見を踏まえ、次期中期目標・中期計画検討ワーキングで修正作業を行い、中期計画毎に担当する室等を決めて確認いただいた上で第二次案を策定し、経営協議会学外委員及び各部局に意見を求めました。その意見を踏まえ、再度、同ワーキングで修正作業を行い、担当する室等に確認しました。

今後は、5月の部局長会議に報告して、6月の関連会議に諮った上、6月中に文部科学省へ提出する予定にしています。

平成21年度の年度計画

平成21年度の本学年度計画については、各部局の年度計画を踏まえて、総合計画室等が中心となってとりまとめ、3月末に文部科学省へ提出しました（既に大阪大学ホームページに掲載済）。また、3月26日に開催された経営協議会において年度計画の主要事項について説明しました。（主要事項は9～11ページを参照）

学内措置による組織の整備

新たな予算措置を伴わない学内措置による組織整備として、3月の役員会で次の事項が承認されました。

・学際融合教育研究センターの設置（平成21年4月1日）※平成26年3月31日まで

平成２０年度定額配分の実績報告

施設マネジメント委員会では定額配分（約4億5千万円）により予算を確保し、計画的・効率的な教育研究環境改善に取り組んでいます。

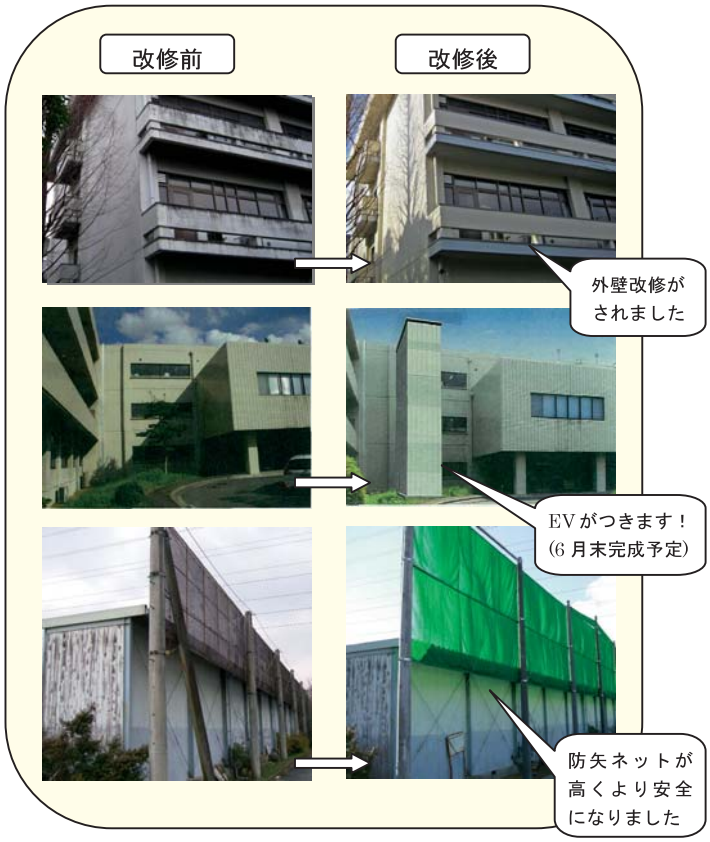
平成20年度実施項目

〔安全・安心に資するもの〕
（言語）研究棟外壁塗装改修　　他24件

〔学生サービス等に資するもの〕
（生物工学）トイレ等改修　　他26件

〔バリアフリー対策〕
（生命）細胞棟バリアフリー化（EV・トイレ）　改修　　他3件

〔その他〕
（学生）アーチェリー場防矢ネット改修
他79件



施設整備等に係る各部局キャラバンの実施

平成19年度に引き続き、平成20年度も施設部長を隊長とするキャラバン隊が平成20年9月17日から平成21年1月30日にかけて各部局のキャラバンを実施しました。

キャラバンの結果については、総合計画室会議に報告しました。特に、学生生活環境の改善が急務であるとの意見がありました。本結果は今後の施設整備に役立てることとしておりますので、各部局におかれましても今後ともご協力いただきますようお願いします。

また、平成21年度は、前年度からの老朽化に伴う改善計画と施設キャラバンの経緯を踏まえ、教育研究環境の改善と施設整備を進めていきます。

【キャラバンの目的】
- 部局との直接対話により、意思疎通を図る。
- 顔の見える対応により、サービスの向上と迅速化・効率化を図る。
- 施設整備、営繕工事の計画的・効率的な実施に資する。

施設の有効活用

施設マネジメント委員会では「大阪大学における施設の有効活用に関する規程」に基づき、全学的見地に立った施設の使用面積・使用用途および配置の見直し等スペースの再編計画や、共用スペースの確保に努めています。

このたび、情報系先端融合科学研究棟への情報科学研究科の移転に伴い、基礎工学研究科G棟に2,064m²及びI棟に1,951m²の共用スペースが確保され、基礎工学研究科において、平成21年度の使用計画が策定されました。計画ではナノサイエンスデザイン教育研究センターやコミュニケーションデザイン・センター、金融・保険教育研究センターが使用予定で、「文理融合」や「人と学の交流」の促進も期待されます。また、豊中キャンパスで進行している耐震補強改修整備に伴うバッファスペースとしても活用するなど、全学的な視点での計画となっています。

大阪大学における積極的な施設の有効活用・共用スペースの確保・運用のグッドプラクティスになることが期待されます。

箕面キャンパスマスタープランの策定

キャンパスを魅力あるものにしてゆくためには、空間の全体像のイメージを示すキャンパスマスタープランがぜひとも必要です。大阪大学は平成17年（2005年）に豊中キャンパスと吹田キャンパスを対象としたキャンパスマスタープランを策定していますが、このたび箕面キャンパスマスタープランを策定しました。

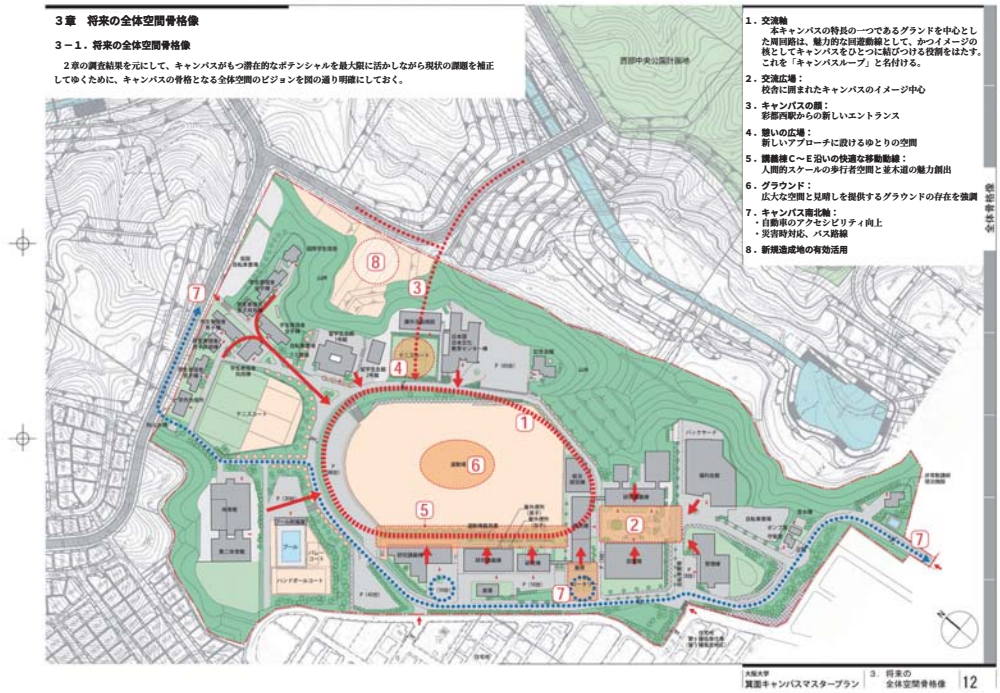
箕面キャンパスには、地域との交流をはじめとする、長年にわたってつちかわれてきた文化と、豊かな自然環境があり、ぜひともこれらを守り育ててゆく必要があります。

今後、箕面キャンパスにおける施設整備は、本マスタープランに基づきながら、全体の理念や空間像と調和・呼応して進め、より魅力的なキャンパスの形成を目指します。

なお、今後検討すべき大きな課題（例えば大阪大学全体として箕面キャンパスをどのように活かしてゆくか、など）も残されているため、箕面キャンパス将来構想検討WGにおける検討結果を反映させながら、本マスタープランは必要に応じて更新してゆくものとしています。

大阪大学ホームページにも全文を掲載しましたので、詳細は以下のURLをご参照下さい。

HTTP://…http://www.osaka-u.ac.jp/jp/annai/information/committee/index.html



箕面キャンパスマスタープラン　将来の全体空間骨格像

教育・情報室

新室員

4月1日より人間科学研究科の平沢安政教授（教育学）が、教育・情報室の新しい室員として加わりました。また、三井　衛前情報推進部長から、藤井勝博新情報推進部長へ室員の交代がありました。

新学生生活委員長

4月1日に、大垣一成基礎工学研究科教授・太陽エネルギー化学研究センター長が、学生生活委員会の新委員長に就任しました。大和谷　厚前委員長の長年にわたる貢献に感謝いたします。

学生生活支援体制の強化

学生生活相談担当教員として、太刀掛俊之准教授が赴任しました。教育・情報室に所属する教員は、障害学生支援担当の松原　崇助教と併せて2名となり、学生生活支援の体制がより強力となります。

また、これまで「学生生活相談室」「就職相談室」「障害学生支援室」は吹田地区と豊中地区でのみ開設されていましたが、箕面地区の研究講義棟A棟1階にも上記3室が開設されました。

入学試験の実施

一般選抜は、平成21年2月25日－26日に前期日程試験、3月12日－14日に後期日程試験を実施し、3月8日と22日に合格者の発表を行いました。大阪大学全体での志願者は13,709名あり、受験者数は前期日程7,051名、後期日程3,076名で、学部新入生は特別選抜等を含め合計3,427名です。受験者の増加の中、入試にともなう多大な業務に従事された教職員の皆様に感謝いたします。

卒業式と入学式の実施

平成21年3月24日(火)に平成20年度大阪大学卒業式・大学院学位記授与式が、4月1日(水)に平成21年度入学式が、それぞれ大阪市港区の大阪市中央体育館で執り行われました。卒業式・大学院学位記授与式では学部生3,577名が卒業し、修士学位が2,131名、法務博士（専門職）が119名、博士学位が597名に授与されました。入学式では学部生3,427名、大学院生2,931名の入学を祝いました。昨年までの数度に分割した式典とは異なり、学生の家族を含めてそれぞれ1万人ほどの参加を得た大式典として、厳粛な中に大阪大学としての一体感を感じることになりました。卒業式・入学式の詳細については本誌の2～3ページをご覧ください。

学際融合教育研究センターの設置

大学院高度副プログラムなど学際融合教育を進め、複眼的な視野や新しい専門性を有する指導的人材の養成を図るため、平成21年4月に学際融合教育研究センターが設置されました。このセンターは、これまでの学際融合教育研究プラットフォームを特別教育研究経費（教育改革）により強化・発展させるものです。学際融合教育テーマの企画、社会ニーズの調査・分析、多様な学際融合教育の開発や実施の支援、副専攻教育制度についての研究、学生の受講のプロモーション、開発支援ツールや受講ガイダンスツールの開発など、学際融合教育の基盤構築を図ります。これまでの学際融合教育研究プラットフォームの教員（専任教授1、兼任教授1）に加えて特任教授2名が就任し、今後兼任教員10名程度の追加を予定しています。

役員室だより

次期学務情報システム（KOAN）の導入プロジェクトの発足

現在の学務情報システム（KOAN: Knowledge of Osaka-university Academic Nucleus）は、総長特命プロジェクトとして平成18年度に導入されました。KOANは単に教務を支援する情報システムではなく、大阪大学の学生・教員・職員を結ぶツールとなっています。

この学務情報システムのリースが平成22年12月で終わるのを機に、新しい学務情報システム構築に向けての「次期学務情報システム導入プロジェクト（仮称）」を教育・情報室の下に設置しました。現行のシステムの検証と評価を行うとともに、高度副プログラムへの対応やより使い易いシステムの導入を目指す予定です。

オープンコースウェア（OCW）としての講義資料の公開

大阪大学、東京大学、京都大学、東京工業大学、早稲田大学、慶応義塾大学の6大学は、2005年5月より、各大学の講義資料をオープンコースウェア（OCW）として公開を始めました。2006年4月には日本オープンコースウェアコンソーシアムを発足させ、現在では18の大学が正会員として情報交換を行っています。

OCWとして公開することが可能な講義資料がありましたら推薦をお願いいたします。公開されますと全世界からアクセスを受け、大阪大学の広報的役割も果たすことになります。

（連絡先　大阪大学OCW事務局　e-mail: ouocw@ocw.osaka-u.ac.jp　Tel:06-6850-6828）

附属図書館改修工事の完了

附属図書館2館の耐震改修工事は順調に進み、予定通り完了しました。吹田の理工学図書館（旧 吹田分館）は4月28日(火)、豊中の総合図書館（旧 豊中本館）は6月2日(火)に、新設のラーニング・コモンズのオープニングセレモニーを行います。

大阪大学特別講義

新しい試みとして、大阪大学の全学部・研究科の全学生を対象とする特別講義を実施します。どのような専門分野の学生にとっても意義深い講義ですので、積極的に周知し参加を促していただくようお願いします。

大阪大学特別講義

主　催：大阪大学
協　力：関西経済同友会及び関西サイエンス・フォーラム
会　場：豊中キャンパス　文系総合研究棟401教室ほか

● 2009年5月25日(月)　16：20 － 17：50
建築家、東京大学名誉教授
安藤忠雄先生
講義題目：夢をかけて走る

● 2009年6月15日(月)　16：20 － 17：50
劇作家、評論家、中央教育審議会前会長、大阪大学名誉教授
山崎正和先生
講義題目：文明史の中の現代

研究・産学連携室

平成20年度から研究推進室を研究・産学連携室に名称変更し、研究と産学連携の活性化を図ってきましたが、平成21年度は、次期中期目標・中期計画に向け下記項目を中心に更に研究と産学連携の推進を図ります。構成員各位のご協力をお願いします。

大阪大学グラウンドプラン、大阪大学活動方針２００８に掲げる研究推進及び産学連携に関する諸事項の遂行。特に、「基本」、「ときめき」、「責任」を意識した研究活動の推進

『目の前の効用や有用性にとらわれることなく、大学だからこそできる基礎研究を深く追求し、社会の基礎力たる創造性豊かな学術研究を推進する』、『学問上の新たな発見に感動し、「おもしろくてたまらない」と心底言えるようなわくわくする研究をする』、『自らの研究が社会のなかでどのような位置にあるのか、また社会を正しい方向にリードできるかを冷静に見つめる』という3つの研究精神のもとで研究活動の推進をはかります。

各種大型研究プロジェクトによる研究の発展・推進

平成20年度に引き続き、世界トップレベル研究拠点（WPI）プログラム、先端融合領域イノベーション創出拠点事業、グローバルCOEプログラムを中心に各研究領域における研究の高度化と人材育成を行い世界トップレベルの研究拠点を形成します。

部局横断型プロジェクトの推進

本室の下に設けられた生命科学・生命工学、ナノサイエンス・ナノテクノロジー、脳情報学、光科学、地球環境資源エネルギー科学の5つの研究企画ワーキンググループを通じて、部局横断的な研究プロジェクト等の更なる連携研究推進を図り、本学の卓越した研究力を広範に展開することを目指します。

科学研究費補助金への積極的な応募と戦略的な外部資金の獲得

平成20年度に実施した科学研究費補助金に関する学内アンケート調査結果を分析し、応募件数拡大のための推進方策をたてるとともに、設置後1年を経過した産学連携推進本部を更に充実させて外部資金獲得を目指します。

利益相反マネジメントの実施

産学官連携が進むと、技術移転の推進や兼業の規制緩和等により企業と大学・教職員等との関係について、利益相反（教職員等が産学官連携活動に伴って得る利益と教育・研究という大学における責任が衝突・相反している状況）が生じます。利益相反には絶対的基準はなく、社会的にどう映るかが問題であり、社会に対しての説明責任や透明性が必要とされます。

当室の下に設置された利益相反管理委員会は、平成20年度に引き続き利益相反マネジメントを進めて参ります。

評価室

中期目標期間に係る業務の実績に関する評価結果の公表

各国立大学法人の中期目標期間に係る業務の実績に関する評価結果が国立大学法人評価委員会から公表されました。

今回の評価は、国立大学法人化後、第一期中期目標期間（平成16～21年度）のうち、平成16～19年度に係る全ての業務内容についての評価が行われたものです。

この評価にあたっては、平成19年度夏頃から長期間にわたって、関係部局にご協力いただきましたことを厚く御礼申し上げます。

この業務実績に関する評価結果及び教育研究評価の評価結果並びに自己評価書等については、本学ホームページに掲載準備中です。

【評価結果抜粋】

1　全体評価

大阪大学は、総長のリーダーシップの下、第一期中期目標期間の最も大きな計画である大阪外国語大学との統合を実現している。統合は両大学の教育研究リソースを最大限活用し、大阪の知の基盤となるものであり、「地域に生き世界に伸びる」という理念を具現化したものである。

中期目標期間の業務実績の状況は、すべての項目で中期目標の達成状況が良好又はおおむね良好である。業務実績のうち、主な特記事項は以下のとおりである。

教育については、高度職業人講座及び社会連携講座等の実施や各種教育改革プログラムを実施し、それぞれコースワークの体系化やプロジェクト・ベースド・ラーニング（PBL）方式による実践的科目の導入を進めるとともに、大阪外国語大学との統合に対応したキャンパスネットワークODINS 5期整備、全学無線LANシステムの設置等の取組を行っている。

研究については、部局横断型のナノサイエンス・ナノテクノロジー教育研究訓練プログラムの立ち上げ、科学教育機器リノベーションセンター、ナノサイエンス・ナノテクノロジー研究推進機構、生命科学・生命工学研究推進機構の設置等の取組を行っている。

社会連携・国際交流等については、スーパー産学官連携機構を設置し、窓口及び知的財産取扱を一元化等することで、共同研究や受託研究の獲得へつなげる取組を行っている。

業務運営については、教員の雇用について、部局が管理する枠を人件費の90%とし、残り10%を全学的に管理できる枠（大学留保ポスト）とし、その配分については人件費の節減、戦略的運用、全学的視点、大学経営の視点等により検討を行い、総長のリーダーシップにより決定している。

財務内容については、「財務体質強化手段としての大学基金の創設」をまとめ、100億円規模の「基金」の創設及び基金の原資である寄附金獲得のための責任ある体制についての提言を行っており、今後の取組が期待される。

自己点検・評価、情報提供については、平成16年度から平成18年度における入学者数、卒業・修了者数、研究費、留学生数、決算概況等について、3年間の経年変化がわかるデータ、科学研究費補助金採択数や論文引用数等の基礎的な活動状況と研究成果の国内、国外における相対的な位置を明確にした「大阪大学業績集2004-2006」を作成し、ウェブサイトで公表している。

施設設備の整備・活用等については、大阪大学キャンパスマスタープランを策定し、共用施設、共用空間等のキャンパスコモンに関するデザインの方針を提示するとともに、緑地空間の管理・改善の方向を示したガイドラインとして、「緑のフレームワークプラン」を策定している。

一方、研究費の不正使用防止のための体制・ルールに関して、研究機関における委員会の設置、通報者の保護等について整備されていないことから、早急な対応が求められる。

2　項目別評価

Ⅰ　教育研究等の質の向上の状況〈注1〉	
（Ⅰ）教育に関する目標	3
（Ⅱ）研究に関する目標	3
（Ⅲ）その他の目標〈注2〉 （1）社会との連携、国際交流等に関する目標	3
Ⅱ　業務運営・財務内容等の状況	
（1）業務運営の改善及び効率化に関する目標	4
（2）財務内容の改善に関する目標	4
（3）自己点検・評価及び当該情報に係る情報の提供に関する目標	4
（4）その他業務運営に関する重要目標	3

凡例：5～1の数字は便宜上付したものである。

中期目標の
5：達成状況が非常に優れている
4：達成状況が良好である
3：達成状況がおおむね良好である
2：達成状況が不十分である
1：達成のためには重大な改善事項がある

〈注1〉国立大学法人評価委員会は、（独）大学評価・学位授与機構が実施した『教育研究評価』の結果を尊重する。

〈注2〉「附属病院に関する目標」については、国立大学法人評価委員会が評価を行っているが、講評形式となっている。

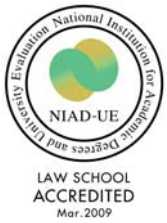
法科大学院認証評価（高等司法研究科）結果の公表

平成20年度に受審した法科大学院認証評価の結果が公表され、**「大阪大学大学院高等司法研究科法務専攻は、（独）大学評価・学位授与機構が定める法科大学院評価基準に適合している。」**との認定を受けました。

これに伴い、同機構より高等司法研究科に対して、適格認定証が交付されました。

評価結果及び自己評価書は、本学ホームページに掲載準備中です。

適格認定証



認定マーク

なお、平成21年度は、前号（平成21年2月号）で既にお知らせしていますが、大学機関別認証評価を受審します。現在、評価室において「自己評価書」を6月末日提出に向けて鋭意作成中です。提出後、確認事項や訪問調査等で各学部・研究科等に改めてご協力いただくことになりますので、引き続きよろしくお願いします。

財務室

基金室等の体制について

大阪大学の自主的な事業や業務の継続・発展に必要な財源の整備を図るため、財務室では、財務基盤整備本部と合同で「基金検討ワーキング」を置いて、本学に基金を設立することについて検討してきました。

その結果、2月23日の財務基盤整備本部会議で、平成21年度から本学に基金を設け、同本部の下に基金室を設置して基金の構築及び管理運営を行うことが承認されました。

今後、この基金に関する募集や運営などは、基金室及びこれを支援する基金事務室にて具体化されることとなります。

平成２０年度予算補正（第２次）について

法人化後の予算は、学生納付金収入（授業料、入学料、検定料）、附属病院収入などの自己収入額の実績に応じて適宜収入予算を見直し、その増減に対応した支出予算の見直しを行う作業、つまり予算補正案の編成作業を行う必要があります。

このため、上半期の収入実績を基礎とした収入見込額との増減額を支出予算に反映させた予算補正（第1次）を行なったところですが、あらためて財務室で策定した1月末までの収入実績に基づく予算補正（第2次）案が、2月23日の役員会で承認されました。

平成２１年度の予算配分等について

平成21年度の予算配分については、財務室で策定した国立大学法人大阪大学予算編成方針案、平成21年度予算配分基本方針案等が、2月23日の役員会で承認されました。主な変更点は、教育研究基盤校費（学生当積算校費相当分）におきまして、大阪大学・金沢大学・浜松医科大学連合小児発達学研究科については文部科学省積算どおり配分することとした項目を追加したことなどです。

平成２１年度教育研究等重点推進経費執行計画について

財務室では、平成21年度教育研究等重点推進経費について、学内公募を行い、申請のあった事業に対して、書類審査、ヒアリング審査等を経て審議を重ねてきましたが、このたび執行計画案が3月23日の役員会で承認されました。

教育研究等重点推進経費ヒアリング風景

採択事業の詳細は以下のとおりです。

部　局　名　等	事　　項　　名
情報基盤推進本部	学務情報システムの整備・拡充
外国語学部	講義室防音等改修工事に伴う附帯設備整備経費
教育・情報室（学生部／学務課）	大阪大学特別講演会（教育・情報室及び大学教育実践センター共催）
教育・情報室（学生部／学務課）	平成21年度大阪大学ファカルティ・ディベロップメント研修（教育・情報室主催）
歯学部附属病院	看護体制並びに教育支援体制の充実に係る経費
事務局（学生部）	学生寮住環境改善経費（3－1）
附属図書館	学生用図書の体系的・継続的な整備経費
工学研究科	フォトニクスEラーニングコース構築
外国語学部	研究講義棟A棟耐震改修に伴う講義室等の附帯設備整備費
教育・情報室（学生部／学務課）	入試広報の充実による志願者確保策と教育環境の向上
経済学研究科、法学研究科、高等司法研究科	法経大学院総合研究棟エレベータ設置工事
附属図書館	開館サービス充実による主体的な「学び」環境の整備
大学教育実践センター	新型授業開発プロジェクト及び新型基礎セミナー実施経費
大学教育実践センター	共通教育学生実験における安全設備の完備（2－1）
事務局（学生部）	快適なキャンパスライフを支援するための体系的な整備経費（3－3）
サイバーメディアセンター	全学IT認証基盤整備
附属図書館	電子的情報基盤整備経費
サイバーメディアセンター	総合情報通信システム（ODINS）推進費
産学連携推進本部（研究・産学連携室）	機関帰属知的財産の出願等経費
事務局（施設部）	キャンパスマスタープランの策定
環境安全研究管理センター	大阪大学化学物質管理支援システム（OCCS Ⅱ、OGCS）に係る管理運営経費
蛋白質研究所	理化学研究所との連携による最新型高磁場核磁気共鳴装置の移設と連携研究室の立ち上げ
研究・産学連携室	部局横断型の研究プロジェクト企画等支援経費
情報基盤推進本部	財務会計システムの一部サーバ機器更新
海外拠点本部（国際部／国際連携課）	海外拠点本部（サンフランシスコ教育研究センター）運営経費
海外拠点本部（国際部／国際連携課）	海外拠点本部（グローニンゲン教育研究センター）運営経費
海外拠点本部（国際部／国際連携課）	海外拠点本部（バンコク教育研究センター）運営経費
産学連携推進本部	バイオメディクス(株)を相手とする知的財産の裁判に必要な弁護士費用等
安全衛生管理部、医学系研究科、歯学研究科	医学部・歯学部解剖実習室に係る実習環境の改善（ホルムアルデヒド対策）
医学部附属病院	入院環境衛生管理設備（更新）
安全衛生管理部、工学研究科、理学研究科	核燃料物質の円滑管理のための廃棄物貯蔵庫の整備経費
コミュニケーションデザイン・センター	中之島コミュニケーションカフェの実施
低温センター	ヘリウム回収貯蔵用長尺ボンベカードル増設
情報基盤推進本部	事務専用グループウェアの更新にかわるメールシステムとファイル共有システムの新規導入
事務局（施設部）	施設情報管理システム保守費
安全衛生管理部	受動喫煙対策用サイン整備経費
安全衛生管理部	衛生管理者免許取得支援経費
国際交流室（国際部/国際交流課）	国際交流会館改修に伴う物品等の更新経費
国際交流室（国際部/国際交流課）	国際交流会館改修に伴う入居者の転居に伴う転居先への入居一時金及び国際交流会館使用料との差額家賃
国際交流室（国際部/国際交流課）	国際交流会館改修に伴う入居者の転居費
科学教育機器リノベーションセンター	リユース可能な研究教育基盤機器整備経費（現有研究教育機器の修理と汎用性基盤機器としての全学共同利用化促進）
免疫学フロンティア研究センター	招聘研究者のスタートアップ経費
本部事務機構等 （研究推進部、国際部　他）	研究支援等に係る人件費
執行計画額	合計　　1,671,421千円

人事労務室

平成21年4月に事務局を本部事務機構に改編することに伴い、4月1日付けで理事・副学長を拝命しました。引き続き人事労務等を含め、新たな気持ちで取り組みたいと考えております。　（月岡　英人）

時間外労働及び休日労働に関する協定（36協定）の締結

平成21年4月1日から平成22年3月31日までを有効期間とする時間外労働及び休日労働に関する協定（36協定）については、各地区の過半数代表者との数回に及ぶ協議の中で、種々ご意見等を頂戴しつつ、また、大学の置かれた状況や大学の考え方等についてもご理解をいただき、3月25日に締結をいたしました。同協定の主な内容は以下のとおりです。

時間外労働の時間数等に関する原則

36協定によって延長できる時間外労働の時間数は、
- 1日につき8時間（特例はありませんのでご留意願います。）
- 1か月につき45時間
- 1年につき360時間

を限度とすることが原則です。

また、同協定により労働することのできる法定休日（※）の日数は、4週につき2日が限度となります。

（※「法定休日」とは、1週1日または4週4日の休日を指します。）

時間外労働に関する特例

緊急その他やむを得ない臨時の事由による場合に限り、本人の同意のもとに、1か月につき45時間もしくは1年につき360時間の限度を超えて時間外労働を命じられて行うことが可能ですが、この場合の時間数は、
- 1か月につき80時間（附属病院地区の特定医師等については、100時間）
- 1年につき450時間（※）（附属病院地区の特定医師等については、750時間）

（※ 平成20年度に比べ、30時間の減少となっておりますので、一層の業務の簡素化、合理化をお願いします。）

時間外労働に関する特例の適用にあたっての制限

- 1か月につき45時間の限度を超えての時間外労働は、1年度内において6月までが限度です。
- 1年度内における時間外労働の時間数が360時間を超えた場合は、その翌月以降、1か月につき45時間が時間外労働の限度となります。

なお、平成21年3月30日付けの理事通知により、上記の内容を各部局長等に対してお知らせし、併せて、業務の簡素化やアウトソーシングの活用、所掌事務の変更等により時間外労働の縮減に努めること、勤務時間管理をより徹底して行うことをお願いしています。

また、教職員各位に対しても、3月30日に学内専用ホームページ「人事関係」の中に「時間外労働の時間数及び勤務時間等の記録について」を掲載することにより、上記の内容を説明するとともに、勤務時間並びに時間外労働及び休日労働等について勤務時間等記録簿へ記載する際には、適正な時間数等を必ず記載することに留意するよう周知しています。

（https://www-info.osaka-u.ac.jp/gakunai/g_sj/affairs/pdf/H21.3.30rodojikan.PDF）

教員の高年齢者雇用

教員の高年齢者雇用については、去る3月30日開催の臨時役員会において、定年延長（高年齢者雇用安定法による実施義務化年齢に併せて定年年齢を段階的に65歳に引き上げる。）により対応することに決定しました。

なお、詳細については、今後、更に検討を進めていく予定です。

広報・社学連携室

平成２１年度の活動について

第１期の中期目標・中期計画期間の最終年となる本年、大阪大学のブランド力の強化、様々な情報発信体制の強化及び21世紀懐徳堂を中心とした社学連携活動のさらなる推進を目標に掲げ、次の主要事項のとおり年度計画を遂行していきたいと考えています。

（1）広報の強化
・広報基盤整備本部を中心とした本部広報体制の強化と大学広報誌の改善、充実

（2）ホームページの充実
・教育・研究・社会貢献等の情報の、より効果的な発信に向けた大学ホームページの一層の改善、充実

（3）社学連携事業の推進
・関連自治体をはじめとした外部組織との連携の強化とさまざまな連携事業の推進
・大阪大学21世紀懐徳堂を中心に、一般市民等を対象とした公開講座等の文化事業の推進

大阪大学公式ホームページをリニューアルします

前号にてお知らせしておりました大阪大学の公式ホームページのリニューアルについて、各データ更新を担当していただく本部事務機構の方々への説明会を４月16日(木)に実施しました。

新しいホームページでは、情報の発生源から速やかなデータ更新が可能となり、情報発信の即時性の確立されることになります。

利用者の視点に立った、国内外に最新の情報を発信する新たなホームページは、６月を目処に公開される予定です。

阪大ニューズレター　No.43を刊行

阪大ニューズレターNo.43を刊行しました。「総長カフェ　21世紀懐徳堂ライブ」では、財団法人稲盛財団理事長、京セラ株式会社名誉会長である稲盛和夫さんを迎え、社会貢献に情熱を注ぐカリスマ経営者と社学連携を推進する鷲田総長が哲学談義を繰り広げました。

稲盛理事長は、「経営に際して、相互に信頼しあえる『人の心』を大事にし、『人間として何が正しいのか』ということ、それを正しいままに追求するという原点を全社員で共有するように努めてきました。」と経営哲学を語られ、最後に「これからは阪大を中心に大阪財界が結集し、大阪のまちを再建しなければと」哲学者総長を力強く応援していただきました。

国際交流室

外国の大学等との学術交流協定に関する基本方針ならびに同取扱いの改定

これまで大学間学術交流協定については、国際交流委員会が中心となり、その下に学術交流協定ワーキンググループを編成して、国際部国際交流課とともに新規締結、期間延長及び協定文等の審議を行ってきました。同委員会で承認されたものについては教育研究評議会で報告・了承されてきました。部局間協定については各部局で審議の上、結果を同委員会で報告しています。これらの処理により、部局間、大学間の学術交流協定、また多くの場合それに伴う学生交流に関する覚書の締結状況は、コンタクトパーソンに関する情報も含め国際交流委員会（事務的には国際部国際交流課および同学生交流推進課）で把握していました。

この度、標記の基本方針ならびに取扱いが見直され平成21年4月1日から施行されることになりました。主な変更点は以下の2点です。

(1) 大学間学術交流協定の締結に関する基本方針の制定者を国際交流委員会ではなく国際交流室としたこと、これに伴いこれまで国際交流委員会の下に置かれていた学術交流協定ワーキングを国際交流室の下に置くこととしたこと。

(2) 大学間学術交流協定の申請条件が、①相手校との間で部局間協定に基づく十分な交流実績を有し、複数の部局が当該相手校との今後の交流計画を策定して申請する場合、②総長または国際交流室長が特に認めた場合、のいずれかとなったこと。

以上の変更により、これまでは2つ以上の部局間協定がすでに締結されていることが全学協定を締結するための必要条件でしたが、今回の改定ではそれが緩和され、部局間協定がまだ締結されていなくても、最初から大学間協定を申請できる道が開かれました。

また、国際交流室が協定締結に関して責任を持ち、同室が率先して大学間協定を締結することも可能となりました。なお、交流意思のある研究者・教員が双方の大学にいることが交流協定締結の前提であることに鑑み、新しい基本方針では、コンタクトパーソンの役割を明確に規定しています。

交流協定締結をお考えの先生方は是非、この新しい基本方針ならびに取扱いをもとに、検討を進めていただきたいと思います。

英文広報誌等の活用

Annual Report of Osaka University 及び Osaka University Prospectus の最新版ができています。Prospectus については10ページの簡易版も用意されています。また、先日グラウンドプランの小冊子が作成されましたが、英文版も刊行されました。さらに、国際企画推進本部では大阪大学の全般的な紹介と国際交流に関するデータを載せたパワーポイント資料をおよそ3か月に一度程度更新して用意しています。当資料はもっぱら外国からの訪問者への大阪大学概要及び国際交流関連事項の説明用として使用しているものですが、先生方が外国の大学等を訪問されるときの説明用としてもお使いいただけます。国際企画推進本部（内線4013）までお問い合わせの上 Prospectus 簡易版とともにご活用下さい。

Stop the 大麻汚染!!

安全衛生管理部副部長　山　本　　仁

1．はじめに

最近、大学生の間で薬物、特に大麻が乱用され社会的な問題となっています。図1は厚生労働省の統計から抜き出した大麻に関する検挙件数と検挙人数ですが、昭和38年以降検挙件数、人数ともに増加し、平成5年から平成13年まで一時的に減少したものの、平成14年以降再び増加していることがわかります。特にこの数年は、大学生が関与した事例が多く報告されるようになっており、全国の大学で様々な対策が打ち出されるようになってきました。

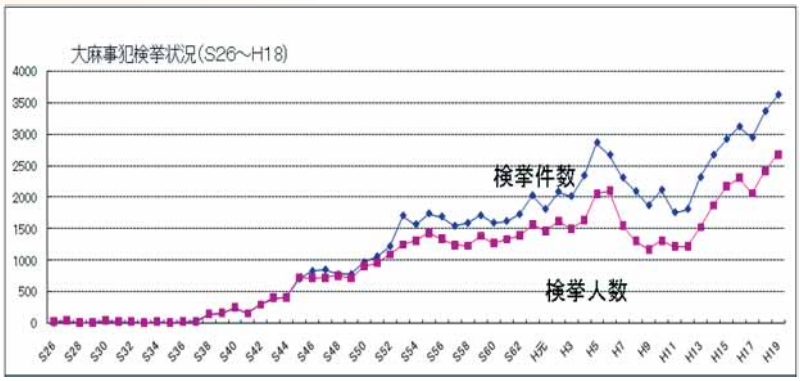


図1

2．なぜ若者が薬物乱用に走るのか？

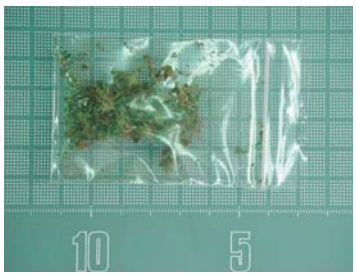
大麻や覚せい剤などの薬物乱用で検挙された人の聞き取り調査では、大学生を含む青年層の場合、その動機は好奇心や冒険心が多く、その背景には、青年期の成長に特徴的な、社会への反抗、規制の拒否、一人でいることの不安や空虚感などがあると考えられます。また、若者の乱用は、集団型と単独型に分けられます。集団型はみんなでワイワイ言いながらグループで乱用され、仲間意識の確認のための儀式的な意味合いが強く、薬物の使用場所や時刻は限定的である特徴があります。単独型は個人の特性の色合いが強く、慢性的な空虚感や自殺願望を口にする人もいます。集団型での乱用から単独型へ移行した人は、強い薬物依存症になる危険性が高いことも知られています。

3．大麻の危険性

一部のウェブサイトなどでは、大麻の毒性は低く吸引しても問題は無いかのように記述されています。しかし、医学的な研究からは、様々な急性・慢性の症状が報告されています。大麻を吸引することによる急性症状としては、記憶、知覚、反応時間などの認知・行動機能の著しい低下が起こったり、不整脈などの循環器障害が起こることが知られています。また解脱期（酔いからさめる時）に暴力的になる傾向があることも判っています。大麻を常用した場合、統合失調症などの精神疾患になるリスクが3倍以上高く（いわゆる大麻精神病と呼ばれます）、大麻依存症と診断されるレベルでの乱用者ではそのリスクが10倍以上になることが知られています。また、高度の不安やうつ、慢性疲労を示し、行動意欲が顕著に低下することも知られています。

4．大麻所持の違法性

大麻草



乾燥させた大麻

よく大麻の種子は所持していても違法ではないということが言われます。たしかに、大麻の種子は鳥の餌などの飼料や香辛料として国内に流通しています。大麻取締法では、大麻の栽培は許可された資格者のみができ、一般の人の大麻の栽培や所持を禁止しています。しかし、その規制対象から①大麻草の成熟した茎及びその製品（樹脂を除く）、②大麻草の種子およびその製品が除外されています。このため、大麻の種子の所持は違法ではないということになるのですが、実は発芽能力のある種子は、外国為替及び外国貿易法と関税法により規制されており、外国から輸入される種子はすべて発芽しないよう処理することが義務付けられています。また、大麻取締法においても、無資格者が大麻草を栽培するための原材料として種子を提供したり、運搬する行為に対しては懲役刑をもって取り締まることになっています。従って国内の大麻種子は、大麻取締法のもと、有資格者が責任をもって管理され、海外からの種子については発芽しないよう処理されていることになり、一般の人が国内で発芽可能な大麻種子を所持することが無いようになっています。このことから、もしあなたが発芽可能な種子を持っているとすると、その種子はどこかで何らかの違法行為があった結果、あなたの手元にあるということになります。

5．大阪大学に属する社会人としての自覚を

以上述べましたように、大麻を吸引したり、栽培したりする行為のみならず、発芽可能な種子を所持することでも、犯罪に加担していることになります。大麻を吸引することで、いわゆるリラックスした感じ、若干の幸福感や反社会的な行動による満足感が得られるかもしれません。しかし、その代償として、吸引による知覚異常、注意力・集中力の欠如、体安定性の崩壊、不安や錯乱状態、また、違法行為の結果摘発されると、逮捕、刑事訴追、そして大学による処分（厳罰化の傾向が顕著）などがあなたにかかってくることになります。

啓発用パンフレット
（文部科学省ホームページから
ダウンロードできます）

大麻の毒性は、覚せい剤やヘロイン、コカインなどより小さいことは知られています。しかし、だからと言って安全・安心であるはずはなく、身体や精神への影響は厳然と存在します。言葉たくみな論理のすり替えに惑わされないようにしなければなりません。上にあげたように、大麻吸引によって得られるものとその代償を見比べれば、軽い気持ちで試したりする行為が、いかに割に合わないかということがはっきりとします。大阪大学に属する社会人として、しっかりとした自覚と責任ある行動を望みます。

〈薬物に関する相談窓口〉
学生センター（学生部学生支援課）　06－6879－7092

やまもと・ひとし　**プロフィール**
通商産業省工業技術院主任研究官、大阪大学理学研究科助教授を経て、平成19年4月より安全衛生管理部教授、同副部長。

平成２０年度教養教育奨学金授与式挙行

大学教育実践センターでは、12月24日(水)に自然科学棟211号室において、平成20年度教養教育奨学金授与式を行いました。この教養教育奨学金は、大阪大学の教育目標の一つである『教養』に焦点をあて、大学教育実践センターでの教養（共通）教育において優秀な学業成績をあげた学生を助成するための奨学金を支給することを目的に、平成17年度に制定されたもので、今回で4回目になります。教養教育奨学金助成学生の選考は、全学部二年次の応募者が第Ⅰ～Ⅲセメスタに修得した成績を基づき選考委員会に

おいて行われ、50名の学生が選考されました。授与式では、鷲田清一総長から表彰状の授与が行われ、小泉潤二理事・副学長、関　順一郎監事、大和谷　厚学生生活委員委員長、各学部の学部長や学科長、工藤眞由美大学教育実践センター長、眞鍋昭治郎副センター長、山成數明教育実践研究部長、関　昭裕学生部長、小田雅博事務長も列席し、受賞者を祝福しました。

（大学教育実践センター）

公開講義「著作権法を巡る最近の動向～今後の著作権法改正の展望について～」開催

1月14日(水)、内閣官房教育再生懇談会担当室長（前文化庁審議官）の吉田大輔氏を講師としてお迎えし、高等司法研究科・法学研究科附属法政実務連携センター共催で公開講義「著作権法を巡る最近の動向～今後の著作権法改正の展望について～」を開催いたしました。

講義では、デジタル技術が急速に進展するなかで、権利者側の利益保護の問題や権利関係の複雑化への対応が迫られていること、一方で利用者の立場からはデジタルコンテンツの利用促進ための新たな法整備が積極的に図られている現状など、著作権法の最新の議論について具体的な事例を示しつつ大変わかりやすくご説明くださいました。また、違法流通への対策の強化、アーカイブ事業などの新たな利用方法への対応策、さらに残された大きな課題として「日本版フェアユース規程」の導入の問題についてもご紹介くださいました。最後には、「著作権法には、現代社会を映す『鏡』のような一面もあり、研究や実務の対象としては興味つきない分野である」ことを強調されました。

受講生からは、「変化の激しい著作権法の最新の議論に触れることができ、大変興味深い講義だった」「著作権法は、まさに生きている法律！最先端の法律だということを強く実感できた」といった感想が寄せられました。

（法学研究科・法学部、高等司法研究科）

薬学研究科ＦＤ研修会実施

薬学研究科では、学務会議（議長：八木清仁教授）主催のFD研修会を定期的に実施しています。今年度は第二回研修会を9月6日(土)に、また第三回研修会を1月14日(水)に実施しました。

第二回FD研修会では、「学生のニーズと教員の希望のマッチング」を表題に、41名の教員が参加し、先に学務会議が取りまとめた学生アンケート（授業に関する学生のニーズ調査）を基礎に、8～9名の教員からなる4つの小グループで検討内容を取りまとめ、学生のニーズへの対応策を作りました。そして今後は、この対応策に応じて教育プログラムの改革に臨むことを確認しました。また、新薬学教育制度の導入に伴い実施される薬学共用試験（CBTとOSCE）に向けた検討状況、さらには厚生労働省委員会による新しい薬剤師国家試験の在り方が報告され、教員全員がそれぞれの授業の改革に取り組むことが提案されました。

第三回FD研修会では50名の教職員が参集し、平成25年度から導入される「薬学教育第三者評価」についての検討状況の報告（山元　弘教授）がありました。第三者評価は、自主的に実施される分野別評価の最初の例となることから、多方面から注目を集めています。

教員による小グループディスカッションの様子

今年は新薬学教育制度がスタートして4年目を迎えます。今後も薬学研究科教職員が一丸となって課題の解決にあたりたいと考えています。

（薬学研究科・薬学部）

理学研究科『第１０回理学懇話会』開催

理学研究科では、1月15日(木)、千里阪急ホテルにおいて、「第10回理学懇話会」を開催しました。

本懇話会は、例年、企業等の幹部として活躍中の理学研究科・理学部卒業の方々約20名の委員をお招きして、本研究科の教育・研究等について意見交換等を行って参りましたが、今年度は大幅に趣向を変え、「産学連携時代の先端理学研究」をテーマに本研究科6専攻の62研究室がポスター発表を行い、企業等の皆様へ最新の研究をご紹介する企画として、より多くの理学研究科OBの皆様にご案内したところ、当日の懇話会には委員の方に加えて企業等で活躍されている理学研究科OB約80名にご参加いただくことができ、全体で約180名の出席となりました。

実行委員長である渡會　仁評議員の開会の挨拶に始まり、続いて東島　清研究科長から研究科長挨拶・理学研究科の現状について報告が行われた後、隣接したポスター発表会場では、貼り出されたポスターをもとに、各研究室が行っている最新の研究についてポスター発表者である大学院生及び教員と企業等学外出席者との間で、通常の学会等とは異なった視点から活発な質疑応答が行われました。

意見交換会

ポスター発表会場での質疑応答の様子

また、ポスター発表後の意見交換会におきましては、滝澤温彦副研究科長の司会のもと、企業等学外出席者、理学研究科内出席者の双方から理学研究科の教育・研究に対する助言・要望等、様々な意見交換が行われ、今後の理学研究科の発展のために大変有意義なものとなりました。

引き続き行われた懇親会では、和やかな雰囲気のもと意見交換が行われ、いつまでも話が尽きない様子でした。

（理学研究科・理学部）

平成２０年度第２回国際交流に関する教職員研修会実施

大阪大学国際交流室では、国際交流に関わりや関心をもつ教職員を対象とした研修会開催を奨励しています。

1月19日(月)には、「平成20年度 第2回 国際交流に関する教職員研修会」が吹田キャンパスの医学部銀杏会館にて開催されました。

国際交流室長の辻　毅一郎理事・副学長の挨拶に引き続き、真島和志教授（国際交流室員、基礎工学研究科）の司会のもと、文部科学省の平成19年度大学教育国際化推進プログラム（海外先進研究実践支援）の助成を受けてアメリカとドイツの大学において研究に従事した長田真里准教授（法学研究科）、來村徳信准教授（産業科学研究所）、長原　一助教（基礎工学研究科）、小泉雄一郎助教（工学研究科）の4名から、それぞれの在外研究の成果が発表されました。

大阪大学と相手大学との特許の共同申請につながる成果を得た方も含め、どの方も短期間ですばらしい成果を挙げられたこと、そして、若い時期に海外の一流大学とのつながりを得たことは、今後の財産となり、大阪大学の次代を担う研究者として育っていくであろうことが伺えました。また、発表者からも、海外で有意義な体験ができたことに関し、受入れ大学を始めバックアップ体制を整えた各部局や事務、国際交流室への謝意が述べられました。

発表では、それぞれが達成した研究成果に加えて、受け入れ大学における研究環境や国際交流に関する体験が報告されました。

会場には、同支援制度の平成19年度採択者の教員をはじめ、国際交流関連の教職員や学生など23名の参加者がありました。質疑応答では、研究を進める上での日本との相違点、海外で研究に従事する意義や有益性、派遣にあたっての所属研究科の反応などについて、報告者とフロアーの参加者との間で活発な意見交換が行われました。

残念なことに、文部科学省によるこのプログラムは、平成20年度をもって終了します。本研修会を締めくくるにあたり、司会の真島教授から、他の国際交流助成について説明がありましたが、国際交流室としては、このような貴重な経験の場を次世代にも提供できるよう、サバティカル（研究休職）制度の部局における活用の促進も含め、今後とも関係方面に働きかけていく所存です。

（国際交流室）

第６回国立大学医療人養成等推進協議会開催

2月5日(木)にKKRホテル東京において、第6回国立大学医療人養成等推進協議会が開催されました。

この会議は、国立大学の医学部、附属病院及び薬学部の関係者が共に緊密な連携を図り、それぞれの各専門の英知を結集して、応分の負担を原則に質の高い専門医療人の養成を推進するとともに、高度先端医療の研究・開発など医療の質の向上に資するための検討の場として、国立大学医学部長会議代表、国立大学医学部附属病院長会議代表、国立大学薬学部長会議代表の三者の合意に基づき平成17年度に設置されたもので、今回は6回目の開催となったものです。

医学部長会議から千葉大学、熊本大学、病院長会議から東北大学、千葉大学、広島大学、薬学部長会議から東北大学、広島大学、長崎大学、本学及び文部科学省医学教育課が出席されました。

本会議庶務担当の国立大学薬学部長会議幹事大学の当番校である本研究科小林資正研究科長が司会を務めることとなり、開催宣言の後、出席者の自己紹介および陪席者紹介が行われ、議事がすすめられました。

最初に太田広島大学薬学部長から6年制薬学教育について薬学部からの取り組み内容の進捗状況について報告があった後、小林研究科長から薬局実習にかかる現状についての報告がありました。

引き続き、里見東北大学病院長から国立大学附属病院に対して行った薬学実習の検討状況に関するアンケート結果についての説明があり、前年度調査時よりも検討がすすんでいるとの報告がありました。

その後、文部科学省への質疑応答も織り交ぜながら意見交換が行われ、病院長会議代表大学からは平成22年度から実施される6年制学科学生の病院実習にかかる経費等に関する厳しい質問等もありましたが、質の高い薬剤師の育成について、今後も三者が協力して連携していくことを確認した後、閉会となりました。　　（薬学研究科・薬学部）

英国政府主席科学技術顧問一行が表敬訪問

2月10日（火）、John Beddington英国政府主席科学技術顧問と英国の科学技術担当者を含む一行8名が、本学吹田キャンパスを訪問し、三間圀興レーザーエネルギー学研究センター長、疇地　宏同副センター長、兒玉了祐工学研究科教授の案内のもと、レーザーエネルギー学研究センターを視察しました。質問も交えながら、1時間30分熱心に施設を見学した一行は、中之島センターへ移動し、鷲田清一総長を表敬訪問しました。表敬訪問には、辻　毅一郎理事・副学長、馬場章夫工学研究科長、児玉孝雄免疫学フロンティア研究センター特任教授、兼松泰男先端科学イノベーションセンター教授、木内行雄国際部長、江藤靖弘国際交流課長も加わり、英国との科学技術交流についての情報及び意見交換を行いました。今回来訪されたBeddington氏は、首相や内閣に対し助言を行うことのできる科学技術政策担当者として活躍されており、今後、本学と英国の研究機関との益々の研究協力が期待されるところです。

（国際部国際交流課）

第6回障害学生支援室セミナー開催

2月13日(金)に第6回障害学生支援室セミナー「障害学生に対するキャリア支援を考える―大卒障害者就労の現状と大学が期待されている役割―」が開催されました。講師には、日下部隆則さん（富士ゼロックス株式会社）、星野和也さん（パナソニック電工株式会社人事担当者）、高見愛さん（基礎工学研究科博士前期課程2年）の3名をお招きしました。

PC要約筆記のついた講演の様子

日下部さんからは、富士ゼロックス株式会社に勤務する聴覚障害当事者として、障害のある障害学生の就職活動や就労が一体どのような状況にあるのかという現状の全体像の紹介があり、続いて星野さんからは、パナソニック電工株式会社の人事担当者として、障害学生の求人選考のプロセスやポイント、採用後のサポート状況に関する具体例の紹介がありました。また、高見さんからは、阪大に在籍する障害学生の立場から、自身の就職活動の経験の紹介がありました。

3名の講師のお話からは、就労後の支援状況は充実してきている一方で、障害学生の就職活動には、まだまだ残されている街や建築物のバリアに加え、雇用障害種別やサポートの内容、企業風土といった質的な情報の不足がバリアとなっていることが明らかになりました。

障害学生に対するキャリア支援のメニューとして、質的な情報提供ネットワークの強化が必要であることが実感され、盛況のうちに幕を閉じました。

（学生部キャリア支援課）

シンポジウム「持続可能なデザインとは」主催
ーサステイナブル・デザインの視点でトヨタ、ホンダなど産官学専門家討議、日本初会合ー

サステイナビリティ・サイエンス研究機構（RISS）は、2月28日(土)、大阪大学中之島センターで、日本初のデザインの視点からサステイナビリティ（持続可能性）を考察するシンポジウム「持続可能なデザインとはー環境、安全安心、人は伝統からのアプローチー」を主催しました（プログラム等詳細はwww.riss.osaka-u.ac.jp）。

同シンポジウムは、国連、IPCC等で討議されてきた地球温暖化等、サステイナビリティの問題をCO_2排出量、代替エネルギー等々、工学的分析に留まらず、包括的分析となる「デザイン」の観点からの考察が近年、重要視される背景を受け、その将来的研究等の方向性を見出すことを目的に、RISSが企画しました。デザインの視点で持続可能な地域社会を考える動きは、「サステイナブル・デザイン（持続可能なデザイン）」といわれ、単なる技術やエネルギーに偏重されるサステイナビリティの課題を都市や歴史、文化といった視野から考えるもので、今回のシンポジウムは、理系・文系的思考を交え、アーティスト、グローバル企業のデザイナー、政策決定者らが一堂に会する貴重な機会となりました。

まず、主催者を代表し、武田佐知子理事・副学長がサステイナブル・デザインの重要性とシンポジウム開催意義を開会挨拶で述べたあと、南條史生・森美術館館長が基調講演を行いました。南條氏は、アートは環境問題の課題を喚起し、「環境問題は文化の問題」と主張。「最高のデザイン」がエコ認識を高めるとし、デザインが淘汰されない商品は長く使われ、結果的に環境負荷を減らすことができると、「デザインの持続可能性」の重要性を提示しました。

続く招待講演では、海老澤伸樹・株式会社本田技術研究所常務執行役員が、同社が世界初の環境対策のマスキー法をクリアした事例を紹介し、ハイブリッド車や電気自動車、燃料電池車の実用化に取り組んでいる事例を紹介。デザインが車両のアップ化でパッケージングや空力性能など、大きな役割を担っていると説明しました。

また、細野哲弘・経済産業省製造産業局長は、国のものづくり政策にかかわる立場から、2008年度からサステイナブル・デザイン賞（経済産業大臣賞）を創設、「良いものを長く使う」、価値観の重要性を力説。「もの」「感性＝心」のあり方を重視し、日本のものづくりの基礎をサステイナブル・デザインで考える国の方向性を示しました。

高遠秀典・トヨタ自動車株式会社グローバルデザイン統括部担当部長は、Zeronize（事故などのネガティブをゼロに）& Maximize（快適性などポジティブな点を最大限に）を両立させた「サステイナブル・モビリティー」を紹介し、それをいかにエコカーの魅力を高めるデザインに到達させるかが目標と主張しました。

武田理事・副学長

ホンダの海老澤常務執行役員

また、川田学・ヤマハ株式会社デザイン研究所所長の講演では、同社のデザイン哲学が、「Integrity（本質）」「Innovative（創造的）」「Aesthetic（美しいデザイン）」「Unobtrusive（でしゃばらないデザイン）」「Social Responsibility（社会的責任を果たすデザイン）」の5つと紹介。日本古来の精神・美意識が介在し、道具（楽器）と人は人生の良きパートナーで、使うほど価値が増すデザインこそがサステイナブル・デザイン、と強調しました。

最後には、竹村真一・京都造形芸術大学教授が講演。地球を人間と同様、一つの生命体とする捉え方から、地球を可視化しうるかが課題と説きました。地球にいながら、地球を客観的に見えるようグラフィックアートを駆使した「触れる地球」を洞爺湖サミットで展示したことを説明、地球をデザインすることが、地球Literacyを広めると話しました。

講演後のトークライブでは、サステイナブル・デザインでは、物と人（心）の相互関係が重要で、サステイナビリティは、いまや世界の要請で、文化、技術、哲学を問わず広義における考察が重要と、方向性を一致させました。これを受け、トークライブ後には、都市や歴史、文化を視野に入れ、日本の自然や風土を礎とした「もの」と「心」の融合が重要とする「JAPANサステイナブル・デザイン宣言」が採択されました。

21世紀の課題解決には、「サステイナブル・デザイン」を通して、多分野・異分野の知恵や考え方を統合することが重要。分野や立場の違う専門家が、デザインの視点でサステイナビリティを考えた同会合は日本では初めて。朝日新聞が100行の特集記事を掲載した上、日経、毎日新聞でも報道され、関心の高さが示されました。サステイナブル・デザインの重要性を内外にアピールするだけでなく、その方向性を示す重要な会議になりました。

（サステイナビリティ・サイエンス研究機構）

「大阪大学真空管計算機」が情報処理技術遺産に認定

社団法人情報処理学会は、我が国のコンピュータ技術発達史上、重要な意義をもつ情報処理技術遺産の保存と活用を図るために、情報処理技術遺産および分散コンピュータ博物館認定制度を始め、第1回目として23件の情報処理技術遺産と2件の分散コンピュータ博物館を認定しました。1950年代に本学工学部の城憲三教授らによって開発された「大阪大学真空管計算機」（大阪大学総合学術博物館所蔵）も第1回目の情報処理技術遺産として認定されました。3月2日(月)に東京上野の国立科学博物館において認定式が行われ、本学から総合学術博物館の橋爪節也教授と横田　洋研究支援推進員が出席しました。

「大阪大学真空管計算機」は昨年10月に国立科学博物館の重要科学技術史資料にも登録されました。重要科学技術史資料と情報処理技術遺産の両方に認定されている資料は現在のところ、他にはありません。城教授を中心とした大阪大学の計算機研究は日本のコンピュータ開発史上、きわめて重要な意義をもっていたことが認められていますが、その研究成果である真空管式計算機が現在まで保管され、重要な遺産として一般に公開されていることも高く評価されています。

（総合学術博物館）

認定証を手にした橋爪教授（認定式会場にて）

公開講座「初めての心エコー図検査講習会」を開催

医学系研究科保健学専攻では、3月5日(木)に公開講座「初めての心エコー図検査講習会」を開催しました。

心エコー図は、心臓病の診断に用いられている超音波検査法で、患者さんに対して全く非侵襲的な「人に優しい」検査法です。検査する側では、患者さんの体位、検査手順、探触子の操作、記録方法などどれを取っても「易しい」検査ではなく、むしろ難しい検査法で、心エコー図の記録や読影には熟練が必要です。そのため、検査方法の習得を希望する医療関係者は多いものの、その機会が少ないのが現状です。

別府特任教授

今回の公開講座は、受講者を少人数に限定し、開業医及び検査技師を対象として検査の技術修得の実習を中心とした講習会を開催しました。11名の受講者に対し講義の後、4グループに分かれて実習を行いました。日本心エコー図学会理事でもある中谷　敏教授、別府慎太郎特任教授を始め、関連学会の認定する指導医・専門医である教員らによるマンツーマンでの丁寧かつ熱心な実技指導が行われました。

講習会終了時のアンケートでは、個別指導の丁寧さ、初めての機械操作の割に上手く診断画像を描出できたことへの達成感等、参加者全員から満足した内容のコメントが寄せられました。次回の開催を希望する声も多数あり、保健学専攻では今後も同様の公開講座を開催する予定です。

（医学系研究科・医学部）

Industrialised Countries Instrument Education Cooperation Programme（ICI ECP）プロジェクト始まる！

日本政府が欧州連合（EU）と実施する教育連携プログラムの一貫として、日本の高等教育機関と欧州の高等教育機関が共同で実施する学生交流プロジェクト（ICI ECP［Joint Mobility Project］）に対し、2008年度に大阪大学から2件採択されました。そのうちの一つ、IGM（Interdisciplinary Global Mechanical Engineering Education）プロジェクトの全体会合が1月13日(火)に大阪大学吹田キャンパスで開催されました。このプロジェクトは、日本側三大学（大阪大学（日本側幹事校）、東京大学、東京工業大学）とEU側三大学（デルフト工科大学（EU側幹事校）、スウェーデン王立工科大学、デンマーク工科大学）の間で博士前期・後期課程の学生を半年間留学させるプロジェクトです。プロジェクト全体会合では、本年4月からの相互派遣学生募集に向けて、文化的な違い、大学制度、単位制度、教育カリキュラムの違い、現地での保険の問題、我が国の学生の英語力の問題などが議論され、双方の学生が充実した留学経験を積めるよう実質的な合意に至りました。本学では、「山本脩一郎・志郎教育改革基金」の支援を得て、「広義の機械工学」が対象ということで、機械工学専攻、知能・機能創成工学専攻、マテリアル生産科学専攻、地球総合工学専攻船舶海洋工学コース、精密科学・応用物理学専攻、ビジネスエンジニアリング専攻が参画しています。また、EUからの留学生受け入れには本学FrontierLab@OsakaUの枠組みを活用し、国際部学生交流推進課および本研究科関連部署の支援を得て、スムースな受け入れが期待されます。本学でも既に派遣希望学生を対象に2回の説明会を実施しましたが、学生からの熱心な問い合わせが殺到しています。

（工学研究科・工学部）

IGMプロジェクト一行が馬場工学研究科長を表敬訪問
前列左から：冨山デルフト工科大学教授（プロジェクトEU代表）、Wingard スウェーデン王立工科大学教授、Wieringaデルフト工科大学教授
後列左から：藤田大阪大学教授（プロジェクト日本代表）、工学研究科国際交流室長原島教授、馬場工学研究科長、Jacobsenデンマーク工科大学教授夫妻

もう一つのプロジェクト、“INTERFACES”（International Exchange Program for Advanced Students in Natural Sciences EU-Japan）は日本側3大学（大阪大学（日本側幹事校）、京都大学、東北大学）と欧州側4大学（グローニンゲン大学（EU側幹事校）、ハイデルベルグ大学、ボーフム大学、ウプサラ大学）のいずれも数学を含む理学系学部が日欧間で、主に博士前期課程の学生年間20名（日本側10名、欧州側10名）を一学期間留学させるものです。本学では国際企画推進本部、理学研究科、基礎工学研究科、グローニンゲン教育研究センターの共同作業で申請し、採択を経て、その後プロジェクトの立ち上げのために多くの準備をしてきました。今年2月には初回の7大学会議を本学で開催しました。この会議は主にプロジェクトのフレームワークをしっかりと固めることを目的としたもので、学術交流協定、単位互換制度、派遣受入時期調整、7大学の派遣プランと受入プログラムなどについてお互いの希望を率直に話し合い、具体的な派遣プロセスへの最適な準備状況を作り出すことが出来ました。本学の受入プログラムについて言えば、上記のIGMと同様にINTERFACESもFrontierLab@OsakaUプログラムを採用することを決めました。これによって学生受入について全学的な協力を得られるようになることを期待しています。

フレームワークが設えられたので、次にはそこで実際に派遣計画を実行できるように、教員レベルでのアカデミックな情報交換の場を作りました。本学理学研究科でITP/ICIECPシンポジウム「欧州との戦略的協調による国際教育の展開」を理学研究科・国際企画推進本部主催、基礎工学研究科共催で3月10日(火)、11日(水)に開催しました。欧州側パートナー大学から5名の教員、国内からパートナー大学である東北大学、京都大学から数多くの教員と職員、さらに本学内教員、職員、学外からの多くの参加者を迎え、熱心な議論が繰り広げられました。二日目には実際に派遣を計画している学生4名と指導教員に参加してもらい、欧州側の教員と研究テーマにいたるまでの詳細な議論、プログラム遂行上の問題点、将来の展望を話し合いました。

（理学研究科・理学部）

第１４回企業等との研究懇話会開催

第 14 回大阪大学研究懇話会が、3 月 10 日(火)に大阪大学中之島センターで開催されました。

この研究懇話会は、企業等に本学における研究活動の情報を提供するとともに、企業が求める人材あるいは共同研究など大学に対する要望について、幅広く意見交換することを目的に年に一度、開催されています。

当日は、主として関西の企業等の研究開発担当役員及び本学の部局長等、総勢 80 名以上が集まり、『大阪大学の国際連携活動』というテーマのもと、鷲田清一総長の開会の挨拶の後、辻　毅一郎国際交流担当理事・副学長並びに国際連携活動を推進する本学教員からそれぞれ話題提供があり、その後、『企業の海外における取り組み』として、企業側を代表してパナソニック株式会社　代表取締役専務の福島伸一氏から「パナソニックの海外における取り組み」と題するご講演をいただきました。

鷲田総長

福島パナソニック(株)代表取締役専務

また、講演の後は、今後の大学運営、産学連携及び協力の推進等について、参加された企業等の方と活発な意見交換が行われました。

（研究推進部研究推進課）

事務改革推進に関する総長講話開催

3 月 11 日(水)、医学部銀杏会館 3 階阪急電鉄・三和銀行ホールにおいて、理事及び事務職員約 280 名の出席により事務機構改革に関する総長講話が行われました。

講話では、鷲田清一総長から、事務機構改革に関する本学の理念と題して、事務局制を廃止し事務局は本部事務機構と名称変更すること、事務局長は理事・副学長とし事務担当理事として事務を総括すること、全理事が事務組織を含む全ての大学運営に関与すること等について、約 45 分間に渡り講話していただきました。

出席者は最後まで熱心に聴講し、事務改革を進めることの必要性について改めて認識しました。

（事務改善推進室）

LFEXペタワットレーザー完成記念式典、講演会及び記念祝賀会開催

レーザーエネルギー学研究センターでは、相対論プラズマ・高速点火実験装置：LFEXペタワットレーザーの完成を記念して、3月13日(金)に完成記念式典、講演会及び記念祝賀会を開催しました。

同装置は、10ペタワットの出力を誇る超高強度のレーザー装置であり、地球に降り注ぐ太陽エネルギーを直径数十ミクロンのスポットに集中する能力を有しており、次世代エネルギーとして期待される核融合やブラックホールの解明等のレーザー宇宙物理を含めた、いわゆる高エネルギー密度状態の科学の研究に用いられます。

記念式典は、三間圀興センター長の式辞で始まり、鷲田清一総長の挨拶に続いて、来賓の核融合エネルギー推進議員連盟事務局長で法務大臣の森　英介衆議院議員、勝野頼彦文部科学省研究振興局学術機関課長、飯吉厚夫中部大学総長、霜田光一東京大学名誉教授並びに阪口善雄吹田市長から祝辞があり、それぞれ同装置を用いた研究や科学の進展に期待をする言葉が述べられました。

その後、同装置の製作等に関わり大きな協力を得た関係会社へ感謝状の贈呈が行われるとともに、宮永憲明同センター教授から、アニメーションによるLFEX装置の解説と来賓並びに同装置の製作に携わった海外からの研究者によるデモショットが行われました。

来賓によるLFEXデモショット

勝野学術機関課長祝辞

三間センター長挨拶

講演会では、米国ローレンスリバモア研究所のクリストファー・バーティ氏から「Scope of US IFE Research and Development」と題して、疇地　宏副センター長から「高速点火実証実験FIREXの展望と超高強度光科学の開拓」と題する講演が行われた後、見学会が実施されました。

祝賀会は、会場を学外のホテルに移して行われ、三間センター長の挨拶、森法務大臣の来賓祝辞に続き、原田憲治衆議院議員、文部科学省研究開発局の山本日出夫核融合科学専門官、IFEフォーラム座長の関西電力藤野常務取締役、文部科学省光科学ネットワーク拠点プログラムディレクターである光産業創成大学院大学の加藤義章教授からの来賓祝辞の後、レーザー技術総合研究所長の山中千代衛大阪大学名誉教授の発声による乾杯で始まりました。祝賀会には、同装置の完成を祝って約200名の参加者が集い、おおいに盛り上がりました。最後に西尾章治郎理事・副学長と疇地副センター長からお礼の挨拶が行われ祝賀会は終了しました。

（レーザーエネルギー学研究センター）

平成２０年度大阪大学大学院基礎工学研究科博士学位取得者お祝いの会開催

平成15年度よりはじめられました「大阪大学大学院基礎工学研究科博士学位取得者お祝いの会」を3月13日(金)に福利厚生センター4階食堂「カフェテリア　フィア」にて開催いたしました。この会は、本年度基礎工学研究科博士学位取得者、教員、および博士後期課程学生が集まり、平成20年度基礎工学研究科博士学位取得者を祝福すると供に、博士学位取得者が自身の学位論文に関するポスター発表を行ない、博士号取得者同士、さらには異分野の教員・学生等との議論・意見交換を通して基礎工学研究科内における交流を活性化し、参加者の視野を広げることを目的としたものです。会では、学位取得者19名をはじめ、基礎工学研究科長、副研究科長、学位取得者の指導教官、基礎工学研究科の教授、准教授、助教、技術職員、学生が参集し、90名余が参加しました。博士号取得者の研究内容をまとめたポスター発表が行なわれると供に、立食形式の軽食が供され、フランクな雰囲気で同分野・異分野間の交流が活発に行なわれました。学位取得者と研究科長との記念撮影も行われ、博士号取得者の記念に残る素晴らしい会となり、大盛況となりました。

（基礎工学研究科・基礎工学部）

２１世紀懐徳堂が３月に２つの主催イベント開催

大阪大学 21 世紀懐徳堂は、3 月 3 日(水)に「テルミン・レクチャーコンサート」を、3 月 14 日(土)に多様な人材推進活用委員会と共催で「キャリアデザインフォーラム」を豊中キャンパスにある 21 世紀懐徳堂多目的スタジオで開催しました。

3 日の「テルミン・レクチャーコンサート」では、サイバーメディアセンターの菊池　誠教授を中心に演奏とテルミンについての解説、さらに実際に楽器を実体験できるプログラムが行われました。手作り感があること、テルミンという珍しい楽器の演奏を本格的に楽しめたことが好評で、平日の夜間にもかかわらず 100 名近くの方に集まっていただき、演奏終了後も多くの方がテルミンを通して学生スタッフを含めた演奏者と交流しました。

また、14 日の「キャリアデザインフォーラム」では多様な人材との交流を主目的として、映画（ルッキング・フォーフミコ）の上映と、その映画監督の栗原奈名子さんをメインゲストに、武田理事・副学長、松繁寿和教授（大阪大学多様な人材活用推進委員会委員長）をはじめとしたパネラーによるディスカッション、参加者との自由な意見交換会が行われました。その中で、「キャリアとはどう生きるかで、それは一人一人違うものであり、自分自身がどう自分のキャリア＝人生をデザインしていくかを意識していくことが大事である」という意見が出されました。参加した学生からは、日頃接する機会が少ない他学部の先生や学生、OG、一般社会人との交流は新鮮であり刺激になったという声が多数寄せられました。

（21 世紀懐徳堂）

大阪大学薬品管理支援システム（OCCS-II）利用者説明会の開催

平成20年12月に大阪大学薬品管理支援システム（OCCS）がOCCS-IIへとバージョンアップされました。これに伴い、3月17日(火)から19日(木)の3日間、利用者説明会を開催しました。一般的な使用法に加え、マスタ申請機能や携帯電話からの利用などの新しい機能を中心とした内容での説明を、全学の利用者に対応するため、吹田地区、豊中地区でそれぞれ会場を設定し、部局ごとに8回に分けて開催しました。（説明会資料はhttp://www.epc.osaka-u.ac.jpからダウンロードできます。）

いずれの講習会も多数の出席者があり、講習会終了後、新機能や設定作業に関する多くの問い合わせが寄せられました。近年、利用者の薬品の適正管理に対する意識も高まってきており、大阪大学における所有薬品登録件数も17万件を超えてきました。携帯電話から登録できるシステムなど新規に導入された機能については、今後の活用が期待できます。

（環境安全研究管理センター）

第2回障害学生支援室カフェ開催

3月19日(木)に第2回障害学生支援室カフェ「エコ・レンジャーとゴミ拾い」が豊中キャンパスにおいて開催されました。薄曇りの空の下、カフェ・マスターとして知的障害のある障害者雇用推進支援室用務補佐員（エコ・レンジャー）のみなさん総勢14名が豊中キャンパスに集合してくださいました。当日は豊中キャンパスを6区画に分け、学生参加者とともにグループ毎にゴミ拾いを行いました。いざ清掃を始めだすと、みなさんゴミを拾うことに夢中に…。普段何気なく行き交う道にも、エコ・レンジャーの皆さんには見逃せないゴミがたくさん落ちています。担当区画に行くまでの間にもどんどんゴミを見つけ出し拾っていく様は圧巻でした。

ゴミは少ない方がいいけれど、大漁!?にみんな思わず笑顔

1時間あまりの清掃で集まったゴミの量は写真の通り。小さな菓子包装から大きな台車まで、様々なものが捨てられていました。

清掃終了後の意見交換では、「思っていたよりも吸い殻が多かった」「きれいと思っていたけど上手く隠れているだけ」「今日1日では拾いきれない」などの感想がありました。

きれいだと思っていてもゴミが多かったり、エコ・レンジャーの皆さんが誰よりもゴミを見つけるのが早かったり、静かな意見交換だと思っていたけれども意外なパフォーマンスが披露されたりと、様々な意外性が飛び出すイベントとなりました。

（学生部キャリア支援課）

退職教授との懇談会開催

総長主催による平成20年度退職教授との懇談会が3月25日(水)医学部銀杏会館で開催されました。

これは、本学を退職または転出される教授の方々の永年のご尽力に感謝するとともに、惜別の意を表すために開催されるもので、今年は対象者37名のうち、21名の退職教授が出席しました。

はじめに、当日出席の退職教授の紹介があり、鷲田清一総長の挨拶のあと、退職教授を代表して医学系研究科の春名正光教授から謝辞が述べられました。

引き続き、西田正吾理事・副学長の発声で乾杯し、終始和やかな雰囲気の中で歓談が行われ、名残を惜しみつつ閉会となりました。

(総務部総務課)

平成２０年度退職時永年勤続者表彰式挙行

平成20年度退職時永年勤続者表彰式が、3月27日(金)コンベンションセンター1階会議室1において、被表彰者62名のうち51名の出席のもとに挙行されました。

式は、鷲田清一総長から被表彰者一人一人に表彰状が授与された後、祝辞が述べられ、続いて、被表彰者を代表して歯学研究科事務部長の三村　進氏が謝辞を述べ閉式しました。

今年度表彰された方は、次のとおりです。

竹　村　秀　次(事)
小　島　良　起(事)
年　梅　　徹(事)
澤　田　政　夫(事)
三　井　　衛(事)
今　出　孝　行(事)
石　橋　安　雄(事)
吉　田　勝　美(事)
吉　田　久美子(事)
駒　井　幸　則(事)
廣　橋　利　夫(事)
平　林　京　子(図)
備　酒　　寛(文)
岡　田　正　紀(人)
金　定　良　治(法)
大　濵　光　央(理)

安　達　清　治(理)
安　部　貴　子(理)
中　村　三枝子(医)
松　本　富美子(医病)
松　本　和　子(医病)
年　梅　英　子(医病)
上　田　博　美(医病)
黒　川　みどり(医病)
西　田　幸　子(医病)
中　尾　由紀子(医病)
橋　岡　剛　子(医病)
門　野　れい子(医病)
山　本　美　幸(医病)
高　畑　昇　一(医病)
池　上　秀由樹(医病)
泉　　十九三(医病)

三　村　　進(歯)
大　塚　真　琴(歯)
佐　藤　眞由美(歯)
山　根　隆　子(歯)
角　田　　明(歯病)
益　池　　豊(歯病)
阪　田　正　雄(薬)
長　瀬　　譲(工)
元　木　久　子(工)
宮　地　洋　子(工)
畑　　博　巳(基)
石　井　洋　子(基)
生　田　廣　美(基)
八重川　克　利(基)
實　田　秀　一(基)
株　　喜代次(基)

秋　山　孝　子(情)
岡　平　常　正(言)
妹　尾　博　文(言)
堺　　末　廣(微)
上　山　日出夫(微)
和　田　多佳志(微)
小　野　泰　子(産)
藤　田　明　功(蛋)
阪　口　健　一(蛋)
宮　川　順　一(蛋)
美　濃　邦　夫(極限)
武　田　耕　三(保)
奥　野　英　夫(保)
立　道　晴　郎(核)

(総務部人事課)

歴史セミナー「緒方洪庵の生きた時代」開催

2月17日(火)中之島センター佐治敬三メモリアルホールにおいて、NHK大阪放送局と共催で、歴史セミナー「緒方洪庵の生きた時代」を開催しました。

このセミナーは、NHK大阪放送局制作の土曜時代劇「浪花の華～緒方洪庵事件帳～」の放送に合わせ、大阪大学の源流である「適塾」の創設者である緒方洪庵の生きた時代を講演とトークで振り返りました。

セミナーは、NHK大阪放送局の上田早苗アナウンサーの司会で、第1部では、本学名誉教授で大阪歴史博物館長の脇田　修先生による「緒方洪庵の生きた時代」と題して基調講演が行われ、第2部では、ドラマの原作者で本学卒業生でもある作家の築山　桂（つきやま　けい）さんとドラマでは主人公緒方　章の師　中天游の妻役を演じた女優の萬田久子さんによるトークショーが行われました。

脇田館長

左から上田アナウンサー、萬田さん、築山さん

ドラマ放映中と言うことで多数の参加応募者があり、抽選により約180名の方々が参加され、ドラマのシーンなどが流されると、会場では大きな拍手が起こり、関心の高さがうかがえるイベントとなりました。

また、ドラマの放映期間中は、適塾への来館者も飛躍的に伸び、大阪大学の源流である適塾が広く社会に発信されるいい機会となりました。

（企画部広報・社学連携事務室）

普通救命講習の実施とＡＥＤの整備

平成21年2月中旬から3月初旬にかけて各市消防本部の協力を得て、豊中、吹田、箕面の3キャンパスで普通救命講習を実施しました。本講習は、突然ケガや病気で倒れられた方に対して行う心肺蘇生法（人工呼吸、心臓マッサージ）やAED（自動体外式除細動器）の使用方法を習得することを目的に実施したものです。5日間を通じて126名の参加があり、修了者には各市消防本部から修了証が交付されました。

普通救命講習の様子

また、救命体制のさらなる充実を図るため、新たに保育園、総合学術博物館をはじめ17施設にAEDを設置するとともに、認知度向上のため、建物の入り口付近にAEDサインボード（オレンジ色の標識）を設置しました。

たけのこ保育園に設置したAED

事務局に設置したAEDサインボード

（安全衛生管理部）

2年目を迎えた学内保育園　ー施設整備と両保育園の近況ー

昨年11月下旬に始まったまきば保育園の改修工事が本年3月中旬に終了しました。玄関（約10m²）の増設、床暖房やウッドデッキ（テラス部分）の新設、セコムの設置、園庭の整備などに加え、厨房が一新されました。たけのこ保育園で5ヶ月間過ごした園児達は3月23日(月)よりまきば園舎での生活を再開し、新築のような保育室や遊具の整った園庭で元気いっぱい遊んでいます。また、たけのこ保育園においても、未整備であった幾つかの箇所が完備され、これによって2つの学内保育園は施設整備をほぼ終えて2年目を迎えました。

整備されたウッドデッキ（左）と園庭

明るく開放的になった部屋

3月28日(土)に、たけのこ保育園の卒園式が開催されました。保護者の方、保育士さんら多数が出席され、保育園生活最後の園児にとって晴やかで、心に残る式となりました。在園児や保護者の方々が見送る中で、昨年4月の開園後の第一期生となる3名の子供たちが元気に巣立っていきました。

卒園児（中央）と園長（左）、クラス担任（右）

今年度の在園児総数（4月1日現在の確定数）は83名で、その中、29名が新たな入園者、54名が昨年度からの継続在園者です。昨年12月に実施した第1次入園児募集・選考において定員オーバーのために入園待機となった方々も、その後、入園辞退者あるいは退園者が出た結果、希望通り4月から入園できました。なお、今のところ、定員にまだ少し余裕がありますので、この半年で保育が新たに必要となった構成員の方々の希望に可能な限り応えるべく、5月には第2次入園募集を実施したいと考えております。

（たけのこ保育園、まきば保育園、企画部企画推進課）

平成２１年度個別学力検査等実施

平成21年度個別学力検査等は、吹田キャンパス及び豊中キャンパスで実施し、各学部等関係者の方々のご協力により、無事終了いたしました。

一般選抜の志願者数及び志願倍率は、前期日程7,201名（2.8倍）、後期日程6,508名（9.8倍）で、両日程を合わせると13,709名となり、昨年に続き全国立大学の中で最多となりました。

前期日程試験は、2月25日(水)及び26日(木)に行われ、7,051名が受験し欠席率は全体で2.1%（昨年度1.8%）でした。合格者発表は、3月8日(日)に行われ、合格者数は2,727名（昨年度2,724名）でした。

続いて、後期日程試験が3月12日(木)、13日(金)及び14日(土)に行われ、3,076名が受験し欠席率は全体で52.7%（昨年度53.1%）でした。合格者発表は、3月22日(日)に行われ、合格者数は766名（昨年度769名）でした。

なお、両日程合わせた合格者数は3,493名でした。

（学生部入試課）

平成21年度　大阪大学入学者選抜試験（前期日程）合格者数等

学部	学科・専攻	募集人員	志願者数	志願倍率	受験者数	合格者数
文　学　部	人文学科	125	394	3.2倍	386	137
人間科学部	人間科学科	105	313	3.0倍	307	113
外国語学部	外国語学科　中国語専攻	30	79	2.6倍	78	32
	外国語学科　朝鮮語専攻	13	53	4.1倍	51	14
	外国語学科　モンゴル語専攻	13	51	3.9倍	49	14
	外国語学科　インドネシア語専攻	7	40	5.7倍	37	8
	外国語学科　フィリピン語専攻	9	37	4.1倍	37	10
	外国語学科　タイ語専攻	11	55	5.0倍	53	12
	外国語学科　ベトナム語専攻	11	60	5.5倍	59	12
	外国語学科　ビルマ語専攻	13	62	4.8倍	62	14
	外国語学科　ヒンディー語専攻	13	68	5.2倍	67	15
	外国語学科　ウルドゥー語専攻	13	54	4.2倍	50	14
	外国語学科　アラビア語専攻	19	52	2.7倍	51	20
	外国語学科　ペルシア語専攻	13	56	4.3倍	56	14
	外国語学科　トルコ語専攻	13	75	5.8倍	72	14
	外国語学科　スワヒリ語専攻	13	36	2.8倍	36	14
	外国語学科　ロシア語専攻	19	80	4.2倍	77	21
	外国語学科　ハンガリー語専攻	11	48	4.4倍	48	12
	外国語学科　デンマーク語専攻	13	53	4.1倍	53	14
	外国語学科　スウェーデン語専攻	13	39	3.0倍	37	14
	外国語学科　ドイツ語専攻	26	97	3.7倍	94	28
	外国語学科　英語専攻	45	149	3.3倍	148	46
	外国語学科　フランス語専攻	19	79	4.2倍	78	19
	外国語学科　イタリア語専攻	13	38	2.9倍	37	14
	外国語学科　スペイン語専攻	26	75	2.9倍	75	26
	外国語学科　ポルトガル語専攻	23	91	4.0倍	91	25
	外国語学科　日本語専攻	22	65	3.0倍	65	22
	外国語学部　計	421	1,592	3.8倍	1,561	448
法　学　部	法学科	145	341	2.4倍	341	153
	国際公共政策学科	68	132	1.9倍	130	73
	法学部　計	213	473	2.2倍	471	226
経 済 学 部	経済・経営学科	185	708	3.8倍	689	203
理　学　部	数学科	38	97	2.6倍	96	42
	物理学科	58	160	2.8倍	156	64
	化学科	60	193	3.2倍	189	64
	生物科学科生物科学コース	25	90	3.6倍	84	28
	生物科学科生命理学コース	10	21	2.1倍	21	10
	理学部　計	191	561	2.9倍	546	208
医　学　部	医学科	80	231	2.9倍	217	84
	保健学科　看護学専攻	68	116	1.7倍	112	74
	保健学科　放射線技術科学専攻	35	78	2.2倍	77	39
	保健学科　検査技術科学専攻	30	67	2.2倍	67	32
	医学部　計	213	492	2.3倍	473	229
歯　学　部	歯学科	54	103	1.9倍	96	56
薬　学　部	薬学科	20	102	5.1倍	98	20
	薬科学科	50	99	2.0倍	96	53
	薬学部　計	70	201	2.9倍	194	73
工　学　部	応用自然科学科	173	361	2.1倍	361	187
	応用理工学科	198	425	2.1倍	419	208
	電子情報工学科	129	263	2.0倍	257	136
	環境・エネルギー工学科	60	170	2.8倍	169	66
	地球総合工学科	94	213	2.3倍	212	101
	工学部　計	654	1,432	2.2倍	1,418	698

基礎工学部	電子物理科学科	74	215	2.9倍	208	75
	化学応用科学科	63	221	3.5倍	216	65
	システム科学科	127	335	2.6倍	329	131
	情報科学科	62	161	2.6倍	157	64
	基礎工学部　計	326	932	2.9倍	910	335
合　　計		2,557	7,201	2.8倍	7,051	2,726

注①　理学部、工学部、基礎工学部は、第一志望学科の志願者数である。　　注②　複数の募集単位（学科・専攻等）のある学部には、計を設けている。

平成21年度　大阪大学入学者選抜試験（後期日程）合格者数等

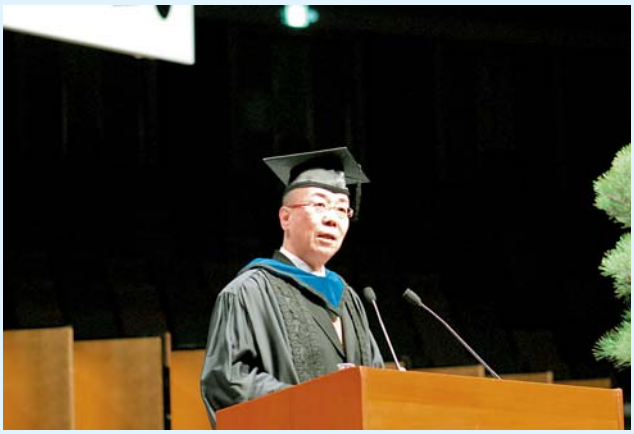
学部	学科・専攻	募集人員	志願者数	志願倍率	受験者数	合格者数
文　学　部	人文学科	40	342	8.6倍	195	41
人間科学部	人間科学科	25	249	10.0倍	133	27
外国語学部	外国語学科　中国語専攻	10	59	5.9倍	30	13
	外国語学科　朝鮮語専攻	5	63	12.6倍	40	6
	外国語学科　モンゴル語専攻	5	91	18.2倍	60	7
	外国語学科　インドネシア語専攻	3	36	12.0倍	26	4
	外国語学科　フィリピン語専攻	3	39	13.0倍	19	4
	外国語学科　タイ語専攻	4	28	7.0倍	21	7
	外国語学科　ベトナム語専攻	4	39	9.8倍	29	6
	外国語学科　ビルマ語専攻	5	51	10.2倍	32	9
	外国語学科　ヒンディー語専攻	5	60	12.0倍	34	8
	外国語学科　ウルドゥー語専攻	5	46	9.2倍	29	7
	外国語学科　アラビア語専攻	6	63	10.5倍	38	9
	外国語学科　ペルシア語専攻	5	42	8.4倍	30	7
	外国語学科　トルコ語専攻	5	66	13.2倍	30	6
	外国語学科　スワヒリ語専攻	5	56	11.2倍	28	7
	外国語学科　ロシア語専攻	6	57	9.5倍	29	7
	外国語学科　ハンガリー語専攻	4	23	5.8倍	11	5
	外国語学科　デンマーク語専攻	5	50	10.0倍	32	6
	外国語学科　スウェーデン語専攻	5	45	9.0倍	19	6
	外国語学科　ドイツ語専攻	9	71	7.9倍	38	11
	外国語学科　英語専攻	15	123	8.2倍	66	19
	外国語学科　フランス語専攻	6	40	6.7倍	25	8
	外国語学科　イタリア語専攻	5	39	7.8倍	18	6
	外国語学科　スペイン語専攻	9	66	7.3倍	42	12
	外国語学科　ポルトガル語専攻	7	60	8.6倍	36	8
	外国語学科　日本語専攻	8	41	5.1倍	20	10
	外国語学部　計	149	1,354	9.1倍	782	198
法　学　部	法学科	25	403	16.1倍	162	26
	国際公共政策学科	12	118	9.8倍	51	14
	法学部　計	37	521	14.1倍	213	40
経 済 学 部	経済・経営学科	35	406	11.6倍	139	45
理　学　部	数学科	9	100	11.1倍	43	10
	物理学科	18	272	15.1倍	134	19
	化学科	17	227	13.4倍	129	18
	生物科学科生命理学コース	20	68	3.4倍	37	20
	理学部　計	64	667	10.4倍	343	67
医　学　部	医学科	15	194	12.9倍	27	15
	保健学科　看護学専攻	10	72	7.2倍	20	11
	保健学科　〃（専門高校卒業生選抜）	2	0	—	—	—
	保健学科　放射線技術科学専攻	5	54	10.8倍	23	6
	保健学科　検査技術科学専攻	10	72	7.2倍	26	16
	医学部　計	42	392	9.3倍	96	48
歯　学　部	歯学科	6	82	13.7倍	29	7
薬　学　部	薬学科	5	89	17.8倍	49	5
	薬科学科	5	82	16.4倍	31	8
	薬学部　計	10	171	17.1倍	80	13
工　学　部	応用自然科学科	44	456	10.4倍	222	47
	応用理工学科	50	542	10.8倍	274	55
	電子情報工学科	33	340	10.3倍	155	37
	環境・エネルギー工学科	15	174	11.6倍	79	15
	地球総合工学科	24	183	7.6倍	89	24
	工学部　計	166	1,695	10.2倍	819	178
基礎工学部	電子物理科学科	20	180	9.0倍	76	22
	化学応用科学科	17	140	8.2倍	51	19
	システム科学科	34	220	6.5倍	81	40
	情報科学科	17	89	5.2倍	39	19
	基礎工学部　計	88	629	7.1倍	247	100
合　　計		662	6,508	9.8倍	3,076	764

注①　理学部、工学部、基礎工学部は、第一志望学科の志願者数である。　　注②　複数の募集単位（学科・専攻等）のある学部には、計を設けている。

平成２０年度大阪大学卒業式・大学院学位記授与式総長式辞

まず、本日ここに集われた 3577 名の学部卒業生のみなさん、2131 名の修士の学位を授与されたみなさん、そして博士の学位を授与された 716 名のみなさん。卒業ならびに修了おめでとうございます。また、この日まで長きにわたってみなさんの勉学と研究を支えてこられたご家族の方々のご支援に対しても、ここに心より敬意を表したく存じます。

みなさんは、大阪大学におけるさまざまな専門の勉学と研究を今日を一区切りとして、これから、社会のさまざまな現場に出てゆかれます。そしてそのなかでさらに何かのプロフェッショナルとしてみずからを鍛え上げてゆこうとされておられることでしょう。生涯の仕事としてそういう道に就かれる前に、みなさんが学ばれたその大学を代表する者として、あらためてみなさんに申し上げておきたいことがあります。



科学の研究と技術の発展がこれまで、人類に多大な恵みを与えてきたこと、これは疑うべくもありません。それまで、飢死にさらされていた人類の貧困を救い、治癒できず堪え忍ぶよりほかなかった難病を克服し、大きく寿命を延ばし、生活上の利便を飛躍的に増大させ、さらには離ればなれになった人と親しく通信するという夢も実現してきました。近代の科学と技術が人類にもたらした福祉と安寧、これは挙げるときりがないほどです。

大阪大学も、いわゆる研究拠点大学として、学術の最前線でさまざまの画期的な研究をくり広げてきました。みなさんはそのもっとも基礎の部分を学ばれ、またその最先端の研究に携わってこられました。

大阪大学が昨年公表した「グラウンドプラン」にも、大阪大学の研究の三つの精神として「基本」と「ときめき」と「責任」を掲げています。英語でいえば“basic”“exciting”“responsible”です。

「基本」ということで、みなさんは科学的精神と合理的な推論の大切さを学ばれたはずです。これはこれからどのような職業に就かれても、その思考と行動においてきっと活きてくるはずです。「ときめき」ということで、みなさんは宇宙を、あるいは社会を動かしている未知の仕組みを発見してゆく学問の緊張感とわくわくするような愉しみをたっぷりと体験なさったことでしょう。さらに「責任」ということでは、環境破壊や経済不況、医療や介護や教育といった現場の疲弊など、昨今の日本社会、地球社会が直面している諸問題の解決に学術がどのような役割を果たしうるかを問うて、社会から委託された科学研究の重さに身を震わせた方々も少なくないはずです。

さて、こうした基礎研究の一端にふれるなかで、あるいは研ぎ澄まされた研究に参与するなかで身をもって学んだこと、それをこれからみなさんはどのように活かしてゆこうと考えておられるでしょうか。

一般に、専門を究めるというのは、研究であれ業務であれ、より細かく精緻な領域に入ってゆくということです。みなさんも大学に入るときに学部を選び、大学に入れば専攻を選び、さらに専門の研究課題を選ぶというふうに、関心の対象をより狭めていったはずです。そうするなかで、そのごく限られた研究領域のなかで、世界の先端の研究水準というものを知り、それに合流し、さらにそれを凌駕することに向学心を燃え上がらせたはずです。その筋のプロになろうとして。

しかしプロフェッショナルであるためには、みずからが専門とする仕事の仕方に磨きをかけるだけでなく、人びとのあいだでそれをきちんとマネージできなくてはなりません。そうでなければ、たんなる知的な好事家の域を出ることはありません。

先ほどわたくしは、科学技術が人類社会にもたらした福祉と安寧について述べましたが、しかしその科学と技術が人びとにいま少なからぬ不安をもたらしつつあることもまたたしかです。環境危機、エネルギーの確保、食の安全性、高度再生医療の行きつく先などをめぐり、人びとの不安はつのりつつあります。その意味で、いまほど、科学と社会の関係、あるいは技術開発のあり方について、改めて基本的なことから考え直さねばならない時代はないとも言えるでしょう。多額の予算を使ってなされる科学研究といまも苦難にあえぐ社会とのつながりをデザインしなおす、その

ことの必要をわたくしたち大学人は痛感しています。それこそが、先ほど申し上げた専門の研究や仕事のマネージメントということなのです。

大阪大学のような研究拠点型大学においては、専門教育をなにより重視しています。いろいろな分野のプロフェッショナルを育てることをまずはめざしています。けれども、プロフェッショナルがその専門性を十分に活かすためには、専門領域の勉強だけではどうしても足りません。なぜなら、一つの専門性は他の専門性とうまく編まれることがないと、現実の世界でみずからの専門性を全うすることができないからです。アイディアを一つの装置として仕上げるためにも、一つの発見を医療の現場で活かすためにも、あるいは一人の画家の仕事を展覧会のかたちでふり返るためにも、技術やアートや法律や経理の専門家とうまく組まなくてはなりません。

さて、別の領域の専門家と同じ一つの問題に共同で取り組むことができるためには、自分の専門的知見について、別の専門家（つまりまったくの素人）に関心をもってもらえるよう、そして正しく理解してもらえるよう、みずからの専門について興味深く説明する能力が必要になります。専門家としていま人びとがしなければならないと考えられることを人びとに告げるときに、人びとにそれをしてみたいという方向へ気を向け替えさせる技術とでも言ったらいいのでしょうか、つまり、「しなければならないこと」を「したいこと」へと変換させる技術です。そのためには、非専門家をはじめとして、異なる文化的素養をもつ人たちの関心をよく理解し、また深く刺激するような対話が可能でなければなりません。そうした術を身につけるためには、日頃から、異分野の人たちと深く交わっている必要があります。将来、医師になろうとしている人、法曹界に進もうとしている人、教職につこうとしている人、研究者や技術開発者になろうとしている人たちが、同じ一つの問題について侃々諤々議論するトレーニングを、日頃よりしている必要があります。

じっさい、一つの包括的な視点からすべて論じきれるような問題は、現実の世界にはめったにありえません。たとえばBSEの問題一つとっても、疫学的な視点はもちろん基礎として重要ですが、他国との外交や貿易摩擦の視点、さらにスケールを大きくとって牧畜文明の人類史的意味についての視点も、問題とその解決を展望するには必要となります。同じことはもちろん、環境問題やIT化社会の問題についてもいえます。とすれば、専門家にはその知識が「知の総体」のなかでどのような位置を占めるか、つまりは、みずからの知を社会のより大きな枠組みのなかにいかにマッピングできるかが問われることになります。自分が何を知っていて何を知らないか、自分に何ができて何ができないか、それを見通せていることが「教養」というものにほかなりません。内輪の符丁でしか語れない人は、そもそも専門家としても失格なのです。

ここでわたしはみなさんに、隙間を大切にしようと申し上げたいと思います。これは科学の研究においても、特定の業務においても、ひじょうに大切なものです。隙間とは、だれにも見えているはずなのに、だれも見ていない、そういう領域のことです。

たとえば、科学研究をしているときには、物質の、あるいは社会の諸現象を規定している見えない構造や原理を捉えようと心を砕きます。けれども、その見えない構造や原理は、多くのばあい、既存の一定の理論の枠組みのなかで未だ知られていないことにすぎない場合が多いものです。一方、偉大な科学的発見というものは、その研究そのものが立脚している枠組みをしばしば根底から揺るがし、それを無効にしてしまいます。ということは、既存の枠組みのなかでは問題としてすら見えにくいこと、枠組みのなかではほとんど価値を認められていない現象に対する感受性のほうが、科学研究においてはより重要だということになります。ノーベル賞受賞者たちの少なからぬ部分の仕事が示しているように、同じ枠のなかでのゲームや競争に埋没していては、ほんとうの科学革命、ほんとうのイノベーションにつながるようなすばらしい研究は生まれないのです。

同じようなことが業務についても言えます。企業に新しい課題が立ち上がったとき、これはうちの部の仕事ではないと押しつけあうようでは、その課題は解決できません。だれの仕事でもないけれどだれかがしなければならない事柄だからこそ、とりあえずわたしがやっておく、とさりげ

なく言える、そんな社員が数多くいる企業は、問題をうやむやにせずに前に進みます。ビジネスについてもそうで、隙間産業という言葉もあるように、ビジネスチャンスは往々にしてこうした既存の産業の隙間から生まれるものでしょう。

こうした大事な隙間を見つけられるかどうかは、日頃より、自分の専門を相対化するような眼をもっているかどうかに懸かっています。いいかえれば、世界を複眼で見ているかどうかにかかっています。だからみなさんには、これからも専門的知見とは異なるもう一つの眼、つまり「教養」の眼を、いつも重ねあわせてものを見るように心がけてもらいたいのです。勉強はいつまでも続きます、続けなければならないのです。

きょうわたしは、これから社会のさまざまな現場でプロフェッショナルになってゆかれるみなさんに、あるいは厳しい要求を向けすぎたかもしれません。

みなさんは一人の個人として、人生においてもこれからさまざまな危機に直面しもするでしょう。何のためにここにいるのか分からなくなったり、そもそも自分のような人間がここにいることに意味があるのかと、人生への深い疑問を抱くようなこともきっと少なからずあることでしょう。

そんなときにほんとうに親身になって応えてくれるのは、まずは、自分の存在を気遣ってくれる友人たちです。そして次に、同じような困難を乗り切ってきた未知の先人たちの言葉であり、メッセージです。

未知の先人たち、それは、たとえば人としてここにあることの意味を極限にまで問いつめてきた思想家たちであり、同じ時代の過酷な運命を憂え、そして一人でもそういう不幸な人の存在を許すまじと社会の運営に骨を砕いてきた企業家たちであり、わたしたちの心をそのもっとも深い部分で慰めてくれる芸術家たちであり、そして市井で無名のまま他の人びとの困窮を気遣い、無言で支え続けた人たちです。そういう未知の人たちの言葉、あるいは作品が、友人たちとともに、将来、あなたの危機を救ってくれるはずです。大学を離れても、そういう叡智にふれつづけることを忘れないでいただきたいと思います。

と同時に、それらの声に支えられるだけでなく、あなたがた自身もこんどは支える側に回ってもらいたいと思います。

オバマ米国大統領は、その就任演説を「新しい責任の時代」という言葉で結びました。　たしかにこれまで、「責任」という言葉には「とらされる」「とらざるをえない」といった受け身の響きがありました。オバマ大統領はその演説のなかで、そうではなくて、むしろ進んで引き受ける「責任」について訴えかけました。日本語ではうかがいにくいのですが、「責任」をあらわす「リスポンシビリティ」という英語には「応じる」「応える」という含意が強くあります。リスポンシビリティとは、直訳すれば「リスポンドする能力」、つまり何かに応える用意があるということです。それはつまり、うめき声ともいえる他者からの呼びかけや訴えかけにきちんと耳を澄まし、その小さな声に“Can I help you?”とすぐに応じることができるということなのです。

そしてそういうリスポンスのこまやかな交換のなかで、ひとは不明になりかけた自分の存在を少しずつ少しずつ取り戻し、ひどい落ち込みから立ち直ってゆくことができるようになります。苦しいときに自分を支えるのは、他者からの救いの手や慰めの言葉である以上に、じつは、他者の小さな声に“Can I help you?”とすぐに応じることのできる心の構えなのです。そういうリスポンシビリティという意味での「責任」の意識を強くもった社会人に、みなさんにはこれらかなってもらいたいのです。科学研究のなかで培った見えない構造を見るというすべを、こんどは社会のなかで他者の聞こえない声を聴くというすべとしても活かしていってもらいたいと思うのです。

みなさんが周囲の人たちから、「あいつにまかせておけば大丈夫」とか「こんなときあいつがいたらなあ」と言ってもらえる人になられたとき、そのときはじめて、あなたがたを送りだした大阪大学は胸を張ってその存在理由を確認できたことになるでしょう。

最後になりましたが、みなさんお一人お一人がこれからの長い生涯、幸運に恵まれ、悔いのない人生を送られることを祈りつつ、わたくしからの式辞とさせていただきます。

平成２１年度大阪大学入学式総長告辞

まず、本日ここに集われた3427名の学部生、2931名の大学院生のみなさん、入学ならびに進学おめでとうございます。また、ご臨席いただいたご家族のみなさまにも心よりお祝い申し上げます。

みなさんはこれまでずっと勉学に励み、難関を突破して、晴れて今日、この大阪大学に入学されました。そして今、大学ではこれをやりたい、あれもやりたいと、大きく胸を膨らませていらっしゃることでしょう。けれども、そうした「やりたい」ことは大学にいるあいだに変わってしまうかもしれません。いや、どんどん変わっていけばいいのです。これがほんとうに自分がしたいことかどうかは、やってみなければ分からないからです。

この世界を見るわたしたちの視野というのはけっして広くありません。いつもここから、自分の立っている場所からしか、見られないという限界がまずあります。次に、自分が習ってきた知識や習慣の枠のなかでしか見られないという限界があります。加えてさらに、自分がなじんでいる言語のなかでしか考えられないという限界もあります。こういう世界は、リアルと言うにはまだまだ小さいものです。世界を的確に掴むには、そしてそこからさらに大きな夢を見るためには、だから、この小さな世界をもっと大きく広げていかなくてはなりません。

学問というのはそのためにあります。世界についての視野を広げていくのです。視野を広げるというのは、すでに知っている知識を量的に拡大するということではありません。そうではなくて、これまでそんなものがあることさえ知らなかった「ものの見方、問い方、考え方」にふれるということなのです。

そのために、まず、「分からないものの大切さ」ということについてお話ししたいと思います。

わたしたちにとってなによりも重要なことは、自分以外の人びととどのように関係しながら生きるかということです。自分以外の人びととは、生まれたときから頼りあって暮らしている身近な人はもちろん、まだ会ったこともない地球上のさまざまな人びとでもあります。

そうした人びととのかかわりの平面はしかし、わたしたちにとってごく限られています。地球上で起こっているさまざまな出来事について、わたしたちは多くの場合、新聞やテレビの報道で知ります。まるで観客のようにしてそれにふれます。その人たちの運命と自分のそれとはあまりに遠く隔たっていて、それらが自分の毎日の生活とどうつながっているのかは、相当な知識と想像力がなければ理解できません。他方、毎日の生活のなかで絶対なおざりにできないのは、同僚や友だち、あるいは家族との関係です。ここでは相手の一言一言に深く傷ついたり、落ち込んだり、逆につよく励まされたりしています。

ここから抜け落ちているのは、よく〈中間世界〉と呼ばれているものです。自治体の市民としての生活、地域住民としての生活です。いいかえると、ふだんの生活の具体的な文脈となっている世界であり、ともに社会を動かす主体でありながらたがいに未知であるような人たちとのかかわりです。それこそ政治や経済が具体的に働きだしている世界です。

ところがそのような世界の仕組みは、さまざまの要因が複雑に絡まっていて、容易に見通せるものではありません、むしろわたしたちの現実は分からないものばかりで編まれていると言ってもいいほどです。

少し具体的にお話ししましょう。

たとえば政治、それは外交をとっても国内行政をとっても、不確定な要素に満ちています。政治は、状況が刻々と変わるなかで、きちんとした見通しもつかないましかも即刻なんらかの決定をしなければならない、そんな判断が求められる世界です。すぐにも実行しなければならない施策が二つA、Bとあっても、Aを先にやるかBを先にやるかによって、ABそれぞれの施策の意味も実効性も大きく変わってしまいます。そんな不確定な状況のなかで間を置かずもろもろの決定をしなければならないのが、政治的な判断というものです。

次に、場面を変えて、介護や看護といったケアのいとなみについて考えてみましょう。ケアの現場では、ケアを受ける当事者とその家族、さらにはケアに携わるひとや介護スタッフ、医師や施設の管理運営を預かる者というふうに、それぞれの立場で判断はときに微妙に、ときに大きく異なります。そういう対立した思いが錯綜するなかで、いいかえると、だれの思いを通してもだれかに割り切れなさが残るそういう現場のなかで、それでもこの場合に何がいちばんいいケアなのかを考え、ケアの方針を立てねばなりません。ここでは、正解のないところでそれでも一つの解を選び取る、そういう思考が求められます。

さらに場面を変えて、芸術制作の現場を考えてみます。制作者は自分が何を表現したいのか、自分でもよく分かっていません。はじめは、表現しなければならないという衝迫だけがあるだけです。けれどもできあがった作品は、美

術の場合ならここにはこの線、この色、音楽の場合ならここにはこの音、この和音しかありえないといった、必然性が隅々まで行き渡っています。ここでは、曖昧な事を割り切るのではなく、曖昧な感情を曖昧なまま正確に表現することが求められているわけです。

このように不確定なこと、分からないことが充満する世界、正解のない世界のなかで重要なことは、すぐには分からない問題を手持ちの分かっている図式や枠に当てはめて分かった気にならないことです。分かっていることよりも分かっていないことをきちんと知ること、分からないけれどこれは大事ということを知ることが重要なのです。そしてそのうえで、分からないものに分からないまま的確に対応する術を磨いてゆかなければなりません。

じつは、みなさんが入ってこられた大学というところも、そのためにあります。大学では、これまで知りたいと思ってきたことを知るだけでなく、そんな問いが存在することを夢にだに思わなかった問いにふれること、これまでそんなものがあることさえ知らなかった「ものの見方、問い方、考え方」にふれることが何よりも大事なのです。

大学にはみなさんがおそらくはまだ知らないさまざまな知識が膨大に蓄積されています。宇宙についての、自然についての、社会や文化、そしてそれらの歴史についての知識です。その大学で、過去の思想ともう一度対話しなおしたり、自分とは異質な他者のものの見方、感じ方に学んだりしながら、自分の世界を広げてゆくこと、そしてこれまで当たり前のように見てきた世界をもっと別な視点から捉えなおすことで、世界を広げてゆくことが大学での勉学ではもっとも重要なことなのです。

そのために何をおいても鍛えておく必要があるのが、イマジネーション、つまり想像力というものです。イマジネーションというのは、ここにないもの、自分がよく知らないもの、これまで考えも及ばなかったものを想像する力のことです。

想像力というと、よく論理的な思考力と対比されます。感性的か、それとも知性的か、というふうにです。けれどもそのいずれも、いまここにはないもの、不在のものへと向かう心の動きとしてはひとしいものです。想像はファンタジー、つまり空想や夢想とおなじではありません。眼の前にあるものを手がかりとして、眼の前に現れていない出来事や過程を想像すること、あるいはそれを論理的に突きつめてゆくこと、そういう不在のものへの心のたなびきこそが、ここでいう想像力のはたらきなのです。その意味では、科学にも政治にも、あるいは芸術や（他人への）思いやりにも、いきいきとした想像の力が不可欠だと言えます。が、いまの大学での研究を見ていると、そういう心のたなびきがだんだん短くなってきているような気がしてなりません。

科学研究をしているときに、たしかにまだ見えていないものに心をくだきます。けれども、その見えていないことは、多くのばあい、特定の理論の枠組みのなかで未知のことにすぎないことが多いものです。たしかに未開拓の問題領域には敏感ですが、しかしその未知のことがらは、そういう理論の枠組みゆえに、あるいは枠組みのなかで、未知であるにすぎません。偉大な科学的発見というものは、その研究が立脚している枠組みというものをしばしば根底から揺るがし、それを無効にしてしまいます。ということは、既存の枠組みのなかでは問題としてすら見えにくいこと、枠組みのなかであまり価値を認められていない現象に対する感受性のほうが、科学研究においてはむしろ大切だということになります。同じ枠のなかでのゲームや競争に埋没していては、ほんとうの科学革命につながるようなすばらしい研究は生まれないのです。

大学においてそのような学問研究に携わることは、じつは、一市民として他の苦しんでいる人びとを思いやるということと別ではありません。自然や社会の出来事を、そうした出来事を引き起こしている見えない構造のほうから突きとめようという科学の姿勢と、自分では体験しようのない他人の心の内を思いやろうとする対人関係の態度とは、視点をいったん自分のここという場所から外して、出来事の側に、あるいは他人の側に置くという意味では、じつは同じ性質のものなのです。ほんとうの科学は思いやりのあるものであるはずだ、というのが私の信念です。そしてみなさんにはこのような科学の精神をこそ、大阪大学で身につけてもらいたい、そうして「社会からの厚い信頼」を寄せられる社会人・研究者となってこの大学を巣立って行っていただきたい……。私は心からそう願っています。

最後に、これから大阪という地で学ばれるみなさんに、この大阪大学という学問・研究の場の、他にはない特質についてかんたんにお話ししておきます。

大阪大学は、全国に87ある国立大学法人の一つですが、他の国立大学法人にはない一つの特徴があります。それは、藩校ではなく民間の学問所・私塾を源流としていることです。

大阪大学は、1931年、大阪府下の国立、府立のいくつかの研究・教育機関をネットワークで結ぶというかたちで設立されました。大阪医学校（のちの大阪医科大学）と新

設の理学部とでまず大阪帝国大学として発足し、翌年、大阪工業学校（のちの大阪工業大学）が合流し、さらに戦後、大阪高等学校、浪速高等学校、大阪薬学専門学校などが合流して、新制大阪大学となりました。一昨年は大阪外国語大学とも統合しました。ご存じのように、大阪大学が産業界や一般社会との連携に熱心なのも、大阪大学がそもそもそういうネットワーク型の大学として生成してきた歴史をもつからです。

その大阪大学の原点として位置づけられるのは、天保9年、1838年に開設された適塾です。緒方洪庵が開いたこの私塾からは、幕末から明治維新にかけてこの国を引っぱっていった大村益次郎、橋本左内、福沢諭吉らが輩出されました。ここでの医学研究は突出したレベルのもので、25年間で三千人の書生が全国から集まり、「江戸は教えにいくところ、学びに行くところではない」という気概に溢れていました。じっさい、洪庵は、江戸幕府奥医師および西洋学問所頭取となりますが、それが基となって明治に東京大学医学部の前身である東京医学校が設立されました。また、福沢諭吉が江戸に開いた洋学塾がいまの慶應義塾医学部へと連なっています。そしてこの適塾を基礎としてこの大阪に設立されたのが、大阪大学医学部の前身、大阪医学校なのです。歴史的にいえば、適塾はこれら三つの医学部のルーツとして位置づけられるものなのです。

大阪大学にはもう一つ、その精神的源流とされる学問所があります。それは適塾から遡ること114年、享保9年、1724年に開設された懐徳堂です。これはいまでいう「市民大学」の先駆とでもいうべきもので、中井竹山・履軒、富永仲基、山片蟠桃ら優れた町人学者を輩出しました。懐徳堂は大阪商人たちが拠出した基金によって運営され、町人が貴賤貧富の区別なく、みずから深い学識と徳とを身につけようと、中国の古典や当時の先端科学を学びました。

懐徳堂が開設された享保年間は、近松門左衛門の人形浄瑠璃、井原西鶴やのちの上田秋成の文藝など、市民文化が華やかな時代でもありました。とくに近松のそれは、たんなるエンタテイメントではなく、人間の死や業といった悲劇性を深く描いた重厚なものでした。

この背景には、大坂の地が幕府が直轄する「天領」であったこと、つまり大名がおらず大坂城代をはじめとするたった千人ばかりの幕府役人が管理し、まちの運営は、都市計画・土木工事から経済運営まで、町人から選ばれた総年寄が仕切ったということです。ここ大坂の地では、明治維新にはるか先立って、「市民社会」の構築に取り組まれていたということです。じっさい、学術・文化も「民」が支えました。

この伝統は、明治に入っても引き継がれ、演劇文化はあいかわらず華やかでしたし、朝日や毎日といったジャーナリズムも、さまざまの先進的な産業や金融機関もここで生まれました。大阪帝国大学や大阪外国語学校も、用地や運営資金の一部を民間からの寄付によるなど、民間の大きな

支援があってはじめて創立しえました。大阪市のシンボルである中之島の中央公会堂や図書館の建設も、さらには大阪城天守閣の再建も、民間の寄附でなされました。

リベラル、つまり「自由」とふつう訳されている言葉がありますが、辞書をご覧になったら分かるように、リベラルの第一の意味はじつは「気前のよさ」にあります。たっぷりと豊富にある、他者に寛大であるという意味に続いて、ようやく四番目に「自由主義の」という意味が出てきます。リベラルの名詞には二つの語があります。リバティとリベラリティです。そしてこの後者、つまりリベラリティこそ「気前のよさ」ということなのです。その意味で、大阪はよくいわれるように身分を問わず自由な文化を享受したという点できわめてリベラルな都市であったと同時に、市民が市民生活においてほんとうに大事なことには金惜しみせず寄附するという意味でのリベラリティの空気をずっと育んできたわけです。そういう輝かしい市民文化の歴史を、みなさんには大阪大学在学中にぜひ学んでほしいと思います。

節約できるところは節約し、大事なところには惜しまず金を出す、そういう合理性にもとづいた市民文化の気概がこのところ浅くなってしまい、大阪人は「けち」であるという風評のほうが強くなっているのは、悲しいことです。大阪がいまいちど、自分たちのまちは自分たちで支えるという、libertyとliberalityの精神を取り戻すために、大阪大学がしなければならないことは山ほどあります。それを世界最高水準の学術研究をつうじて果たすのが、いまの大阪大学の使命であるといえます。

みなさんがこれから何度も耳にされることになるはずの大阪大学のモットー「地域に生き世界に伸びる」は、そのような意味で謳われています。この言葉をどうか胸深くで受けとめてください。

大阪大学に入学されたみなさんは、お客さんではなく、ともにこのモットーを実行してゆく仲間です。そういう思いで、みなさんに心から「ウェルカム」という言葉を贈ります。

血管造影・IVRから被曝防護まで

大学院医学系研究科教授　中　村　仁　信

血管造影が好きで、血管造影の専門家になりたいと思い、放射線科医になった。「左肝動脈から分岐する副左胃動脈」を血管造影上で初めて同定し、診断的意義を確立した。血管造影用ロングシースの開発やバルーンカテーテルによる血流変更技術で血管造影を容易にし、血管内治療の成功率を高めた。血管内治療、即ちインターベンショナル・ラジオロジー（IVR）へと時代が移ると、肝動脈塞栓療法による肝細胞癌の治療に取り組み、効果改善のためにリピオドールを併用したが、動脈内注入したリピオドールが門脈内に流入することを初めて報告し、その応用として区域性動脈門脈同時塞栓化学療法（セメント療法）を開発した。その後、IVR における被曝が問題となったため、国際放射線防護委員会（ICRP）委員として ICRP 勧告「IVR における放射線傷害の回避」の作成、IVR における患者と術者の被曝の調査研究を行った。一方、放射線はわずかでも危険という考えに疑問を持ち、微量放射線の慢性的被曝はむしろ人体に有益な効果（放射線ホルミシス）があると考えている。好きな血管造影から始まって、その延長で仕事ができ、放射線医療に貢献できたのは望外の幸せである。

なかむら・ひろのぶ　**プロフィール**

略歴：昭和 46 年大阪大学医学部卒業、同 53 年大阪大学医学部助手、同 56 年大阪大学微生物病研究所講師、平成 2 年大阪大学医学部講師、同 4 年同助教授を経て、同 7 年同放射線医学講座教授（同附属病院放射線科長、放射線部長を併任）に昇任。同 13 年大阪大学附属図書館生命科学分館長、同 15 年大阪大学ラジオアイソトープ総合センター長、同 16 年大阪大学附属図書館長を併任。学会では、日本医学放射線学会理事（第 66 回会長）、日本 IVR 学会理事（第 34 回総会、第 9 回国際 IVR シンポジウム会長）、日本医学会幹事（第 27 回総会学術展示委員長）、第 20 回国際コンピュータ支援放射線医学・外科学会（CARS2006）会長、肝動脈塞栓療法研究会代表幹事などを務めた。ICRP 委員としての活動、医療被曝の実態調査研究により平成 19 年度財団法人放射線影響協会放射線影響研究功績賞を受賞した。

光を支えにデバイスから生体へ ― 阪大における36年の歩み ―

大学院医学系研究科教授　春　名　正　光

昭和 48 年に工学部電子工学科・助手として奉職して以来、36 年間阪大でお世話になりました。21 年間過ごした工学部では、主に誘電体光導波路を用いた光集積回路（光 IC）デバイスの研究に従事し、平成 6 年教授として医学部保健学科に転身して以降は、光コヒーレンストモグラフィ（OCT）を中心とする生体医用光学の研究に専念しました。平成 2 年前後、光 IC デバイスの研究がようやく世界のトップレベルの仲間入りをし、研究が成熟しつつある頃に医学部へ移ることになり、一から研究の再スタートを切りました。このときに、先端的な光エレクトロニクス技術をベースとする OCT の開発研究に執着したのが幸運でした。保健学科へ移ってすぐに「医工融合」の新たな潮流が追い風となって OCT の研究も注目を集め、大いに進展しました。保健学科は医工融合の拠点の一つと目され、医学部に移って 15 年の間、毎年、文科省科研費・基盤 B と萌芽が交互に採択されました。現在はダイナミック OCT を用いて生体表皮下の生理機能を解明しており、この研究もようやく国際レベルに達した感があります。

最終講義では、36 年にわたる阪大での研究を縦軸に、院生・学生の皆さんとの苦労話を織り交ぜて楽しく講演をさせていただきました。この間、時代の要求に見合った光 IC と OCT なる研究テーマにめぐり会い、健康と適度の研究費に支えられ、常にフレッシュな大学院生や学生と向き合って研究を継続することができ、誠に幸運であったと思っております。

私にとって工学部から保健学科への転身は結果的に成功でした。あとに続く若い先生方には、大学から与えられた研究の場で、ご自分の責任で研究環境（テーマ、学生との共同研究、論文発表、研究費獲得等）を整え、意図する研究を思う存分展開していただくことを期待しております。

はるな・まさみつ　**プロフィール**

略歴：昭和 43 年大阪大学工学部電子工学科卒業、昭和 48 年同大学大学院博士課程単位修得退学（昭和 49 年工学博士）、同年大阪大学助手（工学部電子工学科）、昭和 63 年同助教授、平成 6 年大阪大学教授（医学部保健学科医用工学講座）。専門は、光 IC デバイスを中心とする光エレクトロニクス、OCT を中心とする生体医用光学および光医療。日本光学会・生体医用光学研究グループ代表世話人、日本生体医工学会・関西支部理事、電子情報通信学会フェロー、光ファイバセンサ国際会議（OFS）国際運営委員、Int l Conf. Optics Within Life Science（OWLS）の President など。

原子力工学と共に

大学院工学研究科教授　竹　田　敏　一

高校生の頃から物理に興味を持ち、その当時、大阪大学に原子力工学専攻が新しくでき、物理を原子炉に生かせる原子炉物理学の講座に入った。

原子炉物理とは、原子炉を設計・運転するための基礎学問であり、臨界、出力分布等の原子炉内の挙動を理解するためには必須の学問である。基盤学問ながら、つぶしがきかないので大阪大学での31年間、原子炉物理を一貫して研究してきた。

原子炉物理の新しい分野として、「ミクロ炉物理」を新たに提案した。このミクロ炉物理は燃料棒内の実効断面積、温度、核種数密度の空間分布を考慮して、炉心全体の核特性を理論・実験の両面から把握しようとする研究である。この「ミクロ炉物理」をミニ集合体の過渡特性に応用した。また、次世代軽水炉システムは、従来考慮していた大幅な設計余裕を縮小し、炉の経済性向上を図る必要があり、そのために設計計算において燃料棒単位の出力分布を3次元輸送計算に基づき評価するベストエスティメイト解析法の使用が望まれる手法を導出した。

高速炉の炉物理研究としては、燃料集合体の実効断面積計算法、詳細輸送計算法、感度解析法、燃焼感度解析法、断面積調整法の開発等を行った。これらの新しい手法により計算コードを作成し、現在、日本及び世界で高速炉解析に用いられている。

大阪大学大学院工学研究科内で原子力研究の基盤である原子炉物理のリーダーが育ってくれるよう期待する。

たけだ・としかず　　**プロフィール**

略歴：昭和43年大阪大学工学部原子力工学科卒業、昭和48年同大学大学院工学研究科修了、工学博士の学位を取得。日立製作所に入所、昭和53年大阪大学の助教授となる。平成6年11月同教授に昇任し、現在、工学研究科環境・エネルギー工学専攻所属。学内においては、ラジオアイソトープ総合センター運営委員会委員、人権等問題委員会委員、原子力研究・安全委員会委員、入試委員会委員　前期日程試験科目別連絡委員会委員、ラジオアイソトープ総合センター運営委員会委員を歴任。学外においては日本原子力学会理事、企画委員長、炉物理部会長、関西支部長、計算科学技術部会長、また、日本学術会議エネルギー・資源工学研究連絡委員会委員、原子力工学研究連絡委員会委員、内閣府原子力安全委員会原子炉安全専門審査会審査委員、文科省科学技術政策研究所専門調査員などを務めた。平成20年12月に内閣府原子力安全委員会30周年記念感謝状授与。平成21年3月退職。

気液混相流動の骨組み

大学院基礎工学研究科教授　上　山　惟　一

大学紛争のために卒業が2ヶ月遅れになった学部学生時代、修士課程、博士課程での学生生活、また当時の教授の先生方との交流について、厳しさとほのぼのとする暖かさの混在したお話しで最終講義が始まった。気泡塔の混相流動に関する研究で工学博士号を取得された後、気液界面の安定性、エマルションの解乳化、気泡塔流動状態遷移、火炎による超微粒子気相合成、と次々に新しいテーマに挑戦され、1991年4月に本学着任以来、ご自分と専門領域が異なるスタッフを迎えてゼオライト膜合成の研究に着手、成功されて後、メソポーラスシリカ膜・粒子合成、炭素膜・粒子合成へとナノ構造機能性材料の開発・評価の研究で世界をリードしてこられたこと、さらに地球環境問題の有力な対応策として乾燥地緑化にも取り組まれ、この分野での先駆的・啓蒙的研究成果を発表しつつあることなど、過去から現在に至るご研究の概要をお話し頂いた。

次に、現在進行中の研究として、博士論文の一部として導出された気液混相流動に対して時間平均された Navier-Stokes 式を用いて、本年2月に完成されたご研究の内容（気泡と液との相互作用により生じた乱れが混相流動の大局的性質に与える影響を一般的に与える基礎式の導出と、それを高ガス流速で操作される気泡塔に適用するとガスホールドアップが塔中心で中高となる放物線分布となることを示した。）を熱く講義された。このガスホールドアップ分布の支配機構は現象が既知となって以来、約40年に渡って未解決であり、本年6月の国際学会で口頭発表されるとのことであった。

最後に、「∞　0」という人間方程式について、前向きの気持ちが無限大の差をほとんど差が無いに等しくし、前向きの気持ちが無ければほとんど差が無くても無限の差があるに等しい、というお話を、ご自身の経験を基に語られ、他の誰のものでもなく自分自身のものであるこの世界を、前向きの心を持って存分に生きて頂きたい、と講義を締めくくられた。

（文責：西山憲和）

うえやま・これかず　　**プロフィール**

略歴：昭和44年東京大学工学部化学工学科卒業、同修士課程、博士課程を修了、工学博士、昭和50年2月より東京大学助手工学部（化学工学担当）、同講師、助教授を経て昭和63年4月より東洋大学助教授工学部化学応用科学科、同教授を経て平成3年4月から大阪大学助教授基礎工学部化学工学科、平成6年4月から同教授、改組により基礎工学研究科物質創成専攻化学工学領域教授、学内では環境安全委員会豊中地区小委員会委員長、基礎工学部環境安全委員会委員長ほか、入試専門委員、財務委員等を歴任、学外では化学工学会誌編集委員会副委員長、気泡塔研究会代表、粒子・流体プロセス部会長、化学工学会理事、化学工学会部会CT長、石油学会誌編集委員、エネルギー・資源学会誌編集実行委員等を歴任した。

酸化物エレクトロニクス発展の一翼を担って

大学院基礎工学研究科教授　奥　山　雅　則

現在の高度情報化社会は、この40～50年のエレクトロニクスの凄まじい発展なくしては語られない。これはシリコン集積回路の飛躍的高性能化、高集積化によるもので、その基幹素子のトランジスタはシリコンと絶縁体酸化膜との絶妙な接合から実現できたものであり、酸化膜の更なる極薄化によってシリコンとの優れた接合が実現でき次世代素子のための展望を開くことができた。さらに、複合金属酸化物としてのペロブスカイト型酸化物強誘電体を薄膜化することによって、分極履歴、大誘電率、焦電性、圧電性、電気光学効果、マルチフェロイック性など興味ある性質を引き出し、その機能性デバイスへの応用につなげることができた。応用では、強誘電体薄膜ゲート不揮発性メモリ、赤外線センサ、超音波センサ、波長微分センサ、触覚センサ等を開発し、それらのイメージングによる高度認識センシングへと次々と発展させることができた。このように非常に魅力的な酸化物エレクトロニクス分野の飛躍的発展の一翼を40数年にわたり担えたことは非常に幸せであった。この分野において、若い優秀な研究者が多数育ってきていることはうれしいことであり、彼らによる更なる飛躍を期待している。

おくやま・まさのり　プロフィール

略歴：昭和43年大阪大学基礎工学部卒業、48年大学院基礎工学研究科博士課程修了、工学博士。日本学術振興会奨励研究員、大阪大学基礎工学部助手、助教授を経て平成3年教授（平成9年から大学院基礎工学研究科教授）。この間52年より1年間米国カーネギーメロン大学客員研究員、平成4年華中理工大学顧問教授、17年上海大学兼職教授。学内では先端科学技術共同研究センター運営委員会委員、基礎工学研究科内で副研究科長、産学連携室長、学外では応用物理学会理事・評議員、電気学会理事・E部門長、センシング技術応用研究会長、次世代センサ協議会理事、Sensors & Atuators A Editor for Japan、Integrated Ferroelectrics や JJAP の Editorial Board 歴任。Pioneer Contribution to Integrated Ferroelectrics 賞、大阪府知事表彰、応用物理学会論文賞、応用物理学会 JJAP 編集貢献賞を受賞。

メンブレン・ストレスバイオテクノロジー

大学院基礎工学研究科教授　久保井　亮　一

本年3月6日、基礎工学部国際棟において、久保井先生の最終講義が行われた。異相界面における秩序創成をテーマに、気液、液液、気固界面での分散・合一現象に挑まれ、近年は、液液系の一つである水性二相系を発展させ、生体膜界面における秩序（機能）創成へと展開されてきた。現在、脚光を浴びている膜関連疾病の疾病機序やその原因とされるアミロイド性タンパク質の生理学的意義の解明についても、久保井先生は生体膜界面現象と捉え、生体膜界面におけるアミロイド形成現象の解明を進めてきた。その過程で、LIPOzyme 材料や Membrane Chip を開発し、新領域「メンブレン・ストレスバイオテクノロジー」を開拓した。

これまでの研究成果の概略を述べる中で、とりわけ国際交流などの人的ネットワーク形成の重要性を語られた。人と人とのつながりが新たな学問を生み出し、オンリーワンの研究に熟してゆく。それが師弟関係を礎にしたスクール（伝統）であり、基礎工学部の初代学部長である正田健次郎先生の学部創設趣旨「科学と技術の融合による科学技術の根本的な開発　それにより人類の真の分化を創造する学部」に繋がるのである。化学工学という学問が熟した今、基礎工学部から新しい化学工学を生み出し、基礎工学部生が大阪大学や化学工学の次代を引っ張っていかないといけないと熱弁を奮われた。最後に、故山村雄一元総長の言葉である「夢見て、行い、考えて、祈る」を引用し、「阪大生は元気が一番。自ら考えて行動してほしい。学生たちが主役である。」と後進にエールを送った。

くぼい・りょういち　プロフィール

略歴：昭和49年1月大阪大学大学院基礎工学研究科化学系専攻博士課程修了、工学博士。同年2月大阪大学基礎工学部助手、平成2年6月同助教授を経て、平成8年4月同教授に昇任し、平成15年より基礎工学研究科物質創成専攻所属。この間、英国 Birmingham 大学 (Arvin Nienow 教授) に留学。学内においては、留学生センター兼任教授、太陽エネルギー化学研究センター兼任教授及び同運営委員会委員、グローバルコラボレーションセンター兼任教授、大阪大学同窓会連合会幹事、適塾管理運営委員会委員、留学生委員会委員、国際交流委員会委員、学術交流協定 WG 座長、日本語・日本文化研修プログラム WG 座長を歴任。基礎工学研究科内においては、国際交流委員会委員長、留学生相談室長などを歴任。学協会においては、日本溶媒抽出学会会長、分離技術会副会長を歴任した。

放射光の輝きとともに歩んだ33年間

大学院基礎工学研究科教授　菅　　滋　正

数学と物理学に魅せられて大学に。大学院では光物性とくに半導体の励起子、励起子分子さらにポラリトンの研究で世界のフロンティアを堪能。試料も計測装置も自ら作るもの、実験は自分の判断で進めるもの、理論も自分で学ぶものとの体験を積み上げて、応用物理学の分野で博士（工学）取得後すぐにドイツマックスプランク固体研究所に着任。3年後、放射光に挑戦するべく帰国。

加速器から分光実験装置開発さらに実験、理論解析と広汎に取り組み、内殻励起子や終状態相互作用の研究さらに電子のスピン分析などに取り組んだ。研究室のみならず全国共同利用研究施設を任され、放射光分野の発展に尽力。多くの逸材が出た。阪大に来てからはSPring-8に今日まで世界最高性能の軟X線ビームラインと計測系を建設し、強相関系のバルク敏感光電子分光分野を開拓し、光電子分光の分野で我が国を世界のトップに引き上げた。ナノ磁性を探る光電子顕微鏡（PEEM）や極微ナノ磁性を探るスピン偏極走査トンネル顕微分光（スピンSTM）の分野でも我が国のパイオニアとしての成果を上げられたのは、研究は人なりを哲学とするチーム編成と国際交流のおかげであった。33年間の放射光人生で幅広い知的基盤を確立し多くの挑戦を体験できたのは幸運であった。これらの分野の次世代のさらなる発展を期待したい。

すが・しげまさ　**プロフィール**

略歴：昭和43年東京大学工学部物理工学科卒業、昭和48年東京大学大学院工学系研究科物理工学専門課程博士課程修了博士（工学）、昭和48年西ドイツ、マックスプランク固体物理研究所研究員、昭和51年西ドイツ、ドイツ国立電子シンクロトロン研究所客員研究員、昭和51年5月東京大学助教授物性研究所、平成元年12月大阪大学教授基礎工学部、基礎工学研究科、この間平成12年から日本学術会議物理学研究連絡委員会委員、大学評価・学位授与機構大学評価委員会評価委員、日本学術会議連携会員など。学内では電子物理科学科長、物質創成専攻長など歴任。

受賞：平成6年応用物理学会賞論文賞、平成15年ドイツAugen und Ilse Seibold賞、平成17年科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞、平成19年島津賞、平成20年Helmholtz-Humboldt Research Award

金融危機と債権の流動化･証券化

大学院高等司法研究科教授　吉　田　光　碩

サブプライムローン問題に端を発して、世界の金融システムが機能不全を起こしている。講義ではその要因を大きく①サブプライムローン、②複雑な証券化手法と金融工学、③世界的な金余りと資金のアメリカ金融市場への集中、④格付け会社の問題、⑤ヘッジファンドやSIVと高いレバレッジ、⑥米国投資銀行（証券会社）による複雑なCDOの大量生産、⑦直接金融（市場型間接金融）の脆弱さ、⑧金融市場のボーダレス化、⑨新自由主義経済学の行過ぎた規制緩和論にわけ、それぞれについて論じた後、日本におけるアメリカ型金融システムである債権の流動化・証券化の急速な動きと、立法による協力の動き（特定債権法、動産・債権譲渡特例法、電子債権法の立法と、信託法の大改正）をあげ、アメリカの金融システム自体が崩壊した現在、私法も単純に流動化・証券化に協力することに反省が求められること、なによりもヘッジファンドなどが大量の資金をあつめ、それにレバレッジをかけて市場をかき回すことを許すことのないよう、市場を正常化するための強力な国際機関が望まれ、ここに世界中の良心を結集する必要があることを説いた。

よしだ・みつひろ　**プロフィール**

略歴：1945年生まれ。1968年京都大学法学部卒業、株式会社三和銀行入社。1985年株式会社三和総合研究所設立と同時に出向（主任研究員）。1998年近畿大学法学部教授を経て、2003年大阪大学大学院法学研究科教授。2004年同大学院高等司法研究科教授。

研究テーマ：金融法、担保法。所属学会は日本私法学会、金融法学会。

最近の論文：「動産譲渡登記制度の創設とその問題点」阪大法学55巻3・4号、「延長型集合債権譲渡担保の可能性について」判例タイムズ1197号、「延長型集合債権譲渡担保の展開」判例タイムズ1222号、「根企業担保の有用性」判例タイムズ1229号などがある。

細菌性腸管感染症とその周辺

微生物病研究所教授　**本　田　武　司**

感染症の臨床（診断・治療）の現場では抗菌剤の出現でかえって混乱・低迷している現状を体験し、感染症の基盤的な研究を進める必要性を感じて、微生物病研究所の一員に加わったのが昭和48年のことであるので、細菌性腸管感染症の研究を約35年間続けたことになる。主な研究対象は藤野恒三郎先生が発見された腸炎ビブリオ感染症の研究であり、伝統的な課題と取り組んだことになる。

講演では腸炎ビブリオ食中毒の病態研究の流れを述べ、神奈川現象、TDH、TRH、TTSS（Effector）などの病原因子の発見の経緯を述べ、ようやく主要な役者（病原因子注）は全ゲノム解析の結果で出揃ったことを述べた。この研究の流れを、「山の向こうにまた山が見える」「知らぬこと知れば知るほど疑問増え」と表現した。腸炎ビブリオの他に、O157のような病原性大腸菌にも触れ、96年のアウトブレイク時は「にわかタレント化した」ことを述べ笑いを誘った。そして「論文書きが先か、情報の公開を急ぐべきか」がこのようなアウトブレイク時には考えるべきことを述べた。第3の話題として、Providencia alcalifaciensによる集団食中毒を世界で始めて見出し、この菌が下痢原性を有する病原菌である事を証明した。この食中毒材料（検体）は他の機関から持ち込まれたものであり、この持込がなければ発見出来なかったことを考えると、日頃から広い範囲の研究者らとの協力・信頼関係を構築しておくことの重要性を述べた。最後に「少年老い易く、学成り難し」の心境を述べ、多くの参加者からの大きな拍手で閉会となった。

（注）病原因子として耐熱性溶血毒（TDH）、およびその類似溶血毒（TRH）というタンパク質性溶血毒があり、TDHによって起こる溶血性を神奈川現象と呼ぶ。感染初期に働くIII型分泌装置（TTSS）により菌から直接標的細胞に注入される分子をEffector（エフェクター）という。

ほんだ・たけし　**プロフィール**

略歴：昭和45年大阪大学医学部を卒業。3年間内科学の臨床研修、昭和48年大阪大学微生物病研究所助手、昭和59年同助教授、平成3年同教授。研究所では菌株保存施設長、エマージング感染症研究センター長、所長、大阪大学評議員などを歴任。学外にあっては、日本細菌学会や日本感染症学会などの理事、評議員、日米コレラ部会長などを務めた。その他、第20期日本学術会議連携会員。日本細菌学会総会長（第80回）など。文部科学省医学視学委員（高等教育局）、文科部省学術審議会専門委員（学術情報資料分科会、科学研究費分科会）なども兼任。

受賞：日本細菌学会より黒屋奨学賞、浅川賞、日本感染症学会二木賞、小島三郎記念文化賞（黒住医学振興財団）、野口英世記念医学賞（財団法人野口英世記念会）を受賞。

平成20年度国立大学法人大阪大学教育・研究功績賞

大阪大学教育・研究功績賞は、大阪大学に勤務する教員のうち、教育・研究上の功績が特に顕著であると認められた者に対して授与し、これを顕彰することにより、本学における教育・研究の一層の発展を期することを目的として行われています。平成20年度は、以下の方々が受賞されました。

（総務部人事課）

所属名	職名	氏名	該当受賞項目
大学院文学研究科	教授	天野文雄	1
大学院文学研究科	講師	堂山英次郎	1
大学院人間科学研究科	助教	大前玲子	1
大学院法学研究科	教授	三成賢次	10
大学院経済学研究科	教授	堂目卓生	1
大学院理学研究科	教授	大貫惇睦	1
大学院理学研究科	教授	原田明	1
大学院理学研究科	教授	深瀬浩一	3
大学院理学研究科	教授	松田准一	2
大学院理学研究科	助教	中川拓郎	3
大学院医学系研究科	教授	戸田達史	1
大学院歯学研究科	教授	村上伸也	4
歯学部附属病院	講師	野杁由一郎	3
歯学部附属病院	講師	山田聡	1
大学院薬学研究科	助教	向洋平	1･2･3･10
大学院工学研究科	教授	赤松史光	1・3
大学院工学研究科	教授	石黒浩	7
大学院工学研究科	教授	宇山浩	1
大学院工学研究科	教授	生越專介	10
大学院工学研究科	教授	栖原敏明	1
大学院工学研究科	教授	平尾俊一	1
大学院工学研究科	教授	廣瀬明夫	1
大学院工学研究科	教授	森田清三	1・3
大学院工学研究科	教授	矢野猛	1
大学院工学研究科	教授	山中伸介	3
大学院工学研究科	准教授	岸本一蔵	3
大学院工学研究科	准教授	甲谷寿史	1・10
大学院基礎工学研究科	教授	潮俊光	1
大学院基礎工学研究科	教授	奥山雅則	1
大学院基礎工学研究科	教授	菅滋正	1
大学院基礎工学研究科	教授	鈴木義茂	1・3
大学院基礎工学研究科	教授	永妻忠夫	1
大学院言語文化研究科	教授	日野信行	1
大学院国際公共政策研究科	准教授	赤井伸郎	1
大学院情報科学研究科	助教	肥後芳樹	1
大学院情報科学研究科	助教	吉田真紀	4
大学院生命機能研究科	教授	藤田一郎	1・6
大学院高等司法研究科	教授	棟居快行	10
微生物病研究所	准教授	菱田卓	3
産業科学研究所	教授	中嶋英雄	1・4
産業科学研究所	教授	中谷和彦	1
産業科学研究所	准教授	西野邦彦	1･2･3･4
蛋白質研究所	准教授	篠原美紀	3
社会経済研究所	准教授	佐々木勝	1
接合科学研究所	教授	中田一博	1・4
超高圧電子顕微鏡センター	准教授	荒河一渡	4
留学生センター	准教授	大谷晋也	3・4
極限量子科学研究センター	教授	清水克哉	1・3
太陽エネルギー化学研究センター	教授	平井隆之	1・3・4
総合学術博物館	助教	廣川和花	10
大学教育実践センター	助教	百武慶文	4・10
先端科学イノベーションセンター	教授	大森裕	1
臨床医工学融合研究教育センター	特任准教授(常勤)	寒水孝司	1・3
コミュニケーションデザイン・センター	教授	森栗茂一	2
科学教育機器リノベーションセンター	教授	岡田美智雄	1・3・4
世界言語研究センター	教授	高階美行	7
サイバーメディアセンター	教授	菊池誠	1
レーザーエネルギー学研究センター	教授	白神宏之	4
免疫学フロンティア研究センター	教授	荒瀬尚	3
ナノサイエンス・ナノテクノロジー研究推進機構	特任助教(常勤)	市川聡	7

＜受賞項目＞
（1）教育・研究上の業績が認められ、権威のある学術上の表彰を受けた場合。
（2）教育・研究及びその成果が、社会に対し多大な貢献をしたとの評価を得た場合。
（3）専門誌等における掲載論文の評価が高いとされた場合。
（4）学術に関する会議等での発表が高い評価を受けた場合。
（5）職務発明が高い評価を受けた場合。
（6）評価の高い発見をした場合。
（7）教育・研究プロジェクト等においてその貢献が顕著であると評価された場合。
（8）教育・研究に関する事項を審議する委員会等においてその貢献が顕著であると評価された場合。
（9）危険な環境の下で困難な教育・研究業務を遂行した場合。
(10) その他、教育・研究活動の貢献が顕著であると評価された場合。

野首孝祠名誉教授「日本歯科医学会会長賞（研究部門）」受賞

野首孝祠名誉教授（歯学研究科、現先端科学イノベーションセンター特任教授）が、平成20年度日本歯科医学会会長賞を受賞されました。本賞は、日本歯科医学会最高の顕彰であり、歯科医学研究、歯科医学教育、地域歯科医療に顕著な貢献のあった者に授与されます。20年度は、研究部門で野首名誉教授を含む3名、教育部門で2名、地域歯科医療部門で1名が表彰されました。

野首名誉教授は、これまで専門の歯科補綴学をはじめ、高齢者歯科学、顎顔面補綴学の分野でいずれも顕著な研究業績を挙げられ、さらに現在も先端科学イノベーションセンターにおいて咀嚼能力評価法開発のための産官学共同プロジェクトとマルチセンタースタディを推進されるというアクティビティの高さが評価されたものです。

表彰式は、1月23日(金)日本歯科医師会館（東京）にて行われました。

（歯学研究科・歯学部）

田村進一名誉教授に「IEEEフェロー」称号授与

田村進一名誉教授に「IEEEフェロー」の称号が授与されました。

IEEE（The Institute of Electrical and Electronics Engineers, Inc.）は、アメリカに本部を持つ電気電子技術の世界最大の学会であり、IEEEフェローはIEEE会員のうち、関係する分野で特筆すべき業績を挙げたものに与えられる称号です。

田村進一名誉教授の、これまでのパターン認識と画像解析への貢献、とくに基礎理論、産業用認識装置、医学・福祉応用への貢献が認められたものです。

称号授与の記念講演が2月24日(火)京大会館で行われました。

（医学系研究科・医学部）

高橋理明名誉教授「2008年マヒドン王子賞」受賞

平成3年3月に本学微生物病研究所を退官した高橋理明名誉教授が、「2008年マヒドン王子賞」を受賞しました。

同賞は、現国王の父であり“近代医学・公衆衛生の父”と呼ばれているマヒドン王子の生誕100周年を記念して、タイ王国マヒドン王子賞基金が1992年に創設し、公衆衛生分野・医学分野において世界的な功績を残した研究者及び研究所に対して毎年表彰を行っているものです。

今回の受賞は、高橋名誉教授の水痘生ワクチンの開発による世界的な貢献が理由となっております。日本人の受賞は、抗感染症薬の発見による国際貢献が評価されて1997年に受賞した大村智北里大学名誉教授に続いて2人目となります。

授賞式は1月28日(水)にタイ王国チャクリー宮殿で行われ、プミポン・アドゥンヤデート国王陛下から記念のメダルと賞金が授与されました。

(微生物病研究所)

新役員紹介

月　岡　英　人　（つきおか　ひでと）　　理事・副学長

【略歴】

昭53. 4　文部省入省
平 4. 9　文部省初等中等教育局教科書課教科書企画官
6. 7　佐賀県教育委員会教育次長
9. 7　文部省初等中等教育局教科書課長
11. 7　文部省初等中等教育局小学校課長
13. 1　国立教育政策研究所教育課程研究センター長
16. 7　文部科学省生涯学習政策局主任社会教育官
16. 7　文部科学省生涯学習政策局（命）生涯学習総括官
17. 4　独立行政法人大学入試センター理事・副所長
20. 4　国立大学法人大阪大学理事・事務局長
21. 4　国立大学法人大阪大学理事・副学長

新部局長紹介

松　繁　寿　和　（まつしげ　ひさかず）　　大学院国際公共政策研究科長

【略歴】

昭55. 3　大阪大学経済学部経営学科卒業
57. 3　大阪大学大学院経済研究科公共経済専攻博士前期課程修了
63. 9　南山大学経済学部助手、南山大学オーストラリア研究センター専属研究員
平 1. 3　大阪大学大学院経済研究科公共経済専攻博士後期課程単位取得退学
1. 4　南山大学経済学部講師、南山大学オーストラリア研究センター専属研究員
2. 4　オーストラリア国立大学太平洋研究科博士課程修了
5. 4　南山大学オーストラリア研究センター長
6. 4　大阪大学助教授経済学部
6. 6　大阪大学助教授大学院国際公共政策研究科
13. 9　ドイツ マールブルグ大学日本センター客員教授（平14.2まで）
15. 4　大阪大学教授大学院国際公共政策研究科
18. 3　オーストラリア国立大学アジア太平洋経済行政研究科客員研究員（平18.9まで）
20. 4　大阪大学評議員（平21.3まで）
21. 4　大阪大学大学院国際公共政策研究科長（平23.3まで）

遠　山　正　彌　（とおやま　まさや）　　大学院大阪大学・金沢大学・浜松医科大学連合小児発達学研究科長

【略歴】

昭47. 3　大阪大学医学部卒業
47. 4　大阪大学医学部附属高次神経研究施設神経解剖学病理学研究部に於いて研究に従事
47. 5　大阪大学助手医学部附属高次神経研究施設
55. 1　大阪大学助教授医学部附属高次神経研究施設
61. 4　大阪大学教授医学部
平11. 4　大阪大学教授大学院医学系研究科
11. 4　大阪大学大学院医学系研究科附属共同研究実習センター長（平13.3まで）
11.11　大阪大学医学部附属動物実験施設長（平13.10まで）
17. 4　大阪大学大学院医学系研究科長・医学部長（平20.3まで）
18. 4　大阪大学大学院医学系研究科附属子どものこころの分子統御機構研究センター長（平22.3まで）
21. 4　大阪大学大学院大阪大学・金沢大学・浜松医科大学連合小児発達学研究科長（平23.3まで）

新部局長紹介

小　野　善　康　（おの　よしやす）　社会経済研究所長

【略歴】

昭48. 3　東京工業大学工学部社会工学科卒業
50. 3　東京大学大学院経済学研究科修士課程修了
54. 3　東京大学大学院経済学研究科博士課程修了
54. 4　武蔵大学経済学部専任講師
56. 4　武蔵大学経済学部助教授
59.10　大阪大学助教授社会経済研究所
平 2. 9　大阪大学教授社会経済研究所
8. 4　東京工業大学教授工学部
8. 5　東京工業大学教授大学院社会理工学研究科
11. 4　大阪大学教授社会経済研究所
11. 4　大阪大学社会経済研究所長（平13.3まで）
19. 4　大阪大学社会経済研究所副所長（平21.3まで）
21. 4　大阪大学社会経済研究所長（平23.3まで）

中　田　一　博　（なかた　かずひろ）　接合科学研究所長

【略歴】

昭47. 3　大阪大学工学部溶接工学科卒業
49. 3　大阪大学大学院工学研究科（修士課程）溶接工学専攻修了
52. 4　大阪大学大学院工学研究科（博士課程）溶接工学専攻単位取得退学
52. 5　大阪大学助手溶接工学研究所
平 5. 9　工学博士（大阪大学）
6. 4　大阪大学助手溶接工学研究所附属高エネルギー溶射研究センター
6. 5　大阪大学助教授溶接工学研究所附属高エネルギー溶射研究センター
8. 5　大阪大学助教授接合科学研究所附属再帰循環システム研究センター
9. 1　大阪大学助教授接合科学研究所
14.10　大阪大学教授接合科学研究所
21. 4　大阪大学接合科学研究所長（平23.3まで）

野　末　泰　夫　（のずえ　やすお）　低温センター長

【略歴】

昭50. 3　新潟大学理学部物理学科卒業
52. 3　東北大学大学院理学研究科博士課程前期課程（物理学専攻）修了
54. 3　東北大学大学院理学研究科博士課程後期課程（物理学専攻）退学
54. 4　東北大学助手理学部
57. 2　理学博士（東北大学）
平 7. 4　東北大学助手大学院理学研究科
11. 1　東北大学助教授大学院理学研究科
13. 4　大阪大学教授大学院理学研究科
21. 4　大阪大学低温センター長（平23.3まで）

新部局長紹介

谷　口　研　二　（たにぐち　けんじ）　先端科学イノベーションセンター長

【略歴】

昭48. 3　大阪大学大学院工学研究科電子工学専攻修士課程修了
50. 3　大阪大学大学院工学研究科電子工学専攻博士課程退学
50. 4　株式会社東芝総合研究所
59. 1　株式会社東芝超LSI研究所
61. 7　工学博士（大阪大学）
61.10　大阪大学助教授工学部
平 8. 7　大阪大学教授工学部
10. 4　大阪大学教授大学院工学研究科
18. 4　大阪大学教育研究評議員（平22.3まで）
20. 4　大阪大学大学院工学研究科附属高度人材育成センター長（平22.3まで）
21. 4　大阪大学先端科学イノベーションセンター長（平23.3まで）

中　嶋　英　雄　（なかじま　ひでお）　科学教育機器リノベーションセンター長

【略歴】

昭46. 3　東北大学工学部金属材料工学科卒業
48. 3　東北大学大学院工学研究科金属材料工学専攻修士課程修了
52. 9　東北大学大学院工学研究科金属材料工学専攻博士課程修了
52. 9　博士（工学）（東北大学）
52.11　米国レンスレア工科大学博士研究員
55. 7　東北大学助手金属材料研究所
平元. 3　東北大学助教授金属材料研究所
4. 4　岩手大学教授工学部
8.10　大阪大学教授産業科学研究所
21. 4　大阪大学科学教育機器リノベーションセンター長（平23.3まで）

疇　地　　宏　（あぜち　ひろし）　レーザーエネルギー学研究センター長

【略歴】

昭49. 3　岐阜大学工学部電気工学科卒業
51. 3　岐阜大学大学院工学研究科修士課程修了
54. 3　大阪大学大学院工学研究科博士後期課程修了
55. 4　大阪大学助手工学部
平元. 5　大阪大学講師レーザー核融合研究センター
3.12　大阪大学助教授レーザー核融合研究センター
11. 4　大阪大学教授レーザー核融合研究センター
16. 4　大阪大学教授レーザーエネルギー学研究センター
17. 4　大阪大学レーザーエネルギー学研究センター副センター長
21. 4　大阪大学レーザーエネルギー学研究センター長（平23.3まで）

新施設長紹介

仲　野　　徹　（なかの　とおる）　附属図書館生命科学分館長

【略歴】
昭56. 3　大阪大学医学部医学科卒業
56. 4　大阪大学医学部附属病院第三内科（研究・診療の補助に従事）
56. 7　大阪大学医学部附属病院医員（研修医）
57. 7　大阪大学微生物病研究所附属病院医員（研修医）
58. 1　堺市技術職員（市立堺病院診療局内科部勤務）
59. 7　大阪大学助手医学部附属癌研究施設
62. 5　大阪大学助手医学部附属バイオメディカル教育研究センター
63. 1　医学博士の学位授与（大阪大学）
平元. 1　ヨーロッパ分子生物学研究所訪問研究員
2.11　京都大学助手医学部
3. 3　京都大学講師医学部
7. 4　京都大学講師大学院医学研究科
7. 7　大阪大学教授微生物病研究所
10. 4　大阪大学微生物病研究所発癌抑制遺伝子検索細胞センター長（平12.3まで）
16. 4　大阪大学教授大学院生命機能研究科
21. 4　大阪大学附属図書館生命科学分館長（平23.3まで）

稲　葉　　章　（いなば　あきら）　大学院理学研究科附属構造熱科学研究センター長

【略歴】
昭46. 3　大阪大学理学部化学科卒業
48. 3　大阪大学大学院理学研究科無機及び物理化学専攻修士課程修了
51. 3　大阪大学大学院理学研究科無機及び物理化学専攻博士課程単位取得退学
51. 4　通商産業省工業技術院計量研究所研究員
51. 6　理学博士（大阪大学）
55. 7　大阪大学助手理学部
59. 3　カナダマクマスタ大学客員研究員（昭60.12まで）
63. 5　大阪大学講師理学部
平 7. 5　大阪大学助教授理学部
8. 4　大阪大学助教授大学院理学研究科
15. 7　大阪大学教授大学院理学研究科附属分子熱力学研究センター
16. 4　大阪大学大学院理学研究科附属分子熱力学研究センター長（平21.3まで）
21. 4　大阪大学教授大学院理学研究科附属構造熱科学研究センター
21. 4　大阪大学大学院理学研究科附属構造熱科学研究センター長（平23.3まで）

金　田　安　史　（かねだ　やすふみ）　大学院医学系研究科附属共同研究実習センター長

【略歴】
昭55. 3　大阪大学医学部医学科卒業
59. 3　大阪大学大学院医学研究科博士課程 修了
59. 3　医学博士（大阪大学）
59. 4　大阪大学細胞工学センター研究生
59.11　大阪大学助手細胞工学センター
平 4. 8　大阪大学助教授細胞生体工学センター
10. 7　大阪大学教授医学部
11. 4　大阪大学教授大学院医学系研究科
16. 4　大阪大学医学部附属動物実験施設長（平20.3まで）
21. 4　大阪大学大学院医学系研究科附属共同研究実習センター長（平23.3まで）

新施設長紹介

早　川　和　生　（はやかわ　かずお）

大学院医学系研究科附属ツインリサーチセンター長

【略歴】

昭49. 3　千葉大学教育学部卒業
50. 5　財団法人復光会総武病院看護士
55. 5　ハワイ大学大学院看護学研究科修了
55. 6　近畿大学助手医学部
63. 9　医学博士（近畿大学）
平 6. 3　近畿大学講師医学部
6. 4　大阪大学教授医学部
15. 4　大阪大学教授大学院医学系研究科
21. 4　大阪大学大学院医学系研究科附属ツインリサーチセンター長（平22.3まで）

新　田　保　次　（にった　やすつぐ）

大学院工学研究科附属サステイナビリティ・デザイン・オンサイト研究センター長

【略歴】

昭48. 3　大阪大学工学部土木工学科卒業
50. 3　大阪大学大学院工学研究科土木工学専攻修士課程修了
50. 4　大阪大学助手工学部
61. 2　工学博士（大阪大学）
61. 4　大阪大学講師工学部
平元. 3　大阪大学助教授工学部
10. 4　大阪大学助教授大学院工学研究科
14.12　大阪大学教授大学院工学研究科
21. 4　大阪大学大学院工学研究科附属サステイナビリティ・デザイン・オンサイト研究センター長（平23.3まで）

安　永　照　雄　（やすなが　てるお）

微生物病研究所附属遺伝情報実験センター長

【略歴】

昭51. 3　九州大学大学院理学研究科生物学専攻修士課程修了
56. 9　理化学研究所電子計算機室勤務技師補
57. 2　九州大学大学院理学研究科生物学専攻博士後期課程修了
57. 2　理学博士（九州大学）
58. 6　理化学研究所電子計算機室勤務技師
62.12　理化学研究所電子計算機室勤務研究員
平 4. 3　理化学研究所電子計算機室勤務先任研究員
5. 1　大阪大学助教授遺伝情報実験施設
10. 6　大阪大学教授遺伝情報実験施設
17. 4　大阪大学教授微生物病研究所附属遺伝情報実験センター
21. 4　大阪大学微生物病研究所附属遺伝情報実験センター長（平成23.3まで）

新施設長紹介

安　蘇　芳　雄　（あそ　よしお）　産業科学研究所附属産業科学ナノテクノロジーセンター長

【略歴】
昭52. 3　大阪大学理学部化学科卒業
54. 3　大阪大学大学院理学研究科有機化学専攻修士課程修了
56. 2　大阪大学大学院理学研究科有機化学専攻博士課程退学
56. 2　名古屋大学教務職員化学測定機器センター
58. 3　理学博士（大阪大学）
58. 4　広島大学助手工学部
平 6. 5　広島大学助教授工学部
10. 4　九州大学助教授有機化学基礎研究センター
12. 4　広島大学助教授工学部
13. 4　広島大学助教授大学院工学研究科
15. 2　大阪大学教授産業科学研究所
20. 4　大阪大学産業科学研究所附属材料解析センター長（平21.3まで）
21. 4　大阪大学教授産業科学研究所附属産業科学ナノテクノロジーセンター
21. 4　大阪大学産業科学研究所附属産業科学ナノテクノロジーセンター長（平23.3まで）

菅　沼　克　昭　（すがぬま　かつあき）　産業科学研究所附属総合解析センター長

【略歴】
昭52. 3　東北大学工学部原子核工学科卒業
55. 3　東北大学工学系大学院原子核専攻（修士課程）修了
57. 3　東北大学工学系大学院原子核専攻（博士課程）修了
57. 4　大阪大学助手産業科学研究所
62. 5　防衛大学校助教授応用物理学教室
平 8. 4　大阪大学教授産業科学研究所
21. 4　大阪大学産業科学研究所附属総合解析センター長（平23.3まで）

吉　田　陽　一　（よしだ　よういち）　産業科学研究所附属量子ビーム科学研究施設長

【略歴】
昭57. 3　東京大学工学部原子力工学科卒業
59. 3　東京大学大学院工学系研究科原子力工学専攻修士課程修了
62. 3　東京大学大学院工学系研究科原子力工学専攻博士課程修了
62. 4　アメリカミネソタ州立大学化学科助手
63. 5　東京大学助手工学部
平 5. 9　大阪大学助手産業科学研究所
7. 6　大阪大学助教授産業科学研究所
14.12　大阪大学教授産業科学研究所
21. 4　大阪大学産業科学研究所附属量子ビーム科学研究施設長（平23.3まで）

新施設長紹介

加　藤　修　雄　（かとう　のぶお）

産業科学研究所附属産業科学連携教育推進センター長

【略歴】

昭49. 3　東北大学理学部化学第二学科卒業
51. 3　東北大学大学院理学研究科化学第二専攻博士課程前期課程修了
54. 3　東北大学大学院理学研究科化学第二専攻博士課程後期課程修了
54. 3　理学博士（東北大学）
54. 4　東北大学大学院研究生（昭55.2まで）
55. 3　Yale大学博士研究員（昭56.9まで）
56.10　九州大学助手生産科学研究所
62. 5　九州大学助手機能物質科学研究所
平 9. 9　九州大学助教授機能物質科学研究所
15. 4　大阪大学教授産業科学研究所
21. 4　大阪大学産業科学研究所附属産業科学連携教育推進センター長（平22.3まで）

朝　日　　一　（あさひ　はじめ）

産業科学研究所附属国際共同研究センター長

【略歴】

昭46. 6　東京大学工学部物理工学科卒業
48. 3　東京大学大学院工学系研究科物理工学専門課程修士課程修了
51. 3　東京大学大学院工学系研究科物理工学専門課程博士課程修了
51. 3　工学博士（東京大学）
51. 4　日本電信電話公社武蔵野電気通信研究所研究員
58. 4　日本電信電話公社厚木電気通信研究所研究専門調査役
60. 4　日本電信電話株式会社厚木電気通信研究所主幹研究員
62. 4　大阪大学助教授産業科学研究所
平13. 7　大阪大学教授産業科学研究所
21. 4　大阪大学産業科学研究所附属国際共同研究センター長（平23.3まで）

大　竹　文　雄　（おおたけ　ふみお）

社会経済研究所附属行動経済学研究センター長

【略歴】

昭58. 3　京都大学経済学部経済学科卒業
60. 3　大阪大学大学院経済学研究科博士前期課程修了
60. 6　大阪大学大学院経済学研究科博士後期課程退学
60. 7　大阪大学助手経済学部
63. 4　大阪府立大学経済学部講師
平 2. 4　大阪大学助教授社会経済研究所
13. 5　大阪大学教授社会経済研究所
16. 4　大阪大学社会経済研究所附属行動経済学研究センター教授
17. 4　大阪大学社会経済研究所副所長（平19.3まで）
19. 4　大阪大学社会経済研究所長（平21.3まで）
21. 4　大阪大学社会経済研究所附属行動経済学研究センター長（平23.3まで）

新教授紹介

浅　見　洋　二　（あさみ　ようじ）　大学院文学研究科

所　　属：大学院文学研究科文化表現論専攻国文学・東洋文学講座
専門分野：六朝・唐・宋を中心とする中国の詩学

【略歴】
昭58. 3　東北大学文学部卒業
60. 3　東北大学大学院文学研究科博士課程前期課程修了
61. 3　東北大学大学院文学研究科博士課程後期課程退学
61. 4　東北大学助手文学部
62. 4　山口大学助手人文学部
63. 4　山口大学講師人文学部
平 6. 4　山口大学助教授人文学部
8.10　大阪大学助教授文学部
11. 4　大阪大学助教授大学院文学研究科
19. 4　大阪大学准教授大学院文学研究科
21. 1　博士（文学）（京都大学）
21. 4　大阪大学教授大学院文学研究科

石　井　正　彦　（いしい　まさひこ）　大学院文学研究科

所　　属：大学院文学研究科文化表現論専攻日本語学講座
専門分野：現代日本語学・計量言語学

【略歴】
昭56. 3　東北大学文学部卒業
58. 3　東北大学大学院文学研究科国文学国語学専攻博士課程前期修了
58. 4　東北大学大学院文学研究科国文学国語学専攻博士課程後期退学
58. 5　国立国語研究所言語計量研究部
平元. 4　国立国語研究所言語体系研究部
5. 7　国立国語研究所言語体系研究部主任研究官
7. 1　国立国語研究所言語体系研究部第二研究室長
11.10　大阪大学助教授大学院文学研究科
19. 4　大阪大学准教授大学院文学研究科
19.10　博士（文学）（東北大学）
21. 4　大阪大学教授大学院文学研究科

渋　谷　勝　己　（しぶや　かつみ）　大学院文学研究科

所　　属：大学院文学研究科文化動態論専攻言語生態論講座
専門分野：日本語学、社会言語学

【略歴】
昭57. 3　東京外国語大学外国語学部卒業
59. 3　東京外国語大学大学院外国語学研究科日本語学専攻修士課程修了
62.11　大阪大学大学院文学研究科日本学専攻博士後期課程退学
62.11　大阪大学助手文学部
63. 4　梅花女子大学文学部専任講師
平 2. 8　学術博士（大阪大学）
3. 4　大阪大学講師文学部
5. 4　京都外国語大学助教授外国語学部
8.10　大阪大学助教授文学部
11. 4　大阪大学助教授大学院文学研究科
19. 4　大阪大学准教授大学院文学研究科
21. 4　大阪大学教授大学院文学研究科

新教授紹介

冨　山　一　郎　（とみやま　いちろう）　大学院文学研究科

所　　属：大学院文学研究科文化形態論専攻日本学講座
専門分野：近代日本史

【略歴】
昭57. 3　京都大学農学部卒業
59. 3　京都大学大学院農学研究科農林経済学専攻修士課程修了
平 1. 3　京都大学大学院農学研究科農林経済学専攻博士課程研究指導認定退学
1. 4　神戸市外国語大学外国語学部専任講師
2. 3　京都大学大学院農学研究科農林経済学専攻博士課程修了
2. 3　農学博士（京都大学）
2. 4　神戸市外国語大学助教授外国語学部
9. 4　大阪大学助教授文学部
11. 4　大阪大学助教授大学院文学研究科
19. 4　大阪大学准教授大学院文学研究科
21. 4　大阪大学教授大学院文学研究科

藤　岡　　穣　（ふじおか　ゆたか）　大学院文学研究科

所　　属：大学院文学研究科文化表現論専攻芸術史講座
専門分野：東洋美術史

【略歴】
昭61. 3　東京芸術大学美術学部卒業
63. 3　東京芸術大学大学院美術研究科日本・東洋美術史専攻修士課程修了
平 2. 3　東京芸術大学大学院美術研究科美術専攻博士後期課程退学
2. 4　大阪市立美術館学芸員
11. 4　大阪大学助教授大学院文学研究科
19. 4　大阪大学准教授大学院文学研究科
21. 4　大阪大学教授大学院文学研究科

三　宮　真智子　（さんのみや　まちこ）　大学院人間科学研究科

所　　属：大学院人間科学研究科臨床教育学講座
専門分野：認知心理学、教育心理学、教育工学

【略歴】
昭53. 3　大阪大学人間科学部人間科学科卒業
55. 3　大阪大学大学院人間科学研究科行動学専攻前期課程修了
58. 3　大阪大学大学院人間科学研究科行動学専攻後期課程単位取得退学
58. 4　日本学術振興会奨励研究員
59. 4　鳴門教育大学助手学校教育学部
60.12　学術博士（大阪大学）
62. 7　鳴門教育大学助手学校教育研究センター
63. 4　鳴門教育大学講師学校教育研究センター
平 2. 4　鳴門教育大学助教授学校教育研究センター
10.10　鳴門教育大学教授学校教育研究センター
12. 4　鳴門教育大学教授学校教育実践センター
17. 4　鳴門教育大学教授高度情報研究教育センター
20. 4　鳴門教育大学教授大学院学校教育研究科
21. 4　鳴門教育大学名誉教授
21. 4　大阪大学教授大学院人間科学研究科

新教授紹介

NORTH ROBERT SCOTT（ノースロバートスコット）　大学院人間科学研究科

【略歴】
昭55. 6　カリフォルニア大学バークレー校文学部歴史学専攻卒業
63. 4　富山外国語専門学校常勤嘱託講師
平 6. 5　ハワイ大学マノア校修了
14. 9　カリフォルニア大学バークレー校社会学部修了
14.10　大阪大学助教授大学院人間科学研究科
14.12　Ph.D.（カリフォルニア大学）
19. 4　大阪大学准教授大学院人間科学研究科
21. 4　大阪大学教授大学院人間科学研究科

所　　属：大学院人間科学研究科社会環境学講座
専門分野：労働社会学・家族社会学

養　老　真　一　（ようろう　しんいち）　大学院法学研究科

【略歴】
昭58. 3　京都大学理学部卒業
60. 3　京都大学大学院理学研究科修士課程修了
63. 4　京都大学大学院理学研究科博士後期課程研究指導認定退学
63. 5　京都大学基礎物理学研究所研究員
平元. 4　大阪大学核物理研究センター教務補佐員
2. 4　大阪大学核物理研究センター研究生
3. 3　理学博士（京都大学）
3.10　大阪大学助手法学部
9. 4　大阪大学講師法学部
11. 4　大阪大学講師大学院法学研究科
12. 4　大阪大学助教授大学院法学研究科
19. 4　大阪大学准教授大学院法学研究科
21. 4　大阪大学教授大学院法学研究科

所　　属：大学院法学研究科法学・政治学専攻
専門分野：法情報学

石　川　直　人　（いしかわ　なおと）　大学院理学研究科

【略歴】
昭62. 3　東京工業大学理学部化学科卒業
平元. 3　東京工業大学大学院理工学研究科化学専攻修士課程修了
元. 4　三菱化成株式会社（平3.3まで）
5. 3　東京工業大学大学院理工学研究科化学専攻博士後期課程修了
5. 3　理学博士（東京工業大学）
5. 4　東京工業大学助手理学部
10. 4　東京工業大学助手大学院理工学研究科
17. 4　中央大学助教授理工学部
19. 4　中央大学准教授理工学部
21. 4　大阪大学教授大学院理学研究科

所　　属：大学院理学研究科化学専攻無機化学講座
専門分野：無機化学

新教授紹介

小木曽　啓　示　（おぎそ　けいじ）　大学院理学研究科

所　　属：大学院理学研究科数学専攻代数学講座
専門分野：代数幾何学

【略歴】
昭61. 3　東京大学理学部数学科卒業
63. 3　東京大学大学院理学系研究科数学専攻博士前期課程修了
平 2. 6　東京大学大学院理学系研究科数学専攻博士後期課程退学
2. 7　東京大学助手理学部
3. 9　理学博士（東京大学）
4.12　Max Planck 数学研究所客員研究員（平5.11まで）
5. 3　お茶の水女子大学講師理学部
8. 4　東京大学助教授大学院数理科学研究科
11. 4　Essen大学Alexander von Humboldt fellow（平12.3まで）
15. 4　名古屋大学大学院多元数理研究科　併任助教授（平17.3まで）
17. 7　韓国高等科学研究所 KIAS Scholar（平20.6まで）
18. 4　慶應義塾大学教授経済学部
21. 4　大阪大学教授大学院理学研究科

梶　原　康　宏　（かじはら　やすひろ）　大学院理学研究科

所　　属：大学院理学研究科化学専攻有機化学講座
専門分野：有機化学、生物有機化学、糖質化学

【略歴】
昭63. 3　神奈川大学工学部応用化学科卒業
平 2. 3　神奈川大学大学院工学研究科応用化学修了
5. 3　東京工業大学大学院総合理工学研究科博士後期課程生命化学専攻修了
5. 4　日本たばこ産業株式会社生命科学研究所博士研究員
7. 6　横浜市立大学助手理学部
13. 4　横浜市立大学助教授大学院総合理学研究科
17. 4　横浜市立大学准教授大学院国際総合科学研究科
19. 4　横浜市立大学教授国際総合科学部
21. 4　大阪大学教授大学院理学研究科

盛　田　健　彦　（もりた　たけひこ）　大学院理学研究科

所　　属：大学院理学研究科数学専攻解析学講座
専門分野：エルゴード理論、力学系、確率論

【略歴】
昭56. 3　金沢大学理学部数学科卒業
58. 3　大阪大学大学院理学研究科数学専攻博士前期課程修了
62. 3　大阪大学大学院理学研究科数学専攻博士後期課程修了
62. 4　大阪大学助手理学部
平元. 4　東京工業大学助教授理学部
4. 4　大阪大学助教授理学部
6. 4　東京工業大学助教授理学部
10. 4　東京工業大学助教授大学院理工学研究科
13. 4　広島大学教授大学院理学研究科
21. 4　大阪大学教授大学院理学研究科

新教授紹介

荒　尾　晴　恵　（あらお　はるえ）　大学院医学系研究科

所　　属：大学院医学系研究科保健学専攻統合保健看護科学分野看護実践開発科学講座
専門分野：臨床看護学、がん看護学、症状マネジメント

【略歴】
昭58. 3　倉敷中央看護専門学校卒業
58. 4　財団法人倉敷中央病院看護師
平 2. 4　川崎医科大学附属病院看護師
10. 3　千葉大学看護学部看護学科卒業
12. 3　兵庫県立看護大学大学院看護学研究科修士課程修了
12. 4　兵庫県立看護大学講師看護学部
15. 4　兵庫県立大学准教授看護学部
20. 4　大阪大学招へい准教授（がんプロフェッショナル養成プラン）
20.12　兵庫県立大学大学院看護学研究科博士後期課程修了
21. 4　大阪大学教授大学院医学系研究科

猪　原　秀　典　（いのはら　ひでのり）　大学院医学系研究科

所　　属：大学院医学系研究科脳神経感覚器外科学講座（耳鼻咽喉科学）
専門分野：頭頸部癌、甲状腺癌、頭蓋底外科

【略歴】
昭62. 3　大阪大学医学部医学科卒業
62. 4　大阪大学医学部（耳鼻咽喉科学教室）において研究に従事
62. 5　大阪大学医学部附属病院において臨床補助の研修に従事
62. 7　医員（研修医）（大阪大学医学部附属病院）（昭63.3まで）
平 4. 3　大阪大学大学院医学研究科博士課程修了
4. 3　医学博士（大阪大学）
4. 4　大阪大学医学部研究生（耳鼻咽喉科学教室）
4. 7　医員（大阪大学医学部附属病院）
4. 9　アメリカ合衆国ミシガン癌研究所腫瘍転移研究部門 Visiting Fellow
7. 5　大阪大学助手医学部
11. 4　大阪大学助手大学院医学系研究科
12. 5　大阪大学講師大学院医学系研究科
21. 3　大阪大学教授大学院医学系研究科

島　田　昌　一　（しまだ　しょういち）　大学院医学系研究科

所　　属：大学院医学系研究科解剖学講座（神経細胞生物学）
専門分野：神経解剖学、神経生物学

【略歴】
昭61. 3　大阪大学医学部医学科卒業
63.12　大阪大学大学院医学研究科博士課程中退
63.12　大阪大学助手医学部
平 5. 7　医学博士（大阪大学）
6. 2　大阪大学講師医学部
8. 1　大阪大学助教授医学部
9. 9　名古屋市立大学教授医学部
14. 4　名古屋市立大学教授大学院医学研究科
21. 4　大阪大学教授大学院医学系研究科

新教授紹介

原　田　彰　宏　（はらだ　あきひろ）　大学院医学系研究科

所　　属：大学院医学系研究科解剖学講座（細胞生物学）
専門分野：細胞生物学、解剖学

【略歴】
平元. 3　東京大学医学部医学科卒業
元. 6　医員（研修医）（東京大学医学部附属病院）
2. 4　東京大学医学部（解剖学教室）において研究に従事
4.10　東京大学助手相当（寄附講座教員）薬学部
7. 4　東京大学助手医学部附属脳研究所
8. 5　医学博士（東京大学）
8. 7　東京大学講師医学部
9. 4　東京大学講師大学院医学系研究科
13. 7　群馬大学教授生体調節研究所
21. 4　大阪大学教授大学院医学系研究科

大須賀　公　一　（おおすか　こういち）　大学院工学研究科

所　　属：大学院工学研究科機械工学専攻知能機械学部門
専門分野：動的システム制御学

【略歴】
昭57. 3　大阪府立大学工学部機械工学科卒業
59. 3　大阪大学大学院基礎工学研究科博士前期課程修了
59. 4　(株)東芝総合研究所エネルギー機器研究所
61.10　大阪府立大学助手工学部
平元. 2　博士（工学）（大阪府立大学）
2.10　大阪府立大学講師工学部
4. 4　大阪府立大学助教授工学部
10. 5　京都大学助教授大学院情報学研究科
15.12　神戸大学教授工学部
19. 4　神戸大学教授大学院工学研究科
21. 4　大阪大学教授大学院工学研究科

加　賀　有津子　（かが　あつこ）　大学院工学研究科

所　　属：大学院工学研究科ビジネスエンジニアリング専攻技術知マネジメント講座
専門分野：都市計画、環境デザイン、空間情報学

【略歴】
昭62. 3　大阪大学工学部環境工学科卒業
62. 4　(株)プラス・ワン取締役
平元. 4　阪急電鉄株式会社文化・技術研究所所員
6. 4　阪急電鉄株式会社文化・技術研究所研究員
7. 6　阪急電鉄株式会社文化・技術研究所都市本部都市開発部調査役
8. 7　博士（工学）（大阪大学）
9. 4　阪急電鉄株式会社文化・技術研究所総合開発事業本部プロジェクト開発部文化・技術研究所研究員
11. 4　阪急エンジニアリング株式会社都市部課長（出向）
13. 6　大阪大学講師大学院工学研究科
14. 4　大阪大学助教授大学院工学研究科
19. 4　大阪大学准教授大学院工学研究科
21. 4　大阪大学教授大学院工学研究科

新教授紹介

紀ノ岡　正　博　（きのおか　まさひろ）　大学院工学研究科

所　　属：大学院工学研究科生命先端工学専攻生物工学講座
専門分野：生物化学工学

【略歴】
平元. 3　大阪大学基礎工学部化学工学科卒業
3. 3　大阪大学大学院基礎工学研究科博士前期課程修了
3. 5　大阪大学大学院基礎工学研究科博士後期課程退学
3. 6　大阪大学助手基礎工学部
8. 1　博士（工学）（大阪大学）
9. 4　大阪大学助手大学院基礎工学研究科
12. 2　大阪大学講師大学院基礎工学研究科
15. 4　大阪大学助教授大学院基礎工学研究科
19. 4　大阪大学准教授大学院基礎工学研究科
21. 4　大阪大学教授大学院工学研究科

小　林　慶　裕　（こばやし　よしひろ）　大学院工学研究科

所　　属：大学院工学研究科精密科学・応用物理学専攻応用物理学講座
専門分野：ナノマテリアル科学

【略歴】
昭58. 3　早稲田大学理工学部化学科卒業
60. 3　早稲田大学大学院理工学研究科博士前期課程修了
60. 4　日本電信電話(株)武蔵野電気通信研究所研究員
62. 3　日本電信電話(株)基礎研究所研究員
62.10　日本電信電話(株)基礎研究所研究主任
平 4. 2　日本電信電話(株)基礎研究所主任研究員
6.12　博士（工学）（早稲田大学）
10. 7　日本電信電話(株)物性科学基礎研究所担当課長
12. 7　日本電信電話(株)物性科学基礎研究所主任研究員
12.10　日本電信電話(株)物性科学基礎研究所主幹研究員
16. 4　日本電信電話(株)物性科学基礎研究所主幹研究員・グループリーダ
16. 4　東京理科大学連携大学院理学研究科客員教授
21. 4　大阪大学教授大学院工学研究科

高　井　重　昌　（たかい　しげまさ）　大学院工学研究科

所　　属：大学院工学研究科電気電子情報工学専攻システム・制御工学講座
専門分野：システム制御工学

【略歴】
平元. 3　神戸大学工学部システム工学科卒業
3. 3　神戸大学大学院工学研究科修士課程修了
4. 5　神戸大学大学院工学研究科博士後期課程退学
4. 6　大阪大学助手工学部
7. 3　博士（工学）（大阪大学）
10. 4　和歌山大学講師システム工学部
11.10　和歌山大学助教授システム工学部
16.10　京都工芸繊維大学助教授工芸学部
18. 4　京都工芸繊維大学助教授大学院工芸科学研究科
19. 4　京都工芸繊維大学准教授大学院工芸科学研究科
21. 4　大阪大学教授大学院工学研究科

新教授紹介

関　山　　明　（せきやま　あきら）　大学院基礎工学研究科

所　　属：大学院基礎工学研究科物質創成専攻物性物理工学領域電子相関物理講座
専門分野：物性物理学、光電子分光、シンクロトロン放射光物性

【略歴】
平 4. 3　東京大学理学部物理学科卒業
6. 3　東京大学大学院理学系研究科物理学専攻修士課程修了
9. 3　東京大学大学院理学系研究科物理学専攻博士後期課程修了
9. 4　大阪大学助手大学院基礎工学研究科
19. 4　大阪大学助教大学院基礎工学研究科
21. 4　大阪大学教授大学院基礎工学研究科

三　宅　　淳　（みやけ　じゅん）　大学院基礎工学研究科

所　　属：大学院基礎工学研究科機能創成専攻生体工学領域生物工学講座
専門分野：生物物理学、生物化学、再生医療、バイオエネルギー

【略歴】
昭50. 3　大阪大学理学部化学科卒業
52. 3　大阪大学大学院理学研究科無機及び物理化学専攻修士課程修了
55. 3　大阪大学大学院理学研究科生物化学専攻博士課程修了
55. 4　工学技術院・微生物工業技術研究所研究員
平 4. 4　工業技術院・産業技術融合領域研究所主任研究官
12. 4　工業技術院・産業技術融合領域研究所首席研究官
15. 4　独立行政法人産業技術総合研究所ティッシュエンジニアリング研究センターセンター長
18. 4　同　セルエンジニアリング研究部門部門長
21. 4　大阪大学教授大学院基礎工学研究科

和　田　昌　昭　（わだ　まさあき）　大学院情報科学研究科

所　　属：大学院情報科学研究科情報基礎数学専攻離散幾何学講座
専門分野：数理情報学

【略歴】
昭56. 3　大阪大学理学部数学科卒業
58. 3　大阪大学大学院理学研究科数学専攻博士前期課程修了
59. 1　コロンビア大学大学院（交換留学）
61. 5　Doctor of Philosophy取得（コロンビア大学）
62. 3　大阪大学大学院理学研究科数学専攻博士後期課程単位取得退学
62. 4　東京都立大学客員研究員
62. 9　ペンシルバニア大学Assistant Professor
平 3. 7　ケースウェスタンリザーブ大学客員Assistant Professor
4. 6　奈良女子大学講師理学部
6. 4　奈良女子大学助教授理学部
11. 3　奈良女子大学教授理学部
21. 4　大阪大学教授大学院情報科学研究科

新教授紹介

山　下　典　孝　（やました　のりたか）　大学院高等司法研究科

所　　属：大学院高等司法研究科
専門分野：商法・保険法

【略歴】
平元. 3　立命館大学法学部卒業
3. 3　中央大学大学院法学研究科博士課程前期課程修了
4. 3　中央大学通信教育部インストラクター
4. 3　宇都宮法律専門学校非常勤講師（平7.3まで）
6. 3　中央大学大学院法学研究科博士課程後期課程退学
6. 4　中央商科短期大学非常勤講師（平7.3まで）
6. 4　群馬法律専門学校非常勤講師（平7.3まで）
7. 4　高岡法科大学法学部専任講師
9. 4　高岡法科大学法学部助教授
13. 4　岡山大学助教授法学部
16. 4　大阪大学助教授大学院高等司法研究科
19. 4　大阪大学准教授大学院高等司法研究科
21. 4　大阪大学教授大学院高等司法研究科

栗　栖　源　嗣　（くりす　げんじ）　蛋白質研究所

所　　属：蛋白質研究所蛋白質構造生物学研究部門・蛋白質結晶学研究室
専門分野：X線構造生物学

【略歴】
平 4. 3　大阪大学工学部応用精密化学科卒業
6. 3　大阪大学大学院工学研究科博士前期課程応用精密化学専攻修了
9. 3　大阪大学大学院工学研究科博士後期課程応用精密化学専攻修了
9. 3　工学博士（大阪大学）
9. 4　大阪大学助手たんぱく質研究所附属たんぱく質工学基礎研究センター
10. 4　大阪大学助手たんぱく質研究所附属生体分子解析センター
14. 4　大阪大学助手たんぱく質研究所附属プロテオミクス総合研究センター
16. 4　東京大学助教授大学院総合文化研究科
19. 4　東京大学准教授大学院総合文化研究科
21. 4　大阪大学教授蛋白質研究所

藤　山　和　仁　（ふじやま　かずひと）　生物工学国際交流センター

所　　属：生物工学国際交流センター応用微生物学講座
専門分野：糖鎖工学、応用酵素工学

【略歴】
昭59. 3　大阪大学工学部醗酵工学科卒業
61. 3　大阪大学大学院工学研究科醗酵工学専攻前期課程修了
63. 3　大阪大学大学院工学研究科醗酵工学専攻後期課程退学
63. 4　大阪大学助手工学部
63. 9　大阪大学助手工学部附属生物工学国際交流センター
平 2. 3　工学博士（大阪大学）
7. 4　大阪大学助手生物工学国際交流センター
15. 2　大阪大学助教授生物工学国際交流センター
19. 4　大阪大学准教授生物工学国際交流センター
21. 2　大阪大学教授生物工学国際交流センター

新教授紹介

大　澤　　孝　（おおさわ　たかし）　世界言語研究センター

所　　属：世界言語研究センター中東・アフリカ言語文化圏研究部門
専門分野：中央ユーラシアの古代テュルク系遊牧民史

【略歴】
昭59. 3　金沢大学法文学部哲・史・文学科史学部卒業
平 2. 3　金沢大学大学院文学研究科東洋史学専攻修士課程修了
5. 9　北海道大学大学院文学研究科博士後期課程東洋史学専攻単位取得退学
5.10　大阪外国語大学専任講師外国語学部
8. 1　大阪外国語大学助教授外国語学部
19.10　大阪大学准教授世界言語研究センター
21. 4　大阪大学教授世界言語研究センター

塩　谷　茂　樹　（しおたに　しげき）　世界言語研究センター

所　　属：世界言語研究センターアジア言語文化圏研究部門Ⅰモンゴル語
専門分野：モンゴル語学

【略歴】
昭60. 3　大阪外国語大学モンゴル語学科卒業
63. 3　京都大学大学院文学研究科言語学専攻修士課程修了
平 3. 3　京都大学大学院文学研究科言語学専攻博士後期課程単位取得退学
7. 4　大阪外国語大学講師地域文化学科
9. 1　大阪外国語大学助教授地域文化学科
19.10　大阪大学准教授世界言語研究センター
21. 4　大阪大学教授世界言語研究センター

眞　嶋　潤　子　（まじま　じゅんこ）　世界言語研究センター

所　　属：世界言語研究センターアジア言語文化圏研究部門Ⅰ
専門分野：日本語教育学・外国語教育学

【略歴】
昭57. 3　京都教育大学教育学部英文学科卒業
57. 7　クィーンズ大学（カナダ）留学（国際ロータリー財団奨学生）（昭58.6まで）
60. 2　国立国語研究所日本語教育長期専門研修修了
60. 4　文化外国語専門学校日本語科インストラクター
平 2. 3　ジョージア大学大学院修士課程外国語専攻修了
6. 8　ジョージア大学大学院博士課程言語教育専攻修了
6. 8　教育学博士（ジョージア大学）
7. 4　大阪外国語大学助教授外国語学部
13. 4　テュービンゲン大学（ドイツ）日本文化研究所客員研究員（平14.3まで）
17. 3　ノルトライン＝ヴェストファーレン州立言語研究所（ドイツ）客員研究員（平17.9まで）
19. 4　大阪外国語大学准教授外国語学部
19.10　大阪大学准教授世界言語研究センター
21. 4　大阪大学教授世界言語研究センター

村橋俊介名誉教授（理学部）逝去

本学名誉教授村橋俊介先生は1月16日（金）、老衰のため逝去されました。享年101歳でした。

先生は昭和5年東北帝国大学理学部化学科を卒業し、昭和8年大阪帝国大学理学部副手、昭和14年3月同講師を嘱託されました。昭和14年大阪帝国大学（産業科学研究所員）を経て、昭和27年大阪大学教授（理学部）に就任され、昭和34年には高分子学科を創設されました。昭和41年から昭和44年まで大阪大学理学部長を務められ、激動の管理運営の困難な時期にもかかわらず、その重責を果たされました。昭和46年大阪大学を定年退官され、昭和47年4月岡山理科大学教授となられました。

村橋俊介先生は天然物有機化合物の構造研究から出発し、その後高分子化学の黎明期に研究を高分子化学の分野にも広げられ、長年にわたり高分子化学研究に従事し、この領域の先駆者としての役割を果たされました。

天然物のご研究ではインドール誘導体の研究、ヨヒンビンの構造研究、マツタケ香気成分の研究などが高い評価を得ており、「エフェドリンの合成研究」は工業的意義が大きく、昭和24年に大阪市民文化賞を授与されています。高分子化合物の合成研究では、ポリビニルアルコールをはじめとする多種類の立体規則性ポリマーの合成とその化学構造や性質の研究、各種のビニル系交互共重合体の合成などに大きく貢献されました。「高分子化合物の合成的研究」によって昭和41年に日本化学会賞を受賞されておられます。

そのほか、日本化学会や高分子学会においても重責を果たされ、昭和51年から近畿化学工業会会長としても活躍されました。

以上のように村橋俊介先生は大阪大学などにおける教育研究において多大の功績を残されているにとどまらず、大学外の活動においても化学および高分子学の発展に極めて大きな貢献をされ、その功績は非常に顕著なものであります。

ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

（理学研究科・理学部）

田野保雄教授（医学系研究科部）逝去

医学系研究科教授田野保雄先生は1月31日（土）、急性心筋梗塞のためにご逝去されました。享年60歳でした。

先生は昭和47年大阪大学医学部卒業され、大阪大学医学部附属病院、松山赤十字病院、大阪大学医学部眼科助手を経て、アメリカ合衆国マイアミ大学バスコム・パルマー眼科研究所とデューク大学デューク・アイ・センターで、硝子体手術の権威であるマカマー教授に師事されました。昭和55年に大阪大学医学部に戻られ、昭和60年からは国立大阪病院眼科医長として多くの網膜硝子体手術を手がけられました。平成3年に大阪大学医学部眼科教授に就任された後は、臨床で御活躍されるのみならず、網膜硝子体疾病の研究および後進の育成にも力を注がれました。

田野保雄先生は糖尿病網膜症、加齢黄斑変性、網膜剥離などの難治性網膜硝子体疾患の内科的外科的治療を専門とされ、これに関連した光凝固装置、自動眼内空気灌流装置、眼内観察装置などの手術補助装置や各種器具の開発に過去25年携わってこられました。平成13年からは、網膜刺激型電極による人工視覚システムの開発プロジェクトを担当し、また平成15年からは視神経乳頭刺激型電極による人工視覚システムの開発プロジェクトを立ち上げられました。

これら網膜硝子体疾患の治療の進歩に大きく貢献されたことが評価され、世界各国からSir Norman McAllister Gregg Medal（The Royal Australian and New Zealand College of Ophthalmologists）、The Gertrude Pylon Award for Outstanding Retina Research（Retina Research Foundation）、LIX Edward Jackson Memorial Award（American Academy of Ophthalmology）、盛賞（日本網膜硝子体学会）など多数の賞が贈られました。

活躍は世界に及び、日本眼科学会理事長、ゴナンクラブ理事長 、アジア太平洋眼科学会理事長など、主要な国際学会の要職を歴任されました。このように田野先生は世界を先導する形で大阪大学および我が国の眼科学の発展のために大きく寄与されました。

ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

（医学系研究科・医学部）

堀川　明名誉教授（工学部）逝去

本学名誉教授堀川　明先生は、2月7日（土）にご逝去されました。享年86歳でした。

先生は、昭和22年9月大阪帝国大学工学部機械工学科を卒業し、同大学院特別研究生を経て、昭和27年10月大阪大学工学部助手、昭和36年5月同講師、昭和37年12月同助教授となり、昭和43年8月同教授に就任、機械工学第7講座（繊維工学）を担当し、昭和61年3月に停年退官されました。退官後は、帝塚山学院短期大学の教授に就任、家政学科を担当し、平成2年3月定年退職されました。その後、平成2年4月から平成14年3月まで大阪工業技術専門学校の講師を、平成2年4月から平成9年3月まで武庫川女子大学で非常勤講師を務められ、永年にわたり研究・教育に従事されました。

この間、先生は、粘弾性流体中の熱移動と流動に関する研究や、流体中の短繊維及び繊維群の挙動に関する研究、繊維機械に関する研究などで、先進的な研究を進められ、繊維、紡糸、紡績、染織仕上、高分子成形加工、複合材料、繊維製品の諸分野で先導的役割を果たされました。特に昭和49年の石油ショックに際しては、染織仕上機械の省エネルギーの具体的方法の指導書を作成し、全国の同業界の石油消費量を平均4割節減することに成功して、同業界に多大な貢献を果たしました。

また、大学にあっては、大阪大学で各種の委員、委員長を務められましたが、とりわけ大阪大学五十年史の発行に際し、写真集「大阪大学の五十年」では写真編集委員長として、また、部局史及び通史では編集と執筆に協力されました。また、大阪大学工学部資料室を創設し、その運営を引受け、明治29年以来80有余年にわたる同工学部の歴史的資料の発掘、収集、保存に努められました。

学外においては、学協会及び官公庁、公的機関を通じ、永年わが国の繊維工学関連分野の学術の発展及び繊維業界の発展に尽力されました。とりわけ、日本繊維機械学会では理事、副会長、会長を歴任し、日本繊維製品消費科学会では理事を務められ、繊維工学及び関連の諸分野における学術的発展に指導的活動を行ってこられました。一方、日本昇降機協会安全審査評定委員、箕面中央ロータリークラブ会長、生鮮ベンダー協会会長を務めるなど、繊維工学以外の分野においても幅広く社会貢献に努められました。これらの功績に対し、平成10年、勲三等旭日中綬章を受けられました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

（工学研究科・工学部）

萩原信衛名誉教授（産業科学研究所）逝去

本学名誉教授萩原信衛先生は2月23日（月）、腸閉塞が原因でご逝去されました。享年92歳でした。

先生は、昭和15年大阪帝国大学理学部化学科を卒業後、同大学産業科学研究所助手、講師、助教授を経て、昭和31年5月同研究所高分子有機化学部門（昭和51年名称変更により有機金属化合物部門）に教授として就任されました。そして、昭和45年8月から2期（4年）にわたり大阪大学産業科学研究所長に就任され、昭和55年3月末定年退官されました。

先生の研究は、有機金属化学を中心に有機合成化学、触媒化学、高分子化学、材料化学など広い分野におよんでいますが、特に有機金属化学の分野に独自の研究を展開され、応用的開発研究を目指して新しい有機金属化合物の合成を精力的に押し進め、いくつもの先駆的な研究を推進され、当時黎明期にあった我が国の有機金属化学の発展に先導的な役割を果たされました。

学術研究に尽力されるかたわら、学会においては、有機合成化学協会理事・関西支部長、近畿化学協会有機金属部会長、日本化学会常議員などの関連学協会の役員を歴任され、その発展に寄与されました。さらに、有機金属化学の国際誌ジャーナル・オブ・オルガノメタリック・ケミストリーの編集委員をその創刊時から23年間にわたり務められたほか、有機金属化学、ケイ素化学、有機合成指向有機金属化学などの国際会議の組織委員も務められ、国際研究交流にも貢献されました。

教育面でも熱心に取り組まれ、大学院理学研究科有機化学専攻を担当及び同高分子専攻を兼担し、大学院における研究者養成に従事するとともに、理学部教授を併任し学生教育にも深く携わり、有機金属化学の専門書や教科書にも先生の研究成果が多数取り上げられています。

このように、先生は、大阪大学ならびに我が国の学術振興に多大な貢献をされました。これら多年にわたる有機金属化学の分野での優れた業績に対し、昭和47年有機合成化学協会賞、平成元年11月に勲二等旭日重光章、平成7年に有機合成化学協会特別賞を授与され、平成9年に有機合成化学協会より名誉会員に推戴されています。

ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

（産業科学研究所）

平成21年度いちょう祭

いちょう祭は、本学の創立記念日（5月1日）を祝し、全学をあげて新入生を歓迎するとともに、教職員・学生の親睦及び地域との連携を図ることを目的に毎年開催しています。

今年も、教職員・学生の方のほか、高校生、地域の皆さまをはじめ学外の方に本学の教育・研究の内容を知っていただくため、以下の日程により開催します。

皆さまの積極的な参加をお待ちしています。

日　程

5月1日（金）　・　5月2日（土）

- 大学主催の各種行事（学内施設開放、展示会、映画会、講演会など）
- 学生団体による協賛行事（スポーツ大会、園遊会など）
- 模擬店

問い合わせ先：総務部総務課総務係（TEL06－6879－7014）

（総務部総務課）

第4回大阪大学ホームカミングデイ

本学卒業生及び教職員OB等の方が年に一度キャンパスにお運びいただき旧交を温めるとともに、「今」の大阪大学をご覧いただき本学に一層の関心をお寄せいただく日として、「第4回大阪大学ホームカミングデイ」を本年も下記により開催いたします。

なお、当日は、「いちょう祭」（5月1日～2日）の開催期間でもありますので、キャンパス内の各種催し、展示等もご見学いただければ幸いです。どうぞお友達、ご家族お誘い合せのうえ、お気軽にお越しくださいますようご案内申し上げます。

主　催　　大阪大学
協　賛　　大阪大学同窓会連合会

開催日　　平成21年5月2日(土)
場　所　　大阪大学豊中キャンパス
次　第

一、挨拶と講演（10：00～11：15　於：共通教育本館(イ号館)・2階イ講堂）

- 大阪大学総長挨拶　　鷲田　清一　総長
- 大阪大学同窓会連合会会長挨拶　　熊谷　信昭　元総長
- 卒業生による講演　　作家　築山　桂さん（文学部卒）

一、レセプション（11：30～13：00　於：附属図書館下生協食堂）

＜お問い合わせ先＞

大阪大学企画部広報・社学連携事務室（TEL06－6879－7151）
大阪大学同窓会連合会事務室　　（TEL06－6879－7152）

同窓会連合会ホームページ　https://alumni.jim.osaka-u.ac.jp/alumni/

（企画部広報・社学連携事務室）

大阪大学総合学術博物館第4回特別展
「昭和12年のモダン都市へ　観光映画「大大阪観光」の世界」

開催期間：4月27日(月)～7月4日(土)
開催場所：大阪大学総合学術博物館待兼山修学館
開館時間：10：30～17：00　入場無料　日・祝は休館
主　　催：大阪大学総合学術博物館、大阪歴史博物館
共　　催：大阪大学大学院文学研究科
協　　力：大阪大学21世紀懐徳堂

いま大阪では、世界的なグローバル化の流れの中で経済・行政のありようが激変し、文化や芸術には閉塞感が漂い、未来への展望はきわめて不鮮明です。

このような状況の今こそ、大阪という都市の未来を語る上で、その成り立ちや過去の姿を再認識することが求められています。

昭和12年（1937）、大阪市電気局と産業部による観光映画「大大阪観光」（大阪市指定文化財）が制作されました。

この映画は、大正14年（1925）に第二次市域拡張で面積・人口とも東京市を抜いて、日本第一のマンモス都市“大大阪”に膨張した大阪市が關一市長の施政下、変貌を遂げた姿を映像化したものといえます。映画で謳われるのは、古代の難波宮以来の歴史と伝統ある都市としての大阪であり、一方、それとは対照的な、御堂筋や地下鉄の建設、築港の整備、「都市美」を意識した街づくり、美術館、動物園、電気科学館などの文化施設を完備したモダン都市・大阪の発展する姿でした。

本展覧会は、“大大阪”の時代を貴重な映像で記録した観光映画「大大阪観光」をとりあげ、観光艇「水都」からの風景をはじめ、映し出される名所名跡や観光施設を、当時のパンフレット、広告、出版物、報道写真など、関係資料約120点をもとにたどります。また、観光客誘致の映画として制作された明るいイメージから逸脱した要素、“大大阪”の美名の陰で深刻化した都市問題をとりあげるほか、行政が演出する「都市観光」にひそむ、都市の“迷宮性”にも触れたいと考えます。

総合学術博物館ホームページ　http://www.museum.osaka-u.ac.jp/
〈問い合わせ先〉大阪大学総合学術博物館（TEL06－6850－6284）　**（総合学術博物館）**

大阪大学室内楽アンサンブル第8回演奏会

大阪大学室内楽アンサンブル（OUCE）は、クラシック音楽の日常的な練習会および定期的な演奏会活動を通して、大阪大学の文化的基盤の醸成と大阪大学構成員間のコミュニケーション促進に微力を尽くすことを目的として、平成17年4月に設立されました。大阪大学の大学祭行事の一環として年2回（春・秋）、MOホールにおいて演奏会を開催し、毎回多くの方にご来聴をいただいております。

このたび第8回演奏会を下記の通り開催いたしますので、皆様、お誘い合わせの上、ご来聴賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

詳しくは、OUCEのホームページ（http://orchestra.musicinfo.co.jp/~ouce/）をご覧下さい。

日時：5月2日（土）　開場：13：30　開演：14：00
場所：大阪大学コンベンションセンター　MOホール　入場無料
（演奏曲目）

ルクレール／2つのヴァイオリンのためのソナタ第1番　ロ短調　作品12
モーツァルト／フルート四重奏曲　第1番　ニ長調K.285より　第1楽章
モーツァルト／ピアノ四重奏曲　第1番　ト短調K.478より　第1, 3楽章
シューベルト／ピアノ三重奏曲　第1番　変ロ長調D898より　第2楽章
ウェーバー／フルート三重奏曲　作品63, J.256より　第1, 2楽章
チャイコフスキー／弦楽四重奏曲　第2番　ヘ長調　作品22より　第1楽章
ヴォーン・ウィリアムズ／グリーンスリーブスによる幻想曲

〈問い合わせ先〉tsukuda@chem.eng.osaka-u.ac.jp

（OUCE）

大阪大学特別講義

新しい試みとして、大阪大学の全学部・研究科の全学生を対象とする特別講義を実施します。どのような専門分野の学生にとっても意義深い講義ですので、積極的にご参加いただきますようお願いします。

主　催：　大阪大学
協　力：　関西経済同友会及び関西サイエンス・フォーラム
会　場：　豊中キャンパス　文系総合研究棟401教室ほか

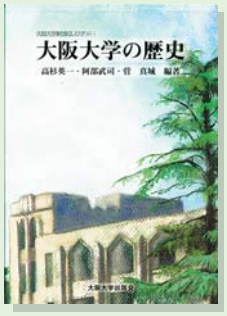
●5月25日(月)　　16：20～17：50
　講義題目：　夢をかけて走る
　講　　師：　安　藤　忠　雄　先生（建築家、東京大学名誉教授）

●6月15日(月)　　16：20～17：50
　講義題目：　文明史の中の現代
　講　　師：　山　崎　正　和　先生　（劇作家、評論家、中央教育審議会前会長、大阪大学名誉教授）

問い合わせ先：学生部学務課（TEL 06―6879―7082）

大阪大学出版会「新刊書のご案内」

◆大阪大学新世紀レクチャー『大阪大学の歴史』
　高杉英一・阿部武司・管　真城　編著／A5判・並製・224頁　定価2100円（税込）



本書は、大阪大学が現在行っている教育・研究そして社会貢献への活動、さらに、大阪大学の精神的源流である懐徳堂・適塾から大阪大学の創設と発展までを合計22人の執筆者が簡潔に解説しています。
大阪大学の学生のみならず、教職員、一般読者の方にも、読んでいただき大阪大学についての理解を深めていただければ幸いです。

◆『キャンパスに咲く花　阪大豊中編』
　福井希一・栗原佐智子　編著／四六判・並製・302頁　定価1995円（税込）

昨年の「キャンパスに咲く花　阪大吹田編」に引き続き、阪大NOW　No.86（平成17年12月号）の「クローズアップ」にてご紹介いただいた、基礎セミナー「植物を知り、植物に学ぶ」の成果をまとめた本、「キャンパスに咲く花　阪大豊中編」（福井希一・栗原佐智子編著　発行：大阪大学出版会）が刊行されました。大阪大学出版会及び、一般書店で購入できます。

豊中キャンパスには、待兼山とともに豊かな里山の植生が残されています。吹田編と同様、春夏秋冬に分けてキャンパス内で観察できる植物を245種、600点を越す図版で紹介しています。8つのコラムでは昆虫も含めて豊かな自然を、タンポポをキーワードにしたサスティナビリティや、博物学、資源として解説し、現在の待兼山の植生のみならず、1960年代のキャンパス周辺の風景もうかがい知る事が出来ます。キャンパスマップ、キノコミニ図鑑、キャンパスの庭園インフォメーションも掲載していますので四季折々の散策にご活用下さい。

【お問い合わせ先】：大阪大学出版会
〒565-0871　大阪府吹田市山田丘2－7　大阪大学ウエストフロント
TEL／FAX 06－6877－1614　e-mail info@osaka-up.or.jp
URL http：//www.osaka-up.or.jp

平成21年4月箕面地区に「学生生活相談室」・「就職相談室」・「障害学生支援相談室」がOPEN!

吹田・豊中両地区で行っている学生生活相談、就職相談、障害学生支援相談の箕面地区での開設を進めておりましたが、平成21年4月から同地区研究講義棟A棟1階（箕面学生センター向い）で開設する運びとなりました。相談業務は下記のとおりとなっています。

予約の必要はありませんので、お気軽にご利用ください。

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
学生生活相談室	箕面地区 13:00～17:00		豊中地区 13:00～17:00	吹田地区 13:00～17:00	豊中地区 13:00～17:00
就職相談室	豊中地区 13:00～17:00	豊中地区 13:00～17:00	箕面地区 13:00～17:00	豊中地区 13:00～17:00	吹田地区 13:00～17:00
障害学生支援室	豊中地区 12:00～17:00	吹田地区 12:00～17:00	豊中地区 12:00～17:00	吹田地区 12:00～17:00	箕面地区 12:00～17:00

※休 業 日：土、日、祝日（夏季休業、年末年始、学内行事等により、臨時休業する場合があります。）
吹田地区：ＩＣホール１階（吹田学生センター）
豊中地区：学生交流棟２階（豊中学生センター）
箕面地区：研究講義棟Ａ棟１階（箕面学生センター向い）

学生生活相談室

相談員は、大学院人間科学研究科で臨床心理学を専攻している大学院生が担当しています。サークル活動や経済上の問題、学業に関することなど、学生生活上の様々な問題について、秘密厳守で相談に応じています。予約は不要です。

開室場所	開室曜日	開室時間	連絡先
ＩＣホール１階（吹田学生センター）	毎週 木曜日	13:00～17:00	06-6877-5111（内線 3146）
学生交流棟２階（豊中学生センター）	毎週 水・金曜日		06-6850-5027
研究講義棟Ａ棟１階（箕面学生センター向い）	毎週 月曜日		072-730-5089

就職相談室

就職相談員が相談業務を行っています。就職に関する様々なことについて、秘密厳守で相談に応じています。予約は不要です。

開室場所	開室曜日	開室時間	連絡先
ＩＣホール１階（吹田学生センター）	毎週 金曜日	13:00～17:00	06-6879-7078
学生交流棟２階（豊中学生センター）	毎週 月・火・木曜日		06-6850-5027
研究講義棟Ａ棟１階（箕面学生センター向い）	毎週 水曜日		072-730-5089

障害学生支援室

障害のある学生が、学業面・生活面で必要とする配慮やサービスについて、秘密厳守で相談に応じています。予約は不要です。

開室場所	開室曜日	開室時間	連絡先
ＩＣホール１階（吹田学生センター）	毎週 火・木曜日	12:00～17:00	06-6877-5111（内線 3145）
学生交流棟２階（豊中学生センター）	毎週 月・水曜日		06-6850-6107
研究講義棟Ａ棟１階（箕面学生センター向い）	毎週 金曜日		072-730-5089

（学生部キャリア支援課）

女性研究者キャリア・デザインラボの活動ー「研究支援員制度」の現状

科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成」プログラムに、本学多様な人材活用推進委員会が「次代に繋ぐサポート連鎖の形成」を申請し採択されましたが、これによってスタートした「研究支援員制度」は、女性研究者キャリア・デザインラボが実施を担当しております。これまでに本制度を利用した女性研究者は延べ71人、支援にあたった学生・院修了者は述べ73人にのぼっています。

下の表にこれまでの制度利用者、支援者の人数をご紹介します。制度利用者の所属部局は、医学研究科、理学研究科、産業科学研究所、国際公共政策研究科など多岐にわたっております。人材バンクに登録してくださった支援者は120名を越え、学部2年生から博士後期課程2年生の学生さん、修士卒業者・博士卒業者など、幅広い経歴・年齢層の方々が支援研究者や研究補助員として、女性研究者の支援にあたってくださっています。

本制度は、女性研究者支援の仕組みとして非常に有効であることが実証されつつありますが、その具体例のご紹介は、次回に行いたいと思います。

利用者の所属	19-Ⅰ	20-Ⅰ	20-Ⅱ	21-Ⅰ
医学系研究科	5	7	8	8
産業科学研究所	3	3	2	2
薬学研究科	1	1	1	0
工学研究科	1	2	2	2
理学研究科	1	0	0	1
サイバーメディアセンター	1	2	1	0
高等司法研究科	1	1	0	0
生物工学国際交流センター	0	1	1	1
微生物病研究所	0	2	2	0
留学生センター	0	0	1	1
世界言語研究センター	0	0	1	1
生命機能研究科	0	0	0	1
免疫学フロンティア研究センター	0	0	0	1
国際公共政策研究科	0	0	0	1
社会経済学研究所	0	0	0	1
合　計 (文系の内訳)	１３ （１）	１９ （２）	１９ （３）	２０ （４）

訂正とお詫び

阪大NOW No.109（2009年2月号）P6「クローズアップ」記事中の写真のうち、日本語日本文化教育センターの出版物である『授業研究』の写真と『センター広報』の写真が入れ替わっておりました。訂正するとともにお詫びいたします。

異文化衝突の国、オランダからの便り

前グローニンゲン教育研究センター長
藤　原　　守

オランダの冬は早い。10月になると、すっかり肌寒くなり、低い雲が全天を覆い、しとしと雨が降る。30年来の付き合いのあるオランダであるが、10月が来るたびに、冬の天候が早く終わり3月が来るのを願う。アメリカ大陸の西海岸に位置するバンクーバーも雨の季節が10月から2月まで続く。物理的には、ヨーロッパ大陸でもアメリカ大陸でも寒流の流れが、このような季節を作り出しているとよく理解できる。しかし、表日本、特に大阪に長く住みなれた人間にとって、雨が続く季節への、いやな感情はぬぐい去りたいものがある。

3月中旬となると毎日晴天が続き、空いっぱいが青に染まる毎日が始まるようになった。町のあちらこちらで白、青、黄色の野生のチューリップが芝生の緑を彩り始めた。これから9月までは素晴らしい季節となる。5月はまさに「素晴らしき五月」で、厳しい冬を過ごした球根が一斉に花を咲かす季節である。

アムステルダムには世界最大の花市場があることでも有名である。オランダ人の花に対する執着心は並大抵では無い。パーティなどで友人を訪問するときは、花束もしくはワインなどを携えていく。商店街には、色とりどりの花束を展示した花屋さんがあり、色彩感覚を満たしてくれる。

美術館でゴッホやフェルメールなどの絵画を見るたびに、オランダ人の色彩感覚は、どこから来ているのかと疑問に思うことがある。17世紀のオランダ黄金時代の画家、フェルメールの描いた「デルフトの遠景」では典型的な空の青、空にポツポツと浮かび彩りを強調する白い雲、空を映す運河、煉瓦造りの町、教会。典型的なオランダ色彩の組み合わせがそこにある。19世紀後半のゴッホの色からも、オランダ人の花感覚が読み取れる。

グローニンゲンは学生町である。人口は18万人。この若者の街は4分の1が学生である。若い学生達が目立ち、パブやカフェ、レストランが多い。数多くの文化施設（映画館、劇場、ミュージックホール、アートギャラリー）があり、若者が勉学をし、未来の人生を語れる場所がある。

グローニンゲン駅の建物は東京駅に似ている。ロッテルダム港をデ・リーフデ（博愛）号を含む、5隻の船が東洋・ジパングへの新航路を見つけるために出発したのが1598年6月。ポルトガルによる攻撃を避けて喜望峰を回る航路をあきらめて、太平洋を横切って最終的にリーフデ（博愛）号が九州の臼杵市に漂着したのは、1600年。2年の大航海であった。20数名の乗組員のうち、三浦按針、ファン・ヨーステンが徳川家康に召抱えられ、ヨーステンが住居を構えた「八重洲」の地名になり、東京駅のモデルにアムステルダム駅がなった。これは有名な話であるが、グローニンゲン駅はそのミニチュア版である。長い日蘭交流の歴史が感じ取れる。2009年は徳川幕府がオランダのみに貿易を認めヨーロッパの窓口とした日蘭修好400周年の年であり、相撲興行など、多彩な催しが用意されている。グローニンゲン駅の前に立ち、日本独特の文化や思考形態がこの鎖国の時代に育まれたことに思いを馳せることも出来る。

グローニンゲン駅前、運河の中に、超モダンの美術品展示で有名なグローニンゲン美術館がある。この美術館は超モダンを売りものにしているヨーロッパ有数の美術館である。美術館を訪問するたびに、美の感覚というのはなんだろうと考えさせられる。歴史を紐解いてみれば、非常に新しいものが、すぐに大衆に受け入れられることはまれである。20世紀初頭のヨーロッパ印象派の絵画の例は有名で、ゴッホの絵は、彼が生きている間は一枚も売れなかった。モジリアニの絵も売れなかった。印象派の絵画が理解されなかった有名例は、アメリカ・フィラデルフィア郊外のバーンズ美術館の創設をめぐる話であろう。1951年に亡くなったアメリカの美術収集家アルバート・バーンズは、彼が収集した印象派の絵画が保守的な批評家によって酷評されたことに対して激怒し、収集した印象派の美術品を一般公開することを禁止した。新たに発見された美を理解出来ない人たちに収集品を見せる気にもならなかったのであろう。彼の死後、素晴らしい収集品の数々は、フィラデルフィア市が特別に定めた法令によって公開を迫られた1960年まで一般の目に触れることはなかった。また、日本でも松方コレクションは有名で、松方が、ヨーロッパを訪問し超格安価格で買った印象派絵画が、今は、一つの絵が10億円を下回らない値段になり大原美術館に展示されている。もっとも値段は、投機の対象としての値段であり、美の価値に対しての値段では必ずしも無いようだ。

グローニンゲン美術館に展示されている超モダンも難解である。なかなか分からない。わからないという感覚がダメなのだろう。感じてみようとするが無理である。そんな超モダンでも、オランダ人はこの美術館を訪問し鑑賞して行く。このような超モダンを愛好するオランダ人気質は、オランダの教育にありそうだ。

オランダの教育を一言で云えば「To be unique」ということであり、この方針は小学校から徹底している。日本の「To be uniform」とは、かなり違う教育方針がオランダ人の考えの根底にあり、新しいものを理解し、新しいことに挑戦してやろうという気概が、超モダンの美術館を支えている。

物理学でも同じようなことがあった。至近な例では、量子力学が大きく発展しつつあった1900－1930年である。量子力学という新しい科学は、古典力学を専門にしていた多数の科学者には理解されず、若い新進気英の科学者のみがこれに挑戦し、次々と発見をした。この時期に行った業績でオランダ人科学者はたくさんのノーベル賞を獲得した。

一般の人の例を出すまでもなく、多くの科学者も程度の差こそあれ、自分のやってきた仕事に囚われがちで、新しい仕事、超モダンに理解を示さない傾向がある。「Uniqueを売り物にしているオランダ人科学者も最近は、保守的傾向が出来てきている。」などと考えながら、グローニンゲン美術館を横切り町の中心へと向かう。町の中心に向かう

通りには、インドネシア、アフリカ、オランダの骨董品を扱う店などが並び、異文化世界を感じさせてくれる。

17世紀はオランダの黄金時代である。オランダは地域の貴族や、東南アジアとの交易で豊かになった商人たちによってプロテスタントの国として建国される。しかし、カソリックの国、ハブスブルク帝国からその独立が脅かされ、スペインからの独立を勝ち取るためには長い戦争を強いられる。グローニンゲンは、ドイツのミュンスターの司祭から宗教戦争をしかけられるが、運河に守られた城塞都市を守り抜く。これが1568年から1648年にかけての80年戦争（オランダ独立戦争）と知られる物語の一部で、グローニンゲンの町の運河をよく観察するとその城塞の一部が残っていたりして歴史マニアとしてはたまらない魅力となる。

グローニンゲン市の中心であるグロテ・マルクト広場を横切り、100メートルも歩くと、グローニンゲン大学本部がある。グローニンゲン大学は1614年に創設された約400年の歴史のある大学である。貿易で栄えた豊かな経済力を背景と、プロテスタントという新天地に著名な科学者が集まった。この大学の卒業生で、我々が良く知っている人は、ヘリウム液化のカメリング・オネス、立体的に細胞が見える位相差顕微鏡を発明したフリッツ・ゼルニケ、タスマニア島を発見した、アベル・タスマン、また、大阪大学の礎となった大阪医学校で医学を教えたエルメリンス先生の名前も忘れることは出来ない。この人たちはグローニンゲン大学を卒業し、異文化の中で大きな仕事を成し遂げた。ただ、ゼルニケの位相差顕微鏡はグローニンゲン大学での仕事である。グローニンゲン大学美術館を訪問すれば、ゼルニケがもらったノーベル賞の金メダルが鑑賞できる。

グローニンゲン大学は1575年に創設されたライデン大学に次ぐオランダで第二番目の歴史の長い大学だが、実は、1585年には、グローニンゲンの西のフラネケルという町にフラネケル大学が創設された。「われ思う、ゆえに我あり」という言葉で有名な「方法序説」を書いたデカルトがフランスから離れてこの大学に1628年から滞在して、近代科学、哲学の発展に大いに寄与した。デカルトは、また、望遠鏡の開発にも携わっていた。オランダの眼鏡屋リッペルスハイが望遠鏡を発明したのが1608年、ガリレオが木星の衛星を発見したのが1609年だから、デカルトは最新の科学観測装置をオランダで開発していたと云える。残念ながら、フラネケル大学は1811年にオランダがナポレオンに占領された時に、取り壊された。取り壊された理由は、学生数の減少とのこと。大航海時代に船で栄えた町も、時代の流れとともに衰退を余議なくされた歴史が読み取れる。フラネケルの町まではグローニンゲン市からは列車に乗り、西のレーワールデン市を過ぎて、約1時間の近距離である。

1774年、水星、金星、火星、木星と月の軌道が重なることがあった。人々はこの事象を世の終焉として恐れたが、アイジンガは天体の動向を説明するプラネタリウムを7年後の1781年に完成した。フラネケルにはアイジンガによって建造された世界最古のプラネタリウムが現在でも正確に動いている。木作りの歯車などで出来た、この装置を見るのは、素晴らしい体験となる。

オランダの科学的業績は、レンズをはじめ光に関わる仕事が実に多い。天文学開発の望遠鏡、医学での顕微鏡、原子スペクトルの研究などである。これも科学の伝統といってしまえば終りであるが、それを支えた技術開発があった。スペイン、ポルトガル、ハプスブルグ家、フランス、ドイツと戦いながら、一方で、オランダの商人たちは世界を旅して、異文化と衝突し異文化を取り入れてきた。オランダの技術開発は、長い歴史の賜物なのであろう。もちろん第二次世界大戦では、ドイツに蹂躙された小国の悲哀も味わった。

グローニンゲンのオランダ人は概して親切である。どうも、私が日本人であるからという理由でもない。気楽に見知らぬ外国人と気軽に交流が出来るのかと、町の人に質問をぶつけてみたことがある。答えて曰く、「数世紀にわたり、他国と戦い、水と戦い、宗教とも戦う長い歴史の中で、異文化を理解して仲良くしていく術を覚えたのでしょう」。

考えさせられた。日本はどうだったか？オランダにのみ世界を理解する小さな窓口を開け、異文化から故意に閉ざした約250年の江戸時代。幕末から明治にかけては、富国強兵の掛け声で、他国の知識を釈迦利器に吸収した日本。昭和になってからは、ドイツと手を組み、ABCD包囲網の中で第二次世界大戦に向かっていった日本。大戦後はアメリカとの同盟で、戦後復興ということで、素晴らしい工業製品を作り続けている日本。異文化との衝突から異文化と融和し、文化的な側面でも発展しているのだろうか？

ヨーロッパのちょっとした大学がそうであるように、グローニンゲン大学も外国人留学生が12%程度となっている。約25,000人が大学の学生数だから、3000人程度が外国からの留学生となる。外国にインターンシップで1学期間送っている学生数は約800人とのこと。もちろん、陸地続きのヨーロッパと海に囲まれた日本の地理的な違いはあれ、これらの数字は驚異的である。しかも授業料は払ってもらっている。中国などから来た学生の多くも授業料を支払って、グローニンゲンで生活している。この大学は「教育を売っている」。しかも、その受け入れ留学生数も年に5%程度の割合で増加している。

日本は、車、電化製品、化学製品など優れた物つくりで世界に伍して、現在に至っている。まさに「物つくり」ニッポンである。しかし、オランダは物つくりでは日本やドイツには勝てない。だから「教育・研究」を世界に売ろうとして躍起になっている姿が見えてくる。グローニンゲン大学はすでにサウジアラビアと医学学生の教育を請け負っている。2年前に、毎年40人の学生受け入れを開始した。ポッペマ学長、曰く、「サウジアラビアの王様と交渉して決めてきた」。医学部は6年間だから総計で240人に達し、優秀な医者を排出しサウジアラビア人の健康に大きな寄与を開始するだろう。ブラジルとも同様な医学教育での協力を開始した。もちろん、アジアでも旧植民地であったインドネシアとの教育交流は大きい。大阪大学とは、理学、人文科学、工学、医学分野での交流が既に開始されているが、少なくとも、大阪大学の「教育」が売れるようになるのは、まだ遠い先のようである。

このことに関しては、グローニンゲンの隣町、サッペメア市にある2007年に設立10周年を迎えたキッコーマン・フーズ・ヨーロッパで当時の社長の神戸千幸氏の言葉が想い出される。キッコーマンは年率10%の増加で醤油製品の売り上げを伸ばしている。彼が語った言葉は「味を売るのは文化を売ることと同じです。「味という文化」はすぐには売れません。1世代20年程度かかると考えて戦略を考えています。」という内容である。

教育の効果が表れるのも1世代、下手をすると2世代。不断の努力の賜物。異文化と衝突し、異文化と融合しながら、20年、40年の長期戦略で日本の「教育・文化を売る」ために、大阪大学のヨーロッパ拠点としてのグローニンゲン研究教育センターは、ますます重要となりそうである。

米国における失敗に学ぶアントレプレナーシップ

Study On Entrepreneurship With A Focus On Failures In U.S.A

経済学研究科・深田グループ

停滞する経済を活性化させる起爆剤としてベンチャー企業への高い関心が集まっている。しかしながら、日本には他の先進国に比べ、ベンチャー企業を起こす起業家が少なく、わが国のアントレプレナーシップ（起業家精神）の低さは今後の重要な課題となっている。

では、なぜ日本のその日本のアントレプレナーシップは育たないのだろうか。我々は日本のアントレプレナーシップ形成を阻害している要因の一つは、「失敗することを恐れ、リスクを負って挑戦することができないこと」にあると考えた。

そこで、我々は学生海外研修助成事業の支援を受け、「米国から失敗を許容する文化を学び、その本質を明らかにすることで、日本をアントレプレナーシップ溢れる国へと変革する」ことを大目標に、教育者、起業家、投資家、さらに失敗を許容する文化を掲げる 3M Corporation（以下、3M）のマネージャーやエンジニアへのインタビューを、合計10名に行うことができた。

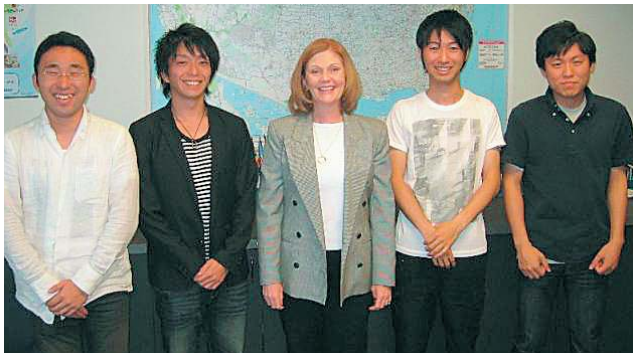
ここでは、多くの学生に失敗に対する考え方を再度見直してもらうために、「失敗を許容する文化」について報告したい。

■失敗に対するポジティブな捉え方

企業家、投資家たちは口をそろえて言う。「大きい挑戦であるほど失敗も大きくなり、小さい挑戦であれば失敗も小さくなる。挑戦しなければ失敗もしないわけであり、すなわち失敗とは挑戦者の証でもある」「若者がやりたいことを持っているにも関わらず、失敗を恐れて挑戦しないことがあるならば、それほど残念なことはない。本当に怖いのは、何も挑戦しなくて何も新しいことができないことである」。つまり、失敗することを自らが求める成功までの通過点として位置づけていることがわかる。

■失敗を許容できる人とシステム

また「上司にあたる人は失敗経験を持っており、それによって過去に成功を生み出したことを理解している。そのため、部下の失敗も許容することができるのだ」と指摘されている。つまり、挑戦する当事者以上に周辺の人間（3Mでは上司、シリコンバレーでは起業家を取り巻く投資家、弁護士等）が、挑戦には失敗はつきものであり、成功するために失敗は避けて通れないことを理解しているのである。さらに、起業家が失敗しても、成功すれば今までの失敗の



コストが帳消しになるような企業や社会を支えているビジネスモデルが、周辺の人間の失敗への許容を可能にしている。

■　0→1 の失敗と 1→100 の失敗

しかし、全ての失敗は許容されるわけではない。失敗はそのフェーズに分けて評価され、不確実性の高い 0 ⇒1 の“創り出す”フェーズでは失敗を許容できるが、1 ⇒100 の“成長させる”フェーズでは失敗は許されない。すなわち、失敗を闇雲に許容するのでは意味がなく、成功確率を高めていくためにどのようなプロセスを踏んでいき、「失敗からなにを学ぶか」が重要なのである。

日本人は、どうやら失敗を恐れすぎているようである。失敗を恐れすぎてなにもしないことほど、大きな失敗はない。あなたも、失敗することへの考え方を見直してみてはいかがだろうか？

研修期間：2008 年 9 月 1 日～ 11 日
研修場所：米国カリフォルニア大学　等
メンバー：
経済学研究科経営学系専攻博士前期課程 1 年
河村崇文・深田洋輔・松岡　祐・百々路裕二郎

ジャワ島中部地震後のガジャマダ大学の取り組みに学ぶ大学を中心とした震災復興まちづくり

工学研究科・樽本グループ

未だ記憶に新しい、阪神・淡路大震災の直後には、住宅の再建や都市基盤の整備が最重要課題と考えられたため、産業の復興は遅れ、震災直後に生じた被災地外との大きな差は 13 年が経過した今でも根強く残っています。

一方、2006 年にインドネシアで発生したジャワ島中部地震の被災地、ジョグジャカルタ市のコタ・グデ地区では、地元の大学であるガジャマダ大学が中心となった地場産業の震災復興プロジェクトが行われています。このプロジェクトが始まったことで、職人の経済的状況の改善や地域の活性化など少しずつ効果が出始めています。

コタ・グデ地区は、その昔王宮が存在するなど、市内でも随一の歴史的環境を有する地区です。特に地区の伝統産業である銀細工産業が有名で知られ、地区のメインストリートには銀細工を扱う店舗が多く集積していました。しかし、ジャワ島中部地震によって甚大な被害を受け、職人の経済的状況の改善や地域の活性化など少しずつ効果が出始

コタ・グデ地区の住宅地の様子

コタ・グデ地区の伝統的建築物であるプンドポ

めています。

コタ・グデ地区は、その昔王宮が存在するなど、市内でも随一の歴史的環境を有する地区です。特に地区の伝統産業である銀細工産業が有名で知られ、地区のメインストリートには銀細工を扱う店舗が多く集積していました。しかし、ジャワ島中部地震によって甚大な被害を受け、職人の数が激減するなど存続が危ぶまれました。

そこで、ガジャマダ大学とコタ・グデ地区のまちづくり組織、職人が一体となり、職人の生活の立て直しと地区の活性化を目的にした Crafts Reviving Program と呼ばれる産業復興プロジェクトを始めました。

私達は、地場産業の復興を大学が中心となって行う震災復興まちづくりの好事例と捉え、ヒアリング調査を通して、大学が果たす役割やプロジェクトの全体的な仕組みについて調査することとしました。

大学関係者へのヒアリング調査

調査対象者の多くはインドネシア語しか話せない方であったため、阪大とガジャマダ大学の学生でグループを作り、英語での通訳など協同のヒアリング調査を行いました。大学関係者、まちづくり組織、職人の合計 20 名のもとを訪れ、プロジェクトでの役割や関係者同士の連携について把握しました。研修の最終日には、ワークショップを開催し、ヒアリング調査の結果を囲んで、今後のプロジェクト展開などについての意見交換を行うなど、ガジャマダ大学との交流が十分な充実した研修となりました。

阪大とガジャマダ大学の学生によるワークショップ

調査の結果、大学が職人への教育や銀細工の PR など様々な取り組みを行っていることが分かりました。ここで重要なことは、大学が地域の内部と外部に向けた取り組みを同時に行っていることです。具体的には、大学付属のプロジェクト推進機関が地域と大学をうまく結びつけると同時に、大学教授が政府や企業など地域の外部からプロジェクト資金の獲得を行っていました。これにより、大学が地域と地域の外部を結ぶ重要な役割を果たしていることが分かりました。また、こうした役割を果たすためには、平常時に大学と地域の間に信頼関係を築いていたことが大きく寄与していることも明らかになりました。

ガジャマダ大学の学生と記念撮影（ボロブドゥール遺跡）

以上のことから、大学が中心となった震災復興まちづくりを行うためには、平常時に地域と大学の間に信頼関係を

築いておくことが重要であると考えられます。本学においては、その信頼関係は不十分であり、地域と交流できる環境づくりが求められています。地域と交流できる研究・教育拠点の設置や主体的な学生のボランティア活動に対する支援など、吹田、豊中、箕面の各キャンパスの周辺のまちにもっと目を向けることが必要だと考えられます。

研修期間：2008年9月1日～9日
研修場所：インドネシア ガジャマダ大学　等
メンバー：
工学研究科　博士前期課程　1年
　樽本和正・中　麻友・李　瑾・KHAERUNNISA
工学研究科　博士前期課程　2年
　梅田絵里子・山岸明日香・山本尚生・Rafeef Al Zoubi
工学研究科　博士後期課程　3年
　松本邦彦

平成20年度大阪大学「学生海外研修助成」事業報告会開催

平成20年度大阪大学「学生海外研修助成」事業に採択された学生グループによる報告会が1月15日(木)ICホールで行われました。この事業は、本学学生の積極性と企画力・実行力の向上を目的として、自らの企画により海外で交流・研修活動を行うグループを支援するため、平成14年度から実施されているもので、本年度は、経済学研究科深田洋輔君他3名による「米国における失敗に学ぶアントレプレナーシップ」、工学研究科樽本和正君他8名による「ジャワ島中部地震後のガジャマダ大学の取り組みに学ぶ大学を中心とした震災復興まちづくり」の2件の研修計画が採択され、両グループから、研修成果並びに海外での交流体験等について報告が行われました。報告会には、学生及び教職員約20名が出席し、報告内容に関して活発な質疑応答が行われました。

また、2月13日(金)には、総長室で両グループによる鷲田総長に対する報告会が、辻　毅一郎国際交流室長、留学生センター有川友子教授及び木内行雄国際部長同席のもとに行われました。1グループ10分という限られた時間の中、緊張した面持ちで研修成果の報告や大阪大学への提案が行われました。報告内容に関する質疑応答の後、総長から、両グループに対して、今回の研修成果を無駄にせず、後に続く者のために広報に努めてほしいと激励の言葉がかけられました。また、国際交流室長より、学生達の活発な応募状況を受け、来年度の助成を3グループに増やす計画であるとのお話があり、学生たちもとても喜んでいました。
当事業の詳細については、留学生センターホームページをご参照ください。
(http://www.isc.osaka-u.ac.jp/abroad/05.html#group)

(国際部学生交流推進課)

漢陽大学校（韓国）

Hangyang University

漢陽大学校は、1939年にソウルに設立された東亜工科学院を前身とし、その後、建国技術学院、漢陽工科大学を経て、1959年に漢陽大学校としてのスタートを切りました。1978年には京畿道安山市に第二キャンパスを設立しました。

教職員2,000人、学生数33,000人を擁する韓国でトップに位置づけられる私立の総合大学で、工科学部、建築学部、情報通信学部、医学部、人文科学部、社会科学部、自然科学部、法学部、経済金融学部、経営学部、師範学部、生活科学部、音楽学部、体育学部、工学部、国際文化学部、言論情報学部、科学技術学部、デジタル経済経営学部、デザイン学部、生活体育科学部があります。

特に工学分野が有名であり、また、政財界、芸能、スポーツ界などに多くの著名人を輩出しています。校訓は「愛の実践ー勤勉、奉仕、正直、謙遜」、シンボルは「獅子」です。

大阪大学は、産業科学研究所における1999年度から2008年度までの10年間にわたる日本学術振興会のアジア拠点大学交流事業等により、同大学との教員および研究者、学生の相互滞在、共同研究の実施、講義、講演、シンポジウム、ベンチャー企業の発足など数多くの成果を挙げてきました。この成果を基盤として、このたび、接合科学研究所と連携し、昨年12月16日の大学間学術交流協定の締結に発展したものです。

これにより、今後は、交流の幅が拡大し、幅広い分野にわたって、学生交流や研究交流が行われることが期待されます。

ウェブサイト：http://www.hanyang.ac.kr/english/

編　集　後　記

今年の春も、多くの阪大生が大阪大学から社会へと旅立ち、同じく多くの新阪大生を迎えました。今年の卒業式・大学院学位記授与式と入学式は、学部と大学院合同で大阪市中央体育館で挙行され、多くのご家族と一同に会した盛大な式となりました。本号にも掲載しております式での総長の言葉を胸に、それぞれの場所で頑張っていただきたいと思います。（瀬尾）

吹田キャンパス正門付近の桜

サイバーメディアセンター前の桜並木

自動車部

コンマ１秒にかける戦い

自動車部とはどんな活動をしているのか疑問に思われる方が多いと思いますが、私たちは主にジムカーナ・ダートトライアル・ラリーという３つの競技に力を注いでいます。

ジムカーナとは、ミニサーキットなどの舗装路にパイロンなどで作った１～２キロ程度のコースを１台ずつ走り、そのタイムを競う競技です。綺麗なラインを通りミスなく走り切って、コンマ１秒でもライバルを上回った時は最高の気分です。ダートトライアルは未舗装路、つまり土の上をジムカーナと同じ要領で走る競技です。車が普段ではありえないような動きをするので一度やったら病みつきになります。また、自動車部で行うラリーとは速さを競うものではなく、基本的に一般道を使い、指定されたチェックポイントへの到着時間の正確さ（リライアビリティーラン）を争う競技のことです。ラリーでは答えがその区間の走行速度となっている計算問題が配られ、ナビゲーターが問題を解いてはじき出した通りに走り、チェックポイントに１秒の誤差もなく到着したときの達成感は筆舌に尽くしがたいです。さらに、自動車部では車を速く走らせるだけではなく、車を安全に運転するための技術や装備についてしっかりと指導し、活動中の事故や怪我を未然に防ぐ努力も行っております。

自動車部は現在七大戦において３連覇を果たしており、４連覇に向けて部員一同が一致団結するとともに、強い大阪大学自動車部の伝統を受け継いで行きます。

部長　**寺島信也**（経3年）

〈コメント〉
自動車部は非常に楽しいです。でも、最終目標は常に「勝利」です！！自動車部をよろしくお願いします。

練習場所：大阪大学豊中キャンパスガレージ
練習日時：金曜日（部会）18：00～　月に１～２回走行会
部 員 数：15人
連 絡 先：岸本拓也（主務）
honttonakute-vvx.198000yen@docomo.ne.jp
TEL　090－7354－5196

トピックス

「大学の本領」ー関西からの提言ー開催

3月8日(日)大阪大学中之島センターにおいて、関西学士会開設記念企画「大学の本領」ー関西からの提言ーが開催されました。

この催しは、社団法人学士会の関西の拠点となる関西学士会が本学中之島センター内に設置されたことを記念し、大阪大学、京都大学、九州大学の共催で開催されたもので、多くの学士会会員が参加されました。

井口洋夫学士会常務理事の挨拶の後、本学の鷲田清一総長、京都大学の松本　紘総長、九州大学の有川節夫総長の3大学総長からの挨拶、理事・副学長による大学紹介が行われ、続いて、各大学から選抜された大学院生が登壇し、学生生活や大学に向けた様々な意見などを直接総長と討論し合う場が設けられ、本学からは、小野木　尚さん（国際公共政策研究科博士前期課程1年）、丸橋温美さん（工学研究科環境・エネルギー工学専攻博士前期課程1年）の両名が、各大学の学生と共に討論に参加しました。

鼎談（左から松本京大総長、鷲田阪大総長、有川九大総長）

3大学総長による鼎談も行われ、各大学における個性的な取り組みも紹介され、法人化後、大学を取り巻く厳しい環境のもと、それぞれの大学が個性を活かし、教育・研究活動のさらなる発展とすぐれた人材を世に送り出すことによって社会の信を得る社会貢献の在り方などについて各総長が熱く語られ、多くの参加者は熱心に耳を傾けていました。

がっちりと握手をする3大学総長

（企画部広報・社学連携事務室）

阪大 NOW　No.110　2009 4月号　　2009年4月20日発行

編集・発行　大阪大学企画部広報・社学連携事務室　〒565-0871　大阪府吹田市山田丘 1-1
TEL：06（6879）7017　　FAX：06（6879）7156
ホームページアドレス　http://www.osaka-u.ac.jp/

「阪大NOW」へのご意見、お問い合わせ、記事の提供等がありましたら、下記までお寄せ下さい。
E-mail : kikousyagakukouhou@ns.jim.osaka-u.ac.jp

この冊子は人類環境浄化のためのエコー認定の再生紙を使用しています。
000530